秋田県文化財調査報告書第112集

石名館遺跡発掘調査報告書

仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査

1984・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

秋田県の南東部に位置する仙北平野は、先人の残した数多くの文化遺産をかかえ、また、県内有数の穀倉地帯にもなっています。

農林水産省東北農政局では、農業用水の有効利用をはかるため、仙北平野農業水利事業を計画し実施してまいりました。本年度の事業区域内に、明治時代から著名な縄文時代晩期の石名館遺跡が所在するため、秋田県教育委員会は文化財保護の立場から協議を重ね、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

その結果、石名館遺跡は縄文時代中期、後期、晩期と、平安時代にまたがる複合遺跡であることがわかりました。

この調査成果を集録した本報告書が、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかなりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、この調査に御協力をいただきました東北農政局仙北平野農業水利事業所、六郷町教育委員会、仙南村教育委員会をはじめ、関係各位に厚く御礼を申し上げます。

昭和59年３月31日

秋田県教育委員会

教育長　斎　藤　　長

例　　言

1．本書は、東北農政局仙北平野農業水利事業所の昭和58年度仙北平野農業水利事業上総川排水路工事施行に伴い、仙北郡六郷町六郷字石名館59番地、同郡仙南村南町字石名館65番地２号他に所在する遺跡の一部が消滅することから、秋田県教育委員会が記録保存を目的に発掘調査を実施した石名館遺跡の記録である。

2．本遺跡の調査は、昭和58年２月21日から２月28日まで予備調査を実施したあと、昭和58年９月16日から10月30日まで実施した。

3．石器の石質鑑定は、秋田県立博物館嵯峨二郎学芸主事にお願いした。

4．須恵器の蛍光Ｘ線分析法による胎土分析・産地推定は、奈良教育大学理化学教室三辻利一教授にお願いした。

5．本遺跡の発掘調査・資料整理に際し、次の諸氏から御教示を賜わった。記して謝意を表する。（敬称略・順不同）

高橋喜則・高橋光宅（石名館遺跡出土遺物所蔵者）　庄内昭男（秋田県立博物館主事）
鈴木克彦（青森県立郷土館研究員）　成田滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター主事）

6．本書の主たる執筆と編集は桜田が行ったが、出土遺物のうち、縄文土器を池田洋一、石製品を佐藤雅子が担当した草稿を桜田が加除筆した。

目　　次

序

例　言

第１章　はじめに……1

第１節　発掘調査に至る経過……1

第２節　調査の組織と構成……1

第２章　遺跡の立地と環境……2

第１節　自然的環境……2

第２節　歴史的環境……4

第３章　発掘調査の概要……8

第１節　遺跡の概観……8

第２節　調査の方法……10

第３節　調査の経過……10

第４章　調査の記録……13

第１節　遺構……13

第２節　遺物……14

1．縄文時代の遺物……14

(1)　土器……14

(2)　石製品……32

2．平安時代の遺物……66

(1)　土器……66

(2)　石名館遺跡出土須恵器の胎土分析……66

第５章　まとめ……72

第1章　は　じ　め　に

第1節　発掘調査に至る経過

東北農政局仙北平野農業水利事業所では、昭和58年度仙北平野農業水利事業として、仙北郡六郷町と同郡仙南村を流れる上総川排水路工事を計画・施行したが、同事業区域内に六郷町石名館遺跡（全国遺跡地図28－４）と仙南村石名館遺跡（全国遺跡地図28－56）が所在することが判明したため、秋田県教育委員会と当該遺跡の取り扱いについて協議した。既に計画に従って排水路が建設されており、設計変更等は不可能であることから、昭和58年度に発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。しかし、その後、東北農政局側に、排水路の集中・分岐する部分の工事を昭和57年度中に完成させなければならない事情が生じたため、再度秋田県教育委員会と協議を重ね、その一部50㎡を昭和58年２月21日から２月28日まで予備調査として発掘調査を実施した。この予備調査では、遺構３基と多量の縄文土器・石器とともに、陶磁器、土製品、木製品、堅果類が出土した。

昭和58年９月13日に東北農政局仙北平野水利事業所小原弥四郎工事課長、県教育庁文化課冨樫泰時学芸主事、県埋蔵文化財センター佐藤良太郎所長、岩見誠夫副所長、桜田　隆文化財主事が調査区である水路の遮断と切替えの可否、作業及び道路の安全対策、調査予定区内の住家の移転時期、排土地確保等、発掘調査全般にわたって打ち合わせを行い、16日から発掘調査に入った。

第2節　調査の組織と構成

遺跡所在地	秋田県仙北郡六郷町六郷字石名館59番地
	秋田県仙北郡仙南村南町字石名館65番地２号 他
調査期間	昭和58年９月16日～10月30日
調査予定面積	1,110㎡
調査面積	700㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	桜田　隆　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
	橋本高史　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）（予備調査）
	小林　克　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）（予備調査）
調査補佐員	池田洋一　佐藤雅子
	栗沢光男　小林　弘　高橋一則　（予備調査）
調査作業員	佐藤徳治郎　佐藤広樹　高橋美浩　藤井孝喜　梅川三四郎　佐々木勇四郎

坂本新一郎　加藤教光　高橋敬七　高橋喜則　小畑福治郎　佐々木重治
伊藤金一郎　又井　薫　高井ミヨ　高橋シモ　高橋シズエ　能登屋マサ子
鍵谷文子　小原リサ

整理作業員　高階恵子　進藤里美　長谷川順子　高橋フサ子　継田タツ　山田美喜子
金子龍子　越後谷晴美　佐藤仁美　藤井幸誠

調査協力機関　東北農政局仙北平野農業水利事業所　六郷町産業課　六郷町教育委員会
仙南村教育委員会　東鉄工業株式会社仙台支店仙北作業所　徳倉建設株式会社仙台営業所仙北作業所

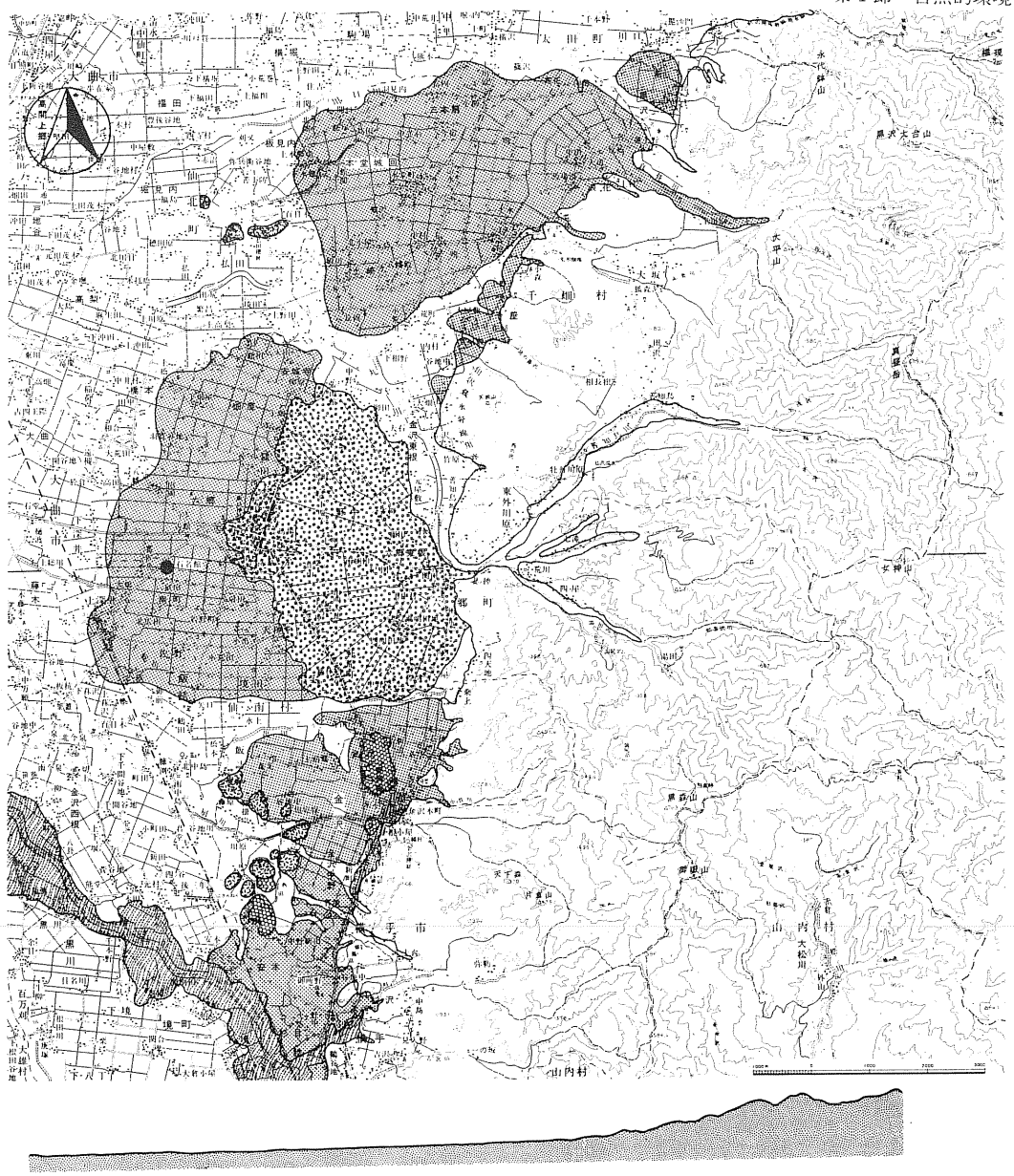
第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境（第１図）

秋田県南東部に位置する横手盆地は東西約12－15km、南北約50kmの細長い盆地である。盆地東側には奥羽脊梁山脈を形成する山々が連なっている。この横手盆地は断層を伴った構造性盆地であり、山地から削剝、運搬されてきた大量の土砂は、盆地に出ると急激な営力の低下により扇状地を形成している。盆地東縁部の扇状地は、北から本堂城回を中心とする千屋扇状地、六郷町を中心とする六郷扇状地、金沢から御所野にかけて小規模に広がる金沢扇状地、御所野扇状地などが認められ、典型的な複合扇状地状の地形を呈している。御所野扇状地が段丘化している他は段化が認められず、それぞれ西方で沖積面下に没している。これら扇状地は、いずれも滞水層を形成している。

沖積低地を構成するものは、古期および新期の河川堆積物であり、前者は横手盆地を広く覆い、後者は現河川沿いに分布する。

石名館遺跡は、真昼岳（1059.9ｍ）、女神山（955.8 ｍ）、740.9ｍ 頂高から流下する善知鳥川、七滝川、湯田沢川が運搬してきた土砂が堆積してできた六郷扇状地の古期沖積扇状地の扇端部に立地する。この３本の河川の流域には、亜炭を含む石炭安山岩質凝灰岩、粗粒玄武岩、安山岩質火山角礫岩、変質輝石安山岩、輝石安山岩、砂岩、シルト岩、泥岩を主体とする千屋層、弥勒層、真昼川層、湯田層の各層が確認されている。また遺跡北方には硬質泥岩の吉沢川層、南には、ハリ質安山岩、普通輝石紫蘇輝石安山岩、浮石凝灰岩、砂質凝灰岩の弥勒層が認められる。遺跡が立地する地点で採集した礫の石質は、頁岩、泥岩、硅岩、安山岩、玄武岩、流紋岩、凝灰岩、砂岩が主体をなしているが、石炭、褐鉄鉱塊も少量確認できる。また、石製品に加工された石片の石質は、頁岩、安山岩、石英安山岩、泥岩、黒色泥岩、凝灰岩、緑色凝灰岩、玢岩、石英、黒曜石、粘板岩、玄武岩、凝灰質泥岩、砂岩となっており、これらの石質の大部分がこの盆地東縁部で確保できる。



第１図　遺跡付近の地形と地質

遺跡の位置は、北緯39°25′、東経140°32′、標高35～36ｍで、奥羽本線飯詰駅の北東1.75kmの地点である。行政区域では仙北郡六郷町と同郡仙南村にまたがっており、『秋田県遺跡地図』（秋田県教育委員会1976）によれば通番号626 石名館　仙北郡六郷町六郷字石名館59－61、通番号724 石名館　仙北郡仙南村南町字石名館35　の２遺跡になっているが同一遺跡である。

遺跡の現状は、宅地、水田、水路となっており、近くを上総川、旭川が流れている。

参考文献

秋田県　1976　秋田県総合地質図幅『六郷』

秋田県教育委員会　1976　秋田県遺跡地図

第２節　歴史的環境（第２図）

石名館遺跡は、縄文時代中期から晩期、平安時代及び中世に営まれた遺跡であると考えられている。本節では、石名館遺跡の位置する横手盆地内の遺跡を概観し、その変遷の中での石名館遺跡を明らかにしたいと考える。

横手盆地の旧石器時代の遺跡として盆地南西縁辺部の羽後町新成（64）、五把出山（77）、南東縁辺部の横手高校裏山（35）があげられる。新成ではナイフ形石器７点、掻器２点の他中形石刃が、五把手山からはナイフ形石器１点、彫刻器１点が、横手高校裏山からは黒曜石製彫刻器１点が出土している。

縄文時代の遺跡は各期を通じ非常に多い。前期では横手市鳥子山（36）、雄物川町羽根子沢（49）、羽後町松ケ台（75）、小松（76）、松の宮（73）が知られている。中期では、神岡町愛宕下（１）、千畑村雲穣野（17）、一丈木（19）、内村（14）、六郷町鎧ケ崎Ⅲ（23）、羽後町新城川（60）、貝沢（78）、横手市中杉沢（34）、仙南村小出（28）、飯詰（32）が知られている。後期では、大森町末野台（33）、平鹿町明沢（68）、羽後町林崎（59）、大雄村浅舞Ⅰ（52）、湯沢市高屋敷（72）が知られている。晩期では、神岡町岳下（２）、岳裾（３）、南外村中野（９）、大曲市鳥居Ⅱ（４）、成沢Ⅰ（７）、成沢Ⅱ（下成沢）（５）、成沢Ⅲ（80）、千畑村外川原Ⅱ（20）、六郷町鎧ケ崎Ⅳ（23）、上四天地（24）、四天森（25）、鎧ケ崎（26）、くさじや（27）、蘇沢（21）、仙南村飯詰、横手市オホン清水（40）、庭先(55)笹崎（53）、長谷（54）、平鹿町阿弥陀田Ⅰ（65）、阿弥陀田Ⅱ（67）、浅舞Ⅰ、古館Ａ、（51）、上都（56）、平沢Ⅰ（57）、増田町八木（70）、平鹿（69）が知られている。

弥生時代の遺跡としては、大曲市宇津台（８）、横手市手取清水（39）、平鹿町鳥越森(66)平鹿町平沢Ⅱ（58）、雄物川町十三塚Ⅲ（79）、湯沢市椋の上（71）が知られている。

古代の遺跡としては、雄物川町蝦夷塚（47）、仙南村保土森（31）、六郷町石森（22）が墳墓として、仙北町・千畑村払田柵跡（15）、羽後町ひばり野Ⅰ（61）が城柵跡として、仙南村飯詰、平鹿町中藤根（45）、下藤根（46）、羽後町城神廻り（63）、大曲市藤木（12）が集落遺跡として、大曲市成沢（６）、九十九沢（10）、雄物川町末館（50）、横手市物見（30）、郷士館（43）、羽後町七窪（62）、平鹿町竹原（41）は須恵器窯跡として知られている。また横手市一ノ口から八ッ口にかけては条里制遺跡として知られている。横手市金沢柵跡は、後三年の役擬定地とされている。

第2図　周辺の遺跡

中世に入ると城館が多数構築され、大曲市四十二館（11）、六郷町古館（13）、千畑村本堂城（平城）（16）、本堂城（山城）（18）などがあげられる。

横手盆地の旧石器時代から中世までの遺跡を概観したが、石名館遺跡と密接に関連するものとして縄文時代後期・晩期・古代窯跡・集落と中世城館であろう。特に古代窯跡は、石名館出土須恵器の生産地を推定するうえで重要である。

参考文献

武藤一郎　1925　「仙北郡六郷東根村史蹟調査記」　『秋田考古会誌』1巻2号

武藤一郎　1925　「羽後仙北郡六郷東根村古墳と蕨手刀」　『考古学雑誌』15巻12号

武藤鉄城　1931　「羽後石名館出土の木製品」　『史前学雑誌』3巻4号

深沢多市　1932　「金沢柵と金沢八幡神社」　『秋田県史跡名勝調査報告第1』

高橋直一　1933　「羽後石名館の石器時代遺物」　『考古学雑誌』23巻1号

小西宗吉　1933　「羽後国石名館発掘の土偶土版等について」　『人類学雑誌』5巻2号

上田三平　1936　「払田柵址」　『史蹟調査報告』3

武藤鉄城　1949　「秋田県仙北郡九十九沢窯跡」　『日本考古学年報』2

武藤鉄城　1957　「秋田県仙北郡雲稷野遺跡」　『日本考古学年報』5

文化財保護委員会　1959　「秋田県平鹿郡雄物川町大字造山蝦夷塚出土勾玉等」　『埋蔵文化財要覧』

秋田県　1960　『秋田県史考古編』

伊藤信雄　1960　「東北北部の弥生式土器」　『文化』24巻1号

冨樫泰時　1962　「秋田県横手市発見の彫刻器」　『若木考古』63・64

冨樫泰時　1963　「羽後町五把手山発見の石器について」　『秋田考古学』22巻

豊島　昂・冨樫泰時　1963　「秋田県羽後町土館新成発見の石器について」『上代文化』33号

大和久震平　1963　「平鹿郡雄物川町末館窯跡発掘報告」　『雄物川町郷土史資料』第3集

山下孫継　1966　「椋の上遺跡」　『北方考古』2号

秋田県教育委員会　1967　『足田遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第10集

秋田県教育委員会・横手市教育委員会　1967　『金沢柵跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第12集

須藤　隆　1970　「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」　『文化』33巻3号

半田市太郎　1971　「飯詰竪穴群」　『秋田県文化財』

奈良修介・豊島　昂　1972　『秋田県の考古学』

羽後町教育委員会　1972　『足田門田遺跡発掘調査報告書』

横手市教育委員会　1973　『中杉沢遺跡発掘調査概報』

秋田考古学協会　1974　『中藤根遺跡』

大和久震平　1974　『手取清水遺跡発掘調査報告書』

秋田県教育委員会　1975　『成沢遺跡発掘調査報告』秋田県文化財調査報告書第36集

秋田県教育委員会　1976　『下藤根遺跡』秋田県文化財調査報告書第39集

横手市教育委員会　1976　『郷土館窯跡』

秋田県教育委員会　1976　『秋田県遺跡地図』

横手市教育委員会　1978　『大鳥井山Ⅰ―横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報―』

杉渕　馨　1981　「物見窯跡について」　『秋田地方史論集』

大曲市教育委員会　1982　『四十二館発掘調査略報』

文化庁　1977　『全国遺跡地図　秋田県』

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

石名館遺跡は、小西宗吉氏の「羽後国石名館発掘の土偶土版に就いて」（史前学雑誌第５巻第２号）の「緒言」によれば本遺跡は秋田県仙北郡六郷町字石名館にあり、「明治28年頃より同35年頃に亘り田畑の耕作により自然出土せる縄紋土器数個石器数十個出土せるも先住民族の遺跡として登録せられしことなかりしが、昭和５年11月下旬より昭和７年８月に亘る発掘により土偶・土版・岩版・土器・石器・骨角器・植物質製品・同食料品等を発掘し本県に於ける縄文系統の遺跡として世に知られることとなった。」遺跡である。小西宗吉氏は同報告の「遺跡の状態」の項で土層・包含層について記述しており、表にしている。

地　　質		厚　　サ	摘　　要
黒色	腐蝕質壌土	５寸 ― １尺	耕　地
黒色 朱末	礫質壌土	１寸 ― ２尺	遺物包含
黒褐	砂質粘土	１寸 ― ２尺	同　上
青褐	泥炭層（或は粘土）	３尺以上の深さ	植物性遺物或は底土

この報告では、遮光器・土偶・土版・凝灰岩製岩版について論究されているが同時に、木製リンガ１個、石製リンガ２個、高さ25cmの紋様部に朱を沈下した壺１個を出土したことにも触れている。この小西論文が発表される前に出土した木製品１点について、武藤鉄城氏が「羽後国石名館出土の木製品」と題し、木製リンガについて史前学雑誌第３巻第４号に発表しているこの中で武藤氏は、「諸遺蹟は、亀岡式土器製作の絶頂期に相当するものと認められるが、包

含層下位が薄い乍らも水辺草の泥炭層を構成し、一部分はトチ・クルミ等の堅果から成る特種泥炭層であることは注目に値する」としている。そしてこの木製品が、土川村殿屋敷出土の朱漆櫛、荒川村奥山出口竪穴出土の朱色漆壷に次いで本県出土石器時代植物製品は仙北郡に於いて３種となったと報じている。

また、考古学雑誌23巻１号（昭和８年１月刊行）の雑録に、「六、羽後石名館発見の石器時代遺物」として、小西宗吉氏が、東京帝室博物館へ持参した石名館遺跡出土の遺物の中から高橋直一氏が顔面を彫刻した岩版、魚形の岩版について記述している。

小西宗吉氏の発掘調査の後、好事家の手による遺物の出土が相次いでいる。石名館遺跡の所在地に在住する高橋喜則氏によれば、高橋喜則氏の父親は自宅の縁の下まで掘り尽したという。この出土品は、石名館遺跡を見学に来た東京の学者達が、「せっかくここまで来たのだから一つくれ」と要求し、優品のほとんどが散逸してしまったとの事である。現在、縄文土器、玉類、石斧、耳飾、石匙、石錘、土偶、岩版、土版、石鏃、石皿、石棒、丸石、木製品等の石名館遺跡出土の遺物は、地元の高橋喜則氏、高橋光宅氏、伊藤熊吉氏が所蔵している他は、東京国立博物館、秋田県立博物館、青森県立郷土館風韻堂コレクション中にいくつかみられるにすぎない。

また、石名館の地名については、中世城館の所在を想起させられるが、現在ではその面影すらない。昭和20年代前半に実地踏査され、軍事学と歴史地理学の両面から考究した沼館愛三氏は、その遺作『出羽諸城の研究』の中で「石名館　六郷町西南約１粁の石名館部落にあり、是亦遺構頽廃して僅かに旧時を偲ぶのみである。六郷氏旧臣の居た所といわれる。戦術的に見れば居館式のもので抗戦力は致って薄弱である。」と述べられている。

引用・参考文献

武藤鉄城　1931　「羽後国石名館出土の木製品」『史前学雑誌』第３巻第４号

小西宗吉　1933　「羽後国石名館発掘の土偶土版等に就いて」『史前学雑誌』第５巻第２号

高橋直一　1933　「六、羽後石名館発見の石器時代遺物」『考古学雑誌』23巻１号

奈良修介・豊島　昂　1967『秋田県の考古学』郷土考古学叢書３

沼館愛三　1980　『出羽諸城の研究』

青森県立郷土館　1973　『風韻堂コレクション目録』

秋田県立博物館　1982　『秋田県立博物館収蔵資料目録　考古』

秋田県教育委員会1976　『秋田県遺跡地図』

第２節　調査の方法

1.　調査区の設定（第３図）

本遺跡の発掘調査の対象となったのは、六郷町と仙南村飯詰を結ぶ県道の東側に隣接する上総川排水路の総延長173.23ｍ、幅７ｍのうち、まだ移転が完了していない住家部分を除く1110㎡である。ほぼ直線であることから、仙北平野農業水利事業所が打設しているNo.49とNo.50の杭を結ぶ線を基準線とし、No.49を基準点として10ｍ間隔で杭を打設した。その後、基準線と直交する線を求め区割した。No.49の西側にも10ｍ離して杭を打設し、No.１グリッド、No.49から東側10ｍまでの区画がNo.２グリッド、以下No.３～No.19グリッドまで設定した。調査記録へのグリッドの表示は、１Ｇ、２Ｇ……19Ｇとした。

2.　調査の方法

２月に実施された予備調査の結果と過去の調査記録から、調査を実施するにあたり、次の諸点について資料が得られるよう努めることとした。

① 小西宗吉氏の記録及び予備調査において検出されている泥炭層の確認と、植物性遺物の検出及びその共伴遺物を正しく把握する。

② 土師器・須恵器・陶磁器類が出土しているので、上部に当該時期の包含層・遺構が存在するかどうか把握する。

③ 遺物は１点１袋あるいは一括１袋とし、出土グリッド、遺物の種類、遺物番号、出土層位、出土年月日の記入された遺物カードを同封する。

④ 写真撮影は、図面記録では表現しきれない状況等を的確に表現するため、モノクロネガフィルム・リバーサルフィルムを使用する。

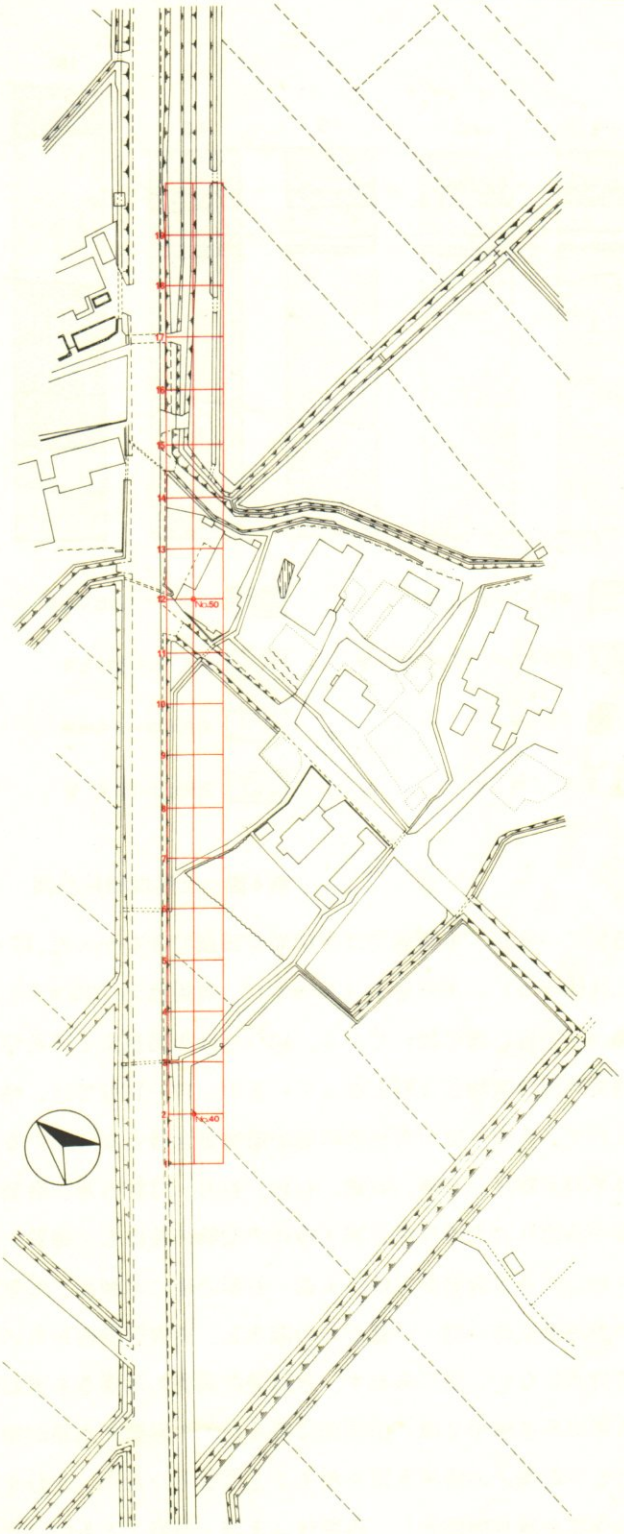
第３節　調査の経過

本遺跡の調査は、９月13日に仙北平野農業水利事業所との打ち合わせを行ったあと、９月16日に発掘器材を搬入し、グリッド設定等発掘の諸準備を行い、９月19日から作業員20名を投入して調査を開始した。

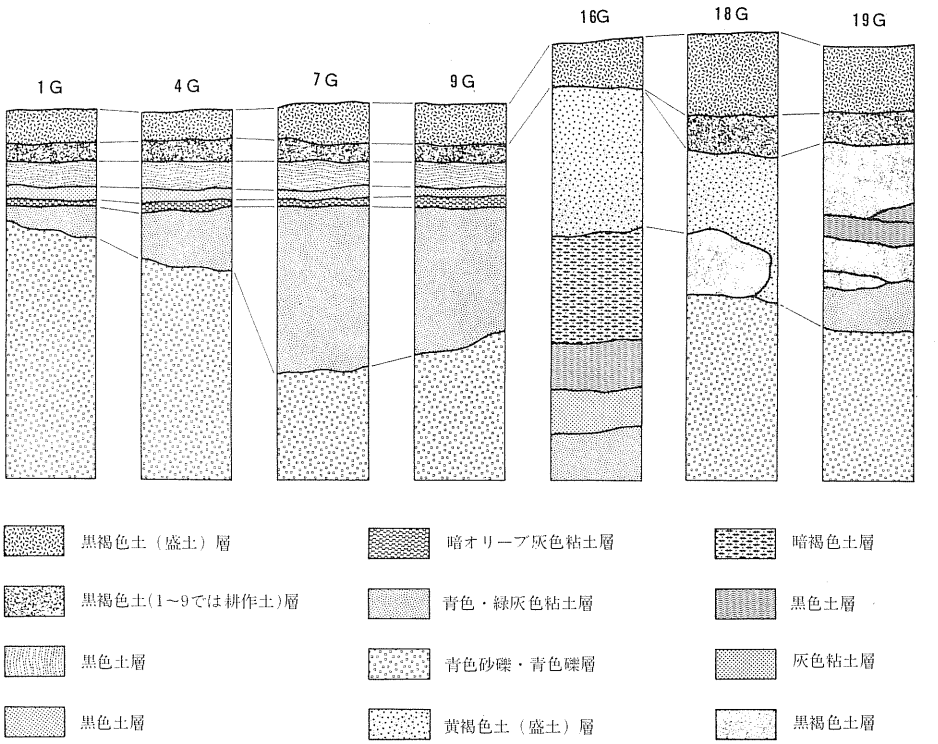
予備調査により17～19Ｇの状況は一応把握できるが、１～10Ｇまでは未確認であることから各グリッド２～３ヵ所任意に１×１ｍの範囲での試掘を行い、その状況把握に努めた。その結果１－３Ｇでは水田耕作層下が直接砂質粘土・礫層となっており、遺物包含層及び遺構は検出されなかった。４～６Ｇでは10～30cmの盛土下に水田耕作土（20cm）があり、その下の黒色土（20cm）が遺物包含層となっている。その下は青色砂質粘土（50cm±）、砂壌土（70cm±）と続いている。７～９Ｇでは耕作土（20cm）下の黒色土（20cm±）と、砂質粘土・砂壌土（110

cm±)下の黒色土（10～20cm）が遺物包含層となっている。その下は青色礫層と続いている。しかし、地表下 100cm±のあたりから湧水が激しく、水中ポンプで揚水しても、揚水能力以上の湧水で作業は困難であった。8Gでは上部黒土層中から石鏃、石刀、磨製石斧、凹石、縄文土器片の他に土師器片、須恵器片、陶磁器片が出土しており、撹乱されている可能性が強いと観察された。17～19Gは、稲刈り前の水落し時期と重なっているため、現水路の上流での遮断・切替えも検討されたが、この水路が農業用水ばかりでなく、消防用水利の役目も担っており、勝手に遮断・切替えが出来ないことが明らかとなり、隣接地内あるいは調査区内での水路変更を検討し、その結果、隣接地内に水路を先行させた。道路側は危険防止のために傾斜する法面を設定し、現水路の堆積土砂を重機で排除した。

予備調査時の観察によれば、16Gと17Gの境界付近の東側では泥炭層、青色砂礫層、緑灰色粘土層、緑黒色土と堆積



第3図　地形及びグリッド配置図



第４図　土層堆積柱状図

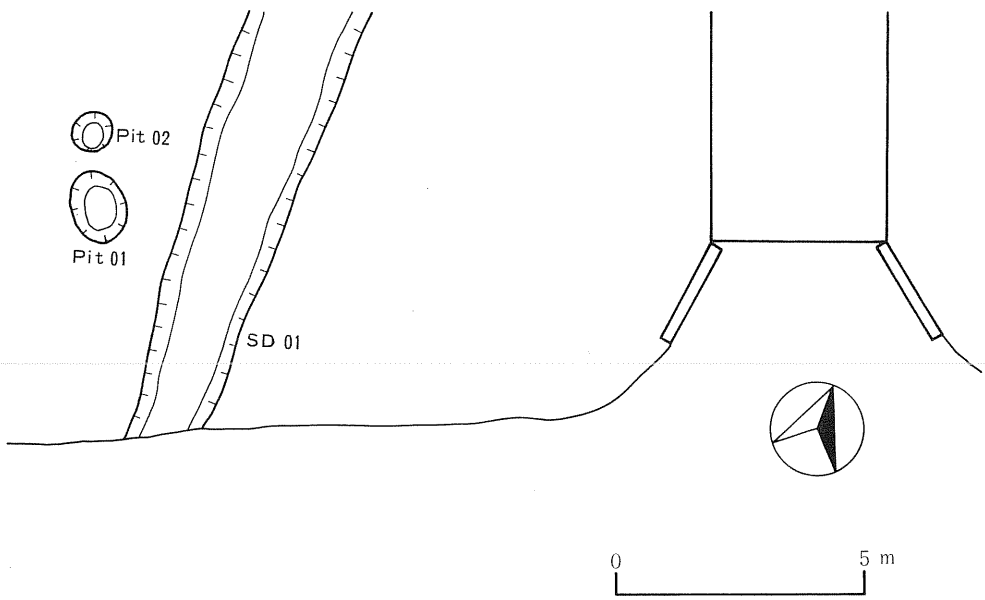
が続いているが、本調査では泥炭層が確認できなかった。17～19Ｇ道路側の壁面での観察では、盛土（60cm±）、黒褐色土（30cm±）、黄褐色土（95cm±）、青色粘土（30cm±）、青色砂礫（30cm）、青色礫と続いている。16Ｇでは黒褐色土と灰色粘土（緑灰色粘土層の上部に堆積）が縄文時代の遺物包含層となっているが、17～19Ｇでは、粘土層中にはほとんど遺物の出土が見られず、その下位の青色砂礫層が遺物包含層となっている。この包含層は、中期から後期にかけての土器片、石鏃、石錐、石匙、石刀、打製石斧、磨製石斧、石棒、石皿、凹石、不定形石器や漆塗りの土器片など縄文時代の遺物の他にも土師器、須恵器片を若干混入させている。16～19Ｇの各包含層からは、土器、石器の他に木製品、堅果類も多量に出土している。17～19Ｇの調査は水路の遮へい部からの漏水と、調査区壁面からの湧水が激しく、水中ポンプ２台で常時排水したが、間にあわず、水路発掘調査の困難さを再認識させられた。また、精査中２回、写真撮影の準備中２回、山間部に降った雨の影響で水路が増水し、切り替え水路から水があふれだし、乾燥中の隣接水田を浸すことになったため、止むを得ず調査区内を通水させた。このため作業が数日間停止し、再開後に土器・石器とともに、なまず、どじょう、ふななども収納された。

10月15日には１－６Ｇ、16－19Ｇの精査が終了し、７～10グリッドの上部包含層を精査。その下部の青灰色粘土層が 120cm±と厚いため、重機で排除し、下部包含層を精査した。この結果、下部包含層とした黒色土は非常に薄く、小範囲のもので、遺物も縄文土器の小破片が数片出土したにとどまる。10月29日に精査完了し、写真撮影を終えた。10月30日発掘器材を搬出し調査を終えた。

第４章　調査の記録

第１節　遺　構（第５図）

遺構は予備調査時に16Ｇ灰色粘土層上面で検出された溝状遺構（ＳＤＯ１）１条、柱穴様ピット２ヵ所（Pit 01, Pit 02）の３遺構にすぎない。



第５図　遺構実測図（16Ｇ）

溝状遺構（SD 01）

16Ｇの現水路右岸の灰色粘土層上面で検出された。長さ3.08cm、上幅53～80cm、深さ18～20cm、底幅35～90cmで、ほぼ南－北に走っている。この遺構の中からは刻みのある木材とスタンプ状土製品が出土している。

柱穴様ピット（Pit 01．02）

溝状遺構の西側で検出された。Pit 01は、開口部長径45cm、短径35cm、深さ40cm、下底部長径32cm、短径20cmの楕円形プランを呈するピットで柱痕跡が確認できた。Pit 02は、開口部直

径35cm、深さ20cm、底径25cmの略円形プランを呈するピットである。柱痕跡は確認できなかった。いずれも灰色粘土層の上面で検出されている。

これら３遺構の構築時期は、灰色粘土層下半から縄文後期末葉、上半から晩期の土器群が出土していることと、遺構のプラン確認面が灰色粘土層上面であることから縄文時代以降の所産と考えられる。

第２節　遺　物

１．縄文時代の遺物

(1)　土器（第６図～第15図）

出土した土器は整理用コンテナで約40箱分である。このうち復原できたのは６個体で、他はすべて小破片である。これらの土器の大多数は、17～19グリッドの青色砂礫層から出土きている。この青色砂礫層からは、土師器、須恵器、陶磁器も出土していることから、縄文時代晩期以後の二次堆積の可能性が強く、当時の原位置を保つものとは考えられない。このことから、現地では出土状況を把握し、層位的な遺物の取り上げも行ったものの、層上部、層下部から出土する遺物が製作・使用された時期の差を意味するものではない。

従って、出土した土器は従来の土器分類・編年に基づいて分類するが、流水によると見られる器表面の磨滅した土器片が多く、分類・図化できるものは僅少である。

出土した土器の中には中期に属する結節縄文の施文された極小破片もわずかに見られるが、本稿では、後期前葉、後期中葉、後期後葉、晩期前葉、晩期中葉、晩期後葉の６群に分け、更に各群をその文様構成等により類別する。

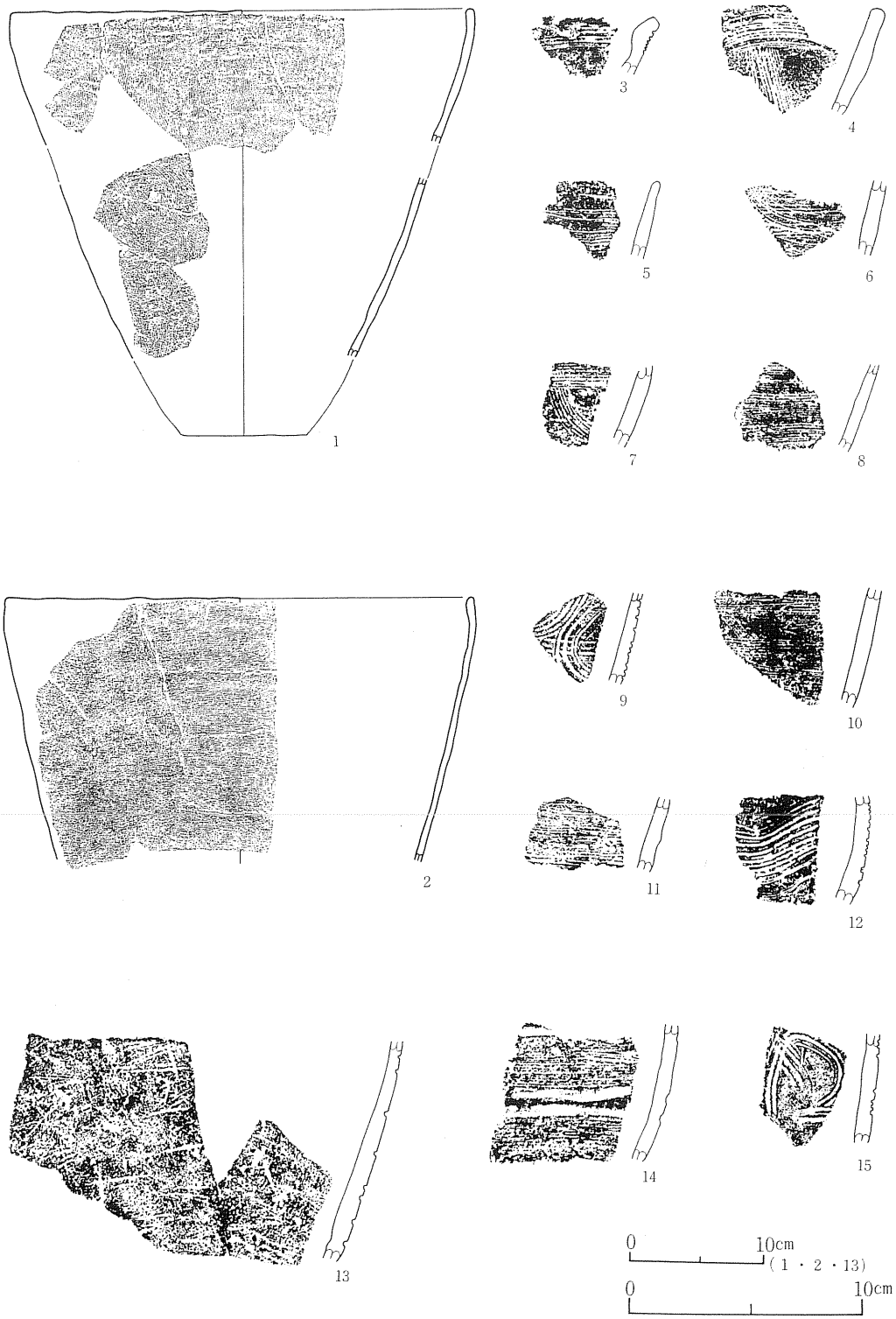
後期前葉の土器（第９図49）

口縁部にＬＲ縄文を施文後、沈線を鉤手状に巡らし、口縁部文様帯下方を磨消している深鉢形土器である。胎土は緻密で、焼成が極めて良好で堅緻なつくりとなっている。内面はよく磨かれている。

後期中葉の土器（第６図１～15・第７図16～24、第８図27～32・34・35）

この後期中葉の土器群は、刷毛目状文の施文された類（１～12・14・15）、箆なでされた類（13）、箆削りされた類（16・18）、無文の類（19～24）、縄文施文後に沈線区画し列点文を加えた類（27～31）、口縁部に連続刺痕列と沈線を施文する類（32・34）、内外面沈線の施文された類（35）に類別できる。刷毛目状文の施文された類は、更に帯状に施文されるもの（1・３～７・９・12・15）、器面全体を横位に施文するもの（２・８・10・11）、沈線区画されるもの（14）に細分できる。器形はいずれも深鉢形を呈すると思われる。

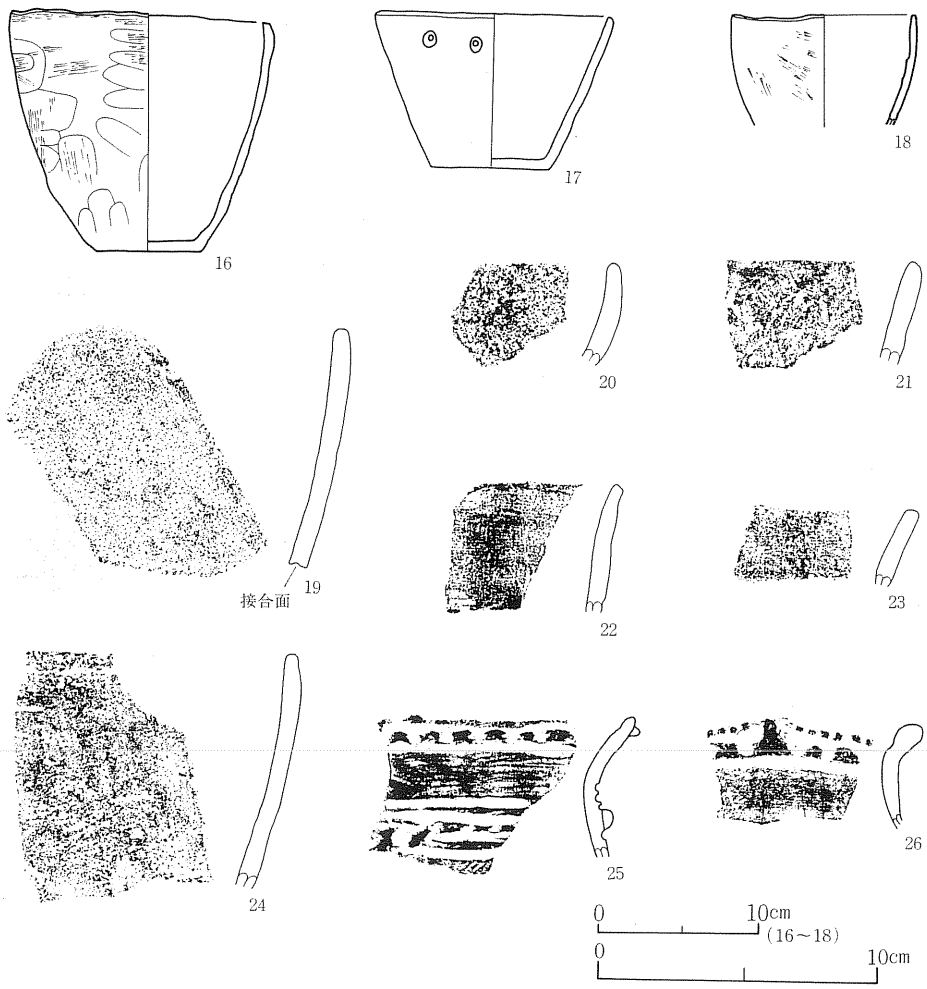
箆なでされた類（13）は、削り込みにより沈線状くぼみがみられ、あたかも入組文がくずれ



第６図　土器拓影図(1)

た文様のようにも観察される。

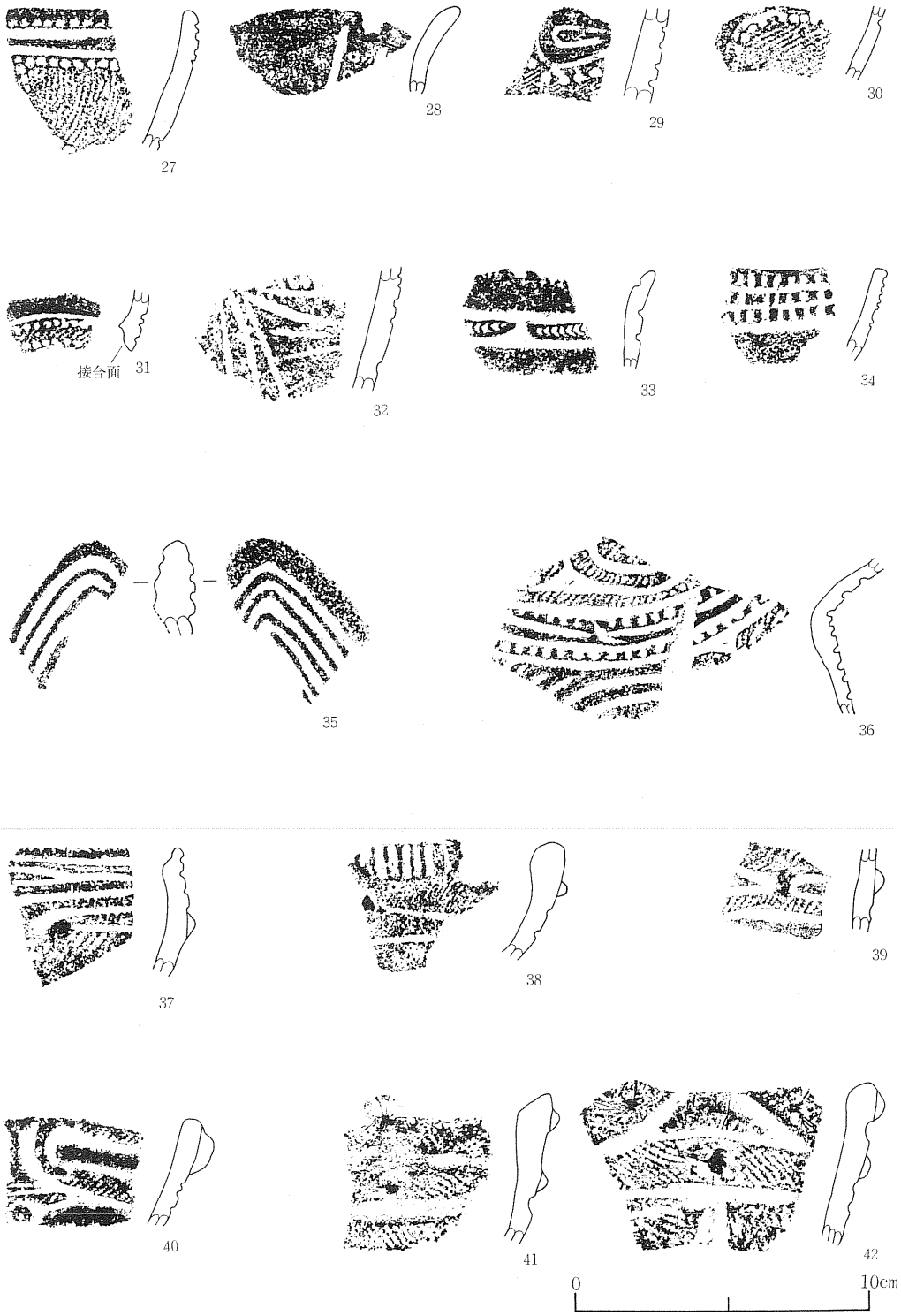
ＬＲ縄文施文後に沈線区画し、列点文を配した類、連続刺痕列の類、内外面沈線の類は加曽利Ｂ式土器併行の深鉢形土器と考えられる。



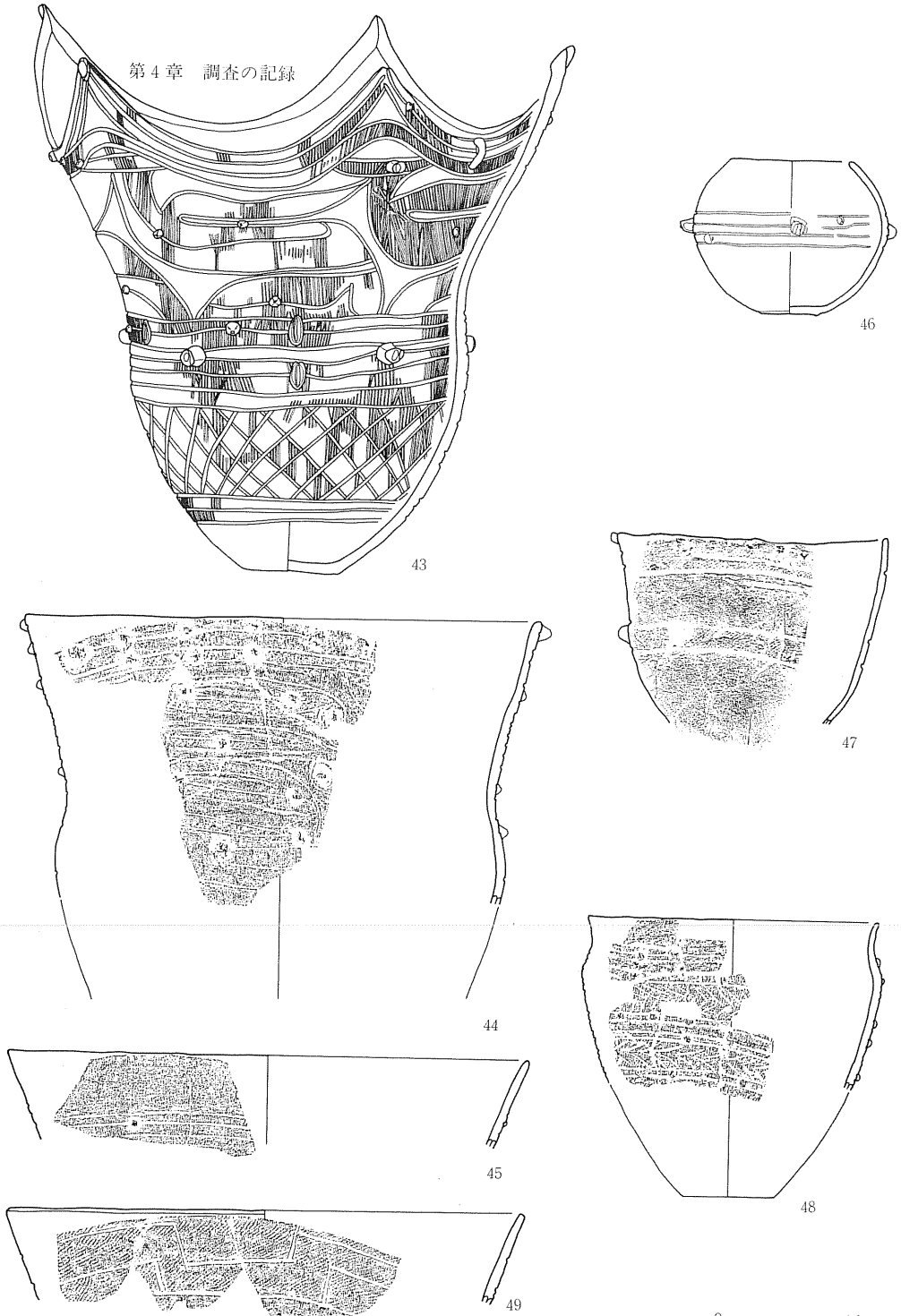
第７図　土器拓影図(2)

後期後葉の土器（第８図38～42・第９図43～48）

所謂瘤付土器様式である十腰内Ｖ式土器併行の土器群である。この土器群は、縄文・沈線区画・磨消後に貼瘤された類（38～42・47）、入組帯状文に貼瘤された類（43・44）、数条の平行沈線施文後に貼瘤された類（45・46）、２段の沈線区画帯内に上・下段逆向きに沈線羽状にを充填後、貼瘤された類（48）に類別される。43は細かい刷毛目状文が地文として施文されているが、44は磨滅により入組帯状文内の充填文様が不明である。器形は深鉢が主体をなし、壷、浅鉢は各１点である。深鉢のうち43・44は胴上半でくびれる所謂キャリパー形を呈し、48は頸部がくびれる器形を呈する。



第８図　土器拓影図(3)



第９図　土器拓影図(4)

晩期前葉の土器（第10図50～76）

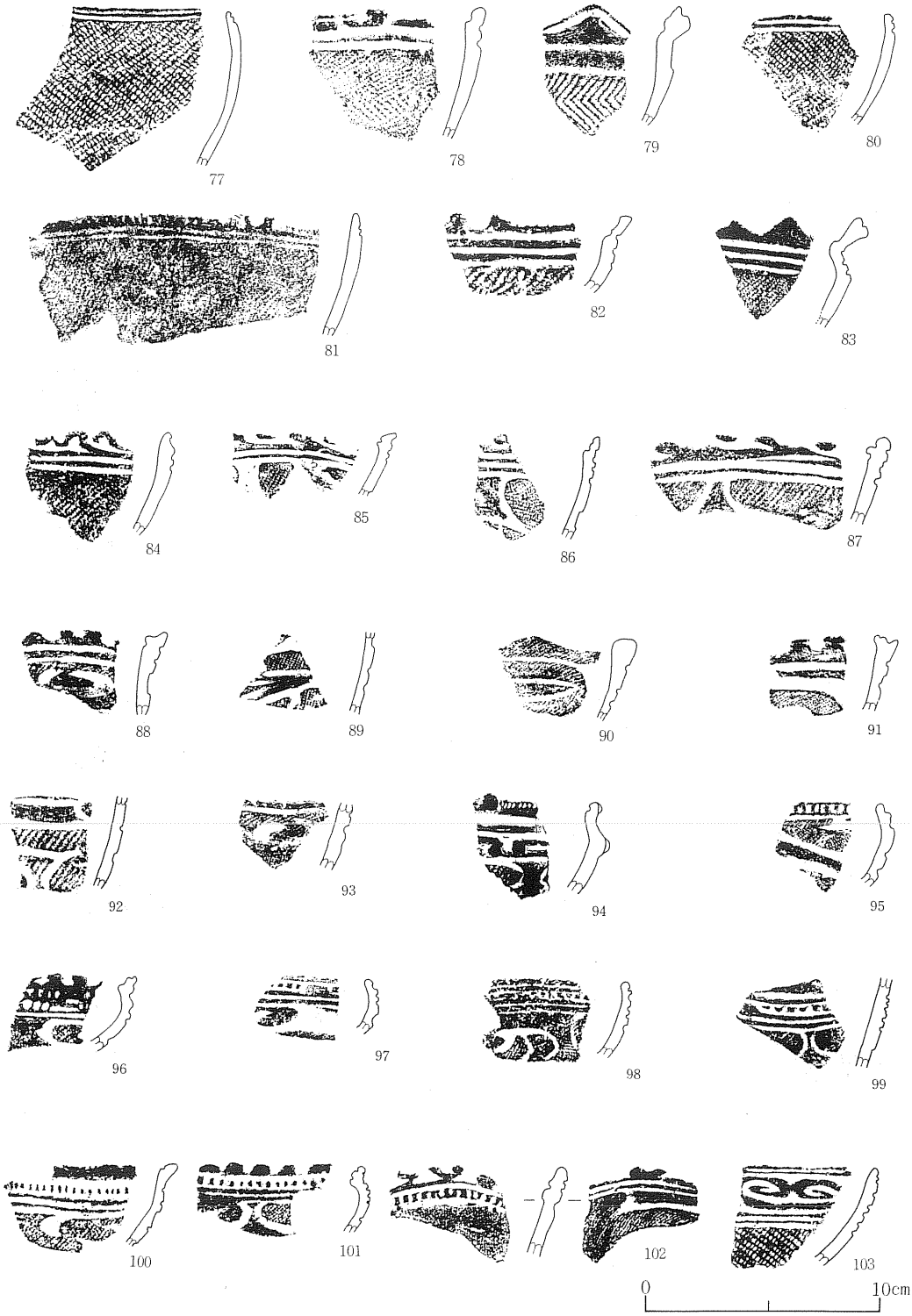
入組三叉文に代表される前半の大洞Ｂ式土器様式の類（50～57）、羊歯状文に代表される大洞Ｂ－Ｃ式土器様式の類（58～76）に大別される。

大洞Ｂ式土器様式の類は、入組文（50～53）、入組三叉文（54・55）、玉抱三叉文（56・57）

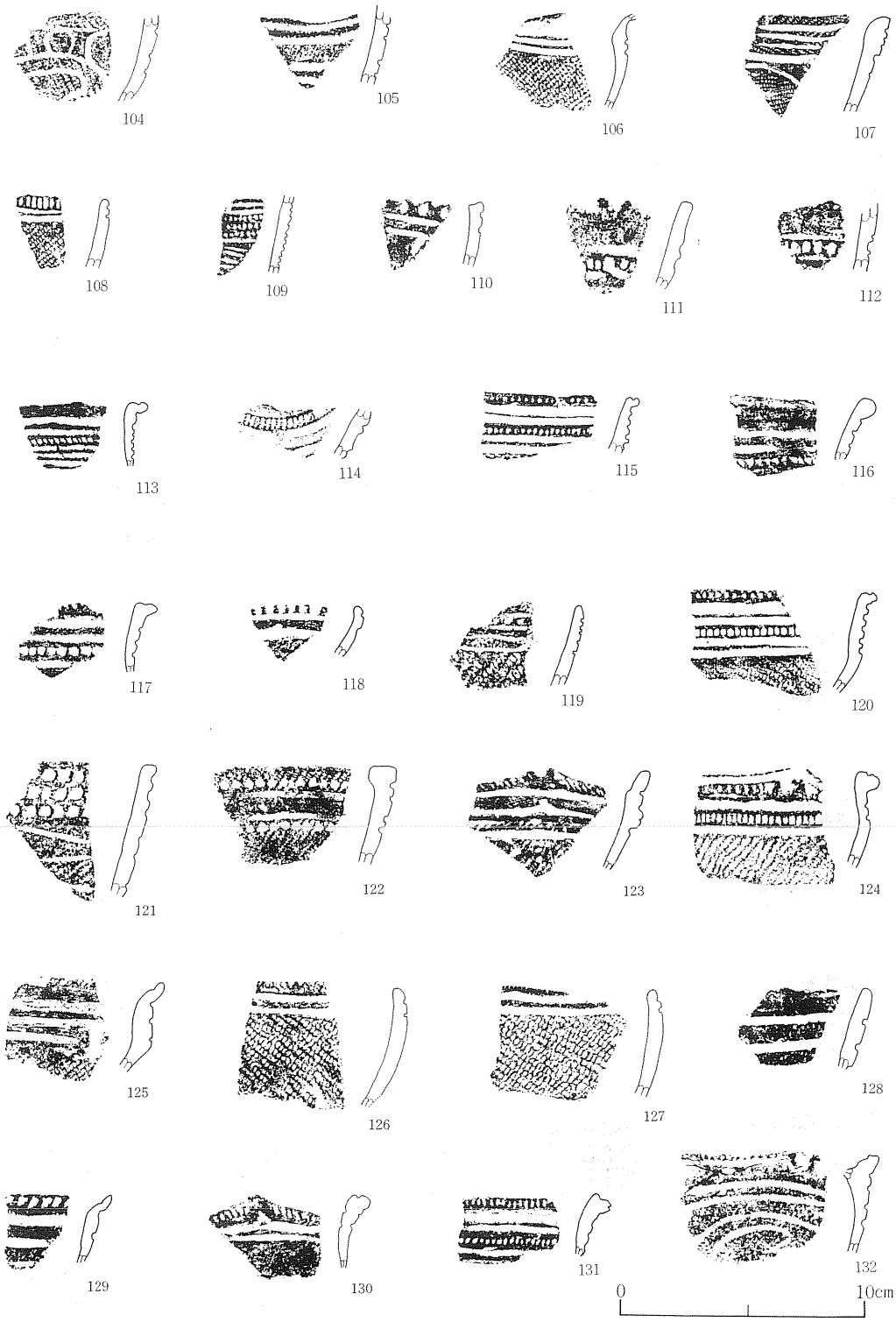
第10図　土器拓影図(5)

に細分される。鉢形・注口形を呈する精製土器の破片が多く出土している。

大洞Ｂ－Ｃ式土器様式の類は、羊歯状文（58～62）、連続刻目文（63～76）に細分され、器形は鉢形・壷形・台付浅鉢がみられる。66と69の壷には表裏とも赤色顔料が塗布されている。


77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
0
10cm

第11図　土器拓影図(6)


104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
0
10cm

第12図　土器拓影図(7)

晩期中葉の土器（第８図36・37、第11図77第12図132）

雲形文が主流を占め、磨消縄文が全盛期となる大洞C_1式土器様式の類（85～93）と直線的な平行線化した文様が主体をなす大洞C_2式土器様式の類（33・36・37・77～84・94～132）に 大

第13図　土器拓影図(8)

別される。

大洞C_2式土器様式の類は、羽状縄文（77～80）、雲形文と連続刻目文の組み合わせ(85～102)C字文（103 ）、連続刺痕列と沈線の組み合わせ（108 ～ 132）に細分できる。94には眼鏡状浮文がみられる。

器形は、浅鉢形・鉢形・皿形・注口形を呈する。大洞C_1式土器様式の鉢形土器にはタール状の炭化物が付着しているものが多い。86・105には 黒色顔料、99には赤色顔料が塗布されている。

晩期後葉の土器（第13図 133～第14図 191）

工字文、入組工字文が主体をなす大洞A式土器様式の土器群である。工字文（ 134～185 ）、π字工字文（186 ・ 190 ・ 191 ）、入組工字文（187 ～ 189）に細分される。鉢・浅鉢・皿・壺の各器形がある。

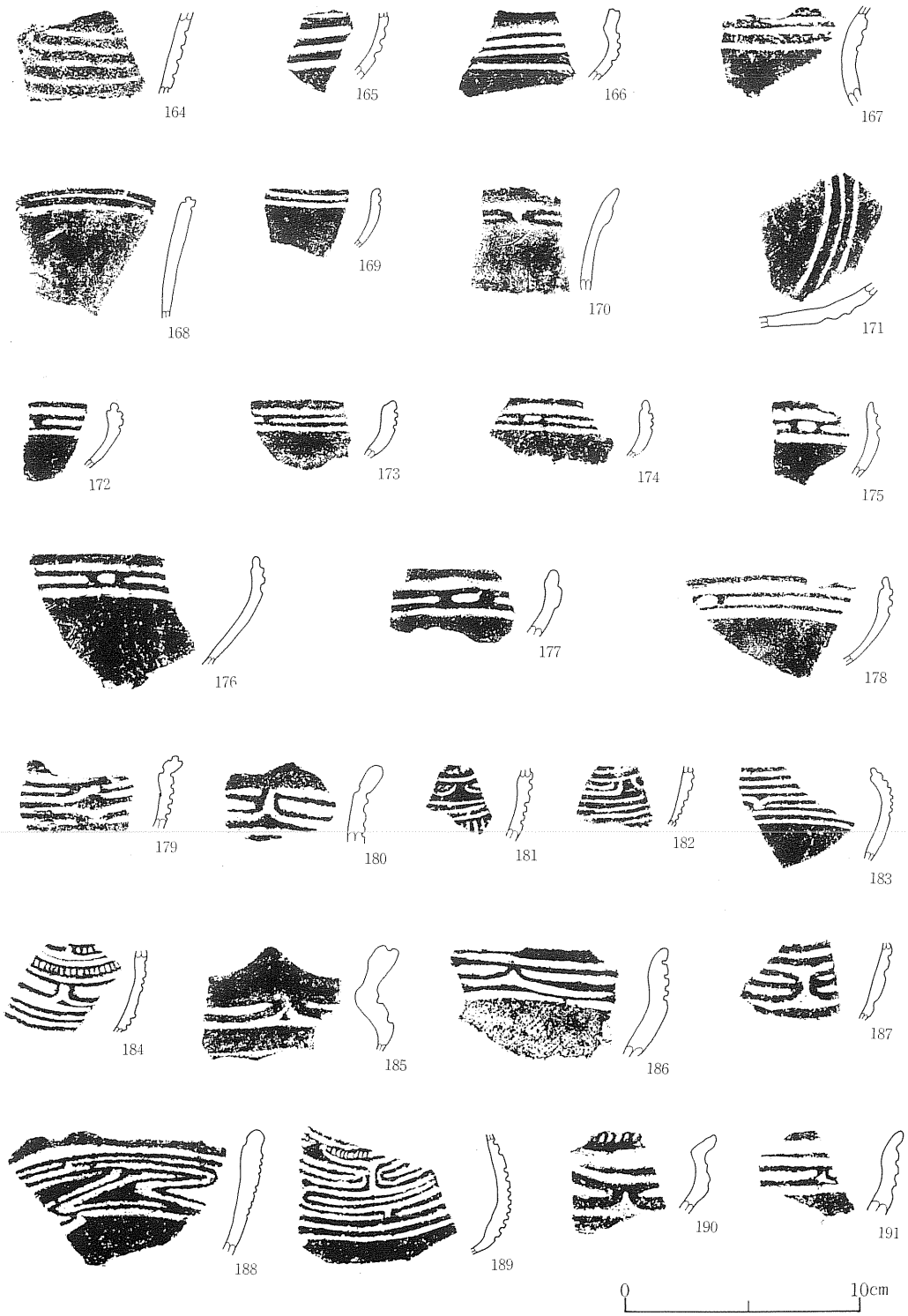
133は 33・36と共に大洞C_2式土器様式土器の終末に属するものと考えられるC字文施文の鉢である。

本遺跡出土の底部破片についての観察（第15図 192～205）

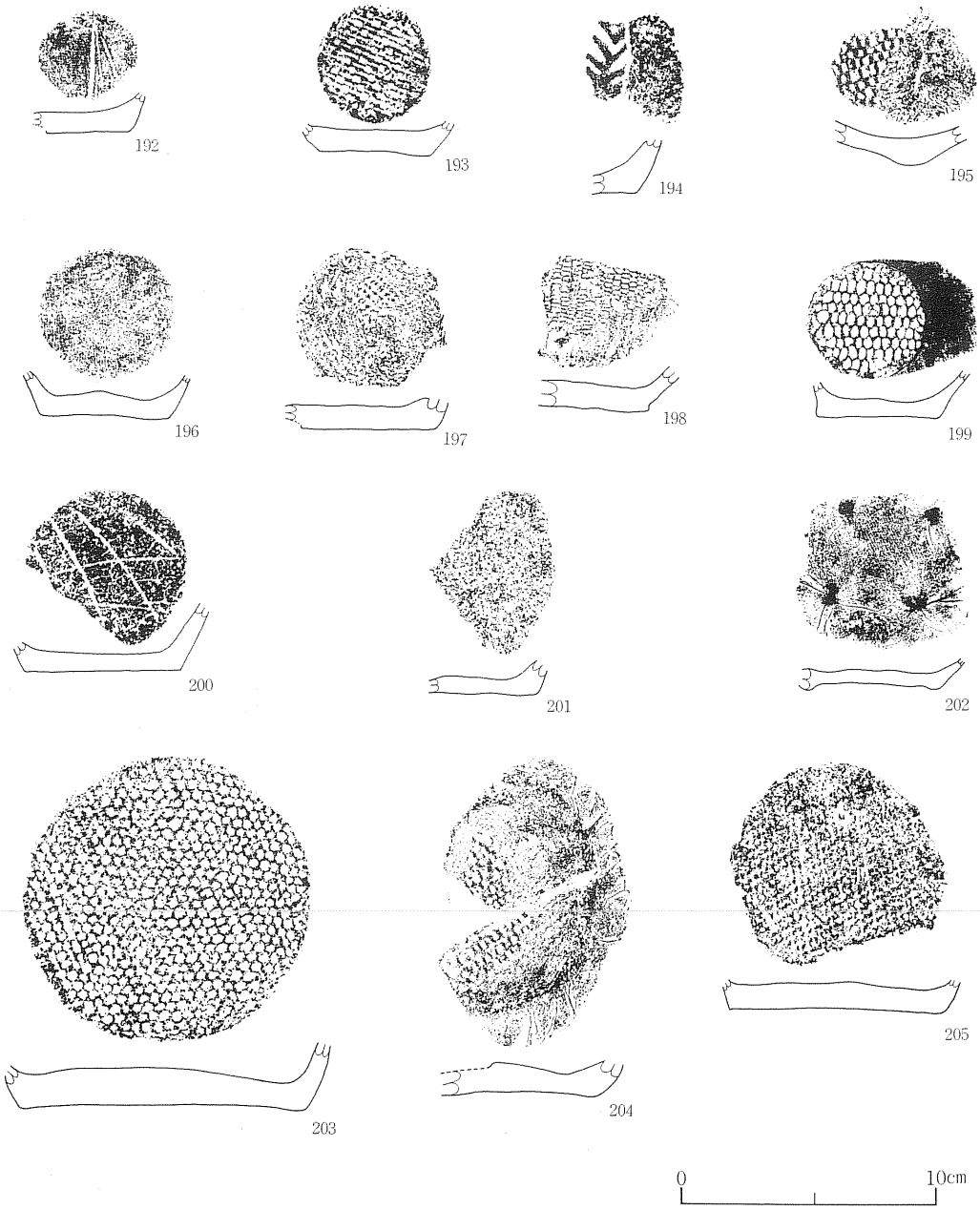
底部破片を観察すると、脚付（202 ）、無文・平滑（196 ）、笹葉圧痕（192 ）、木葉圧痕（200 ）、篦状工具による羽状削り込み（194 ）、網代痕（193 ・ 195 ・ 197 ～199 ・ 201 ・ 203 ～205 ）が認められる。

網代痕のある底部を更に観察すると、いずれも1本送りであるが、〔経1本超え・1本潜り、緯1本潜り・1本超え〕の編み方（198 ・ 199 ・ 203 ）、〔経1本超え・2本潜り、緯2本超え・1本潜り〕の編み方（193 ・ 195 ・ 197 ・ 204 ・ 205 ）がある（201 は不明)。

また、経と緯の原体が同幅のもの（197 ～199 ・ 203 ・ 205 ）と、緯に比べ経が2倍の幅をもつもの（193 ・ 195 ・ 204 ）が観察される。198 は同幅であるが、経が扁平であるのに対し緯は棒状を呈するように観察される。


164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
0
10cm

第14図　土器拓影図(9)



第15図　土器拓影図(10)

第1表　出土土器観察表

番号	出土地区	出土層位	部位	文様構成	器種	備考
1	16 G	砂礫層	口縁部～胴部	刷毛目状文	深鉢	
2	16 G	〃	口縁部～胴部	刷毛目状文	深鉢	
3	19 G	〃	口縁部	刷毛目状文	深鉢	
4	18 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	
5	18 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	
6	18 G	〃	体部	刷毛目状文	深鉢	
7	19 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	裏に炭化物付着
8	17 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	
9	18 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	
10	19 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	
11	18 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	表に炭化物付着
12	19 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	
13	17 G	〃	〃	箆なで	深鉢	
14	18 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	表裏に炭化物付着
15	18 G	〃	〃	刷毛目状文	深鉢	
16	16 G	〃	口縁部～底部	箆削	鉢	
17	16 G	〃	口縁部～底部	無文	鉢	
18	16 G	〃	口縁部	箆削	鉢	
19	19 G	〃	口縁部突起	無文	深鉢	
20	19 G	〃	口縁部	無文	深鉢	
21	19 G	〃	〃	無文	深鉢	
22	19 G	〃	〃	無文	深鉢	
23	19 G	〃	〃	無文	深鉢	
24	17 G	〃	〃	無文	深鉢	
25	19 G	〃	〃	口縁部突起・沈線→瘤	壷	口縁部B突起
26	19 G	〃	〃	口縁部突起→口唇部連続刺痕列	壷	口縁部A突起
27	19 G	〃	〃	LR縄文→沈線→列点文	深鉢	
28	18 G	〃	〃	沈線→列点文	壷	
29	17 G	〃	胴部	LR縄文→沈線→列点文	深鉢	
30	18 G	〃	体部	LR縄文→沈線→列点文	深鉢	
31	19 G	〃	〃	LR縄文→沈線→列点文	深鉢	
32	18 G	〃	〃	沈線・連続刺痕列	深鉢	

番号	出土地区	出土層位	部　位	文　様　構　成	器　種	備　考
33	19 G	砂礫層	口 縁 部	沈線→連続刺痕列	鉢	
34	19 G	〃	〃	沈線→連続刻目文	深　鉢	
35	19 G	〃	口縁部突起	表裏ともに沈線	深　鉢	
36	19 G	〃	頸部～体部	ＬＲ縄文→沈線→連続刻目文	壷	
37	18 G	〃	口 縁 部	LR縄文→瘤→沈線→口唇部連続刺痕列	深　鉢	
38	18 G	〃	〃	LR縄文→沈線→瘤→口唇部竹管圧痕	深　鉢	
39	18 G	〃	体　　部	LR縄文→沈線→瘤→口唇部竹管圧痕	深　鉢	
40	17 G	〃	口 縁 部	LR縄文→沈線→瘤・粘土紐→磨消	深　鉢	
41	19 G	〃	〃	ＲＬ縄文瘤→沈線	深　鉢	
42	18 G	〃	〃	ＲＬ縄文→瘤→沈線	深　鉢	
43	16 G	〃	口縁部～底部	〔瘤付・刻目充塡文〕刻目→沈線→磨消→瘤	深　鉢	
44	16 G	〃	口縁部～胴部	〔瘤付〕ＬＲ縄文→沈線→磨消→瘤	深　鉢	
45	16 G	〃	口 縁 部	〔瘤付・刻目充塡文〕刻目→沈線→瘤	深　鉢	
46	16 G	〃	口縁部～底部	〔瘤付〕沈線→瘤	壷	
47	16 G	〃	口縁部～胴部	〔瘤付〕ＬＲ縄文→瘤→沈線→磨消	鉢	
48	16 G	〃	口縁部～体部	〔瘤付・刻目充塡文〕刻目→沈線→瘤→磨消	深　鉢	
49	16G・17G	〃	口 縁 部	ＬＲ縄文→沈線・磨消	深　鉢	
50	17 G	〃	体　　部	入　　組　　文	深　鉢	
51	17 G	〃	口 縁 部	入　　組　　文	鉢	口縁部Ｂ突起 裏にタール状炭化物付着
52	19 G	〃	〃	入　　組　　文	深　鉢	
53	18 G	〃	体　　部	入　　組　　文	深　鉢	
54	18 G	〃	〃	入　組　三　叉　文	注口土器	
55	18 G	〃	〃	入　組　三　叉　文	鉢	
56	18 G	〃	〃	玉　抱　三　叉　文	鉢	
57	19 G	〃	〃	玉　抱　三　叉　文	注口土器	
58	17 G	〃	口 縁 部	羊　歯　状　文	鉢	
59	19 G	〃	口 頸 部	羊　歯　状　文	鉢	
60	19 G	〃	口 縁 部	羊　歯　状　文	壷	
61	18 G	〃	〃	羊　歯　状　文	鉢	
62	18 G	〃	〃	羊　歯　状　文	鉢	
63	17 G	〃	〃	沈線→連続刻目文	鉢	口縁部Ｂ突起
64	18 G	〃	〃	沈線→連続刻目文	鉢	口縁部Ｂ突起

番号	出土地区	出土層位	部　位	文　様　構　成	器　種	備　考
65	18 G	砂礫層	口 縁 部	ＬＲ縄文→沈線→連続刻目文	鉢	口縁部Ｂ突起
66	17 G	〃	〃	ＬＲ縄文→沈線→連続刻目文	壷	表裏・赤色顔料
67	19 G	〃	〃	ＬＲ縄文→沈線→連続刻目文	壷	口縁部Ｂ突起
68	4 G	粘土層	頸部～体部	ＬＲ縄文→沈線→連続刻目文	壷	
69	18 G	砂礫層	頭　部	連　続　刻　目　文	壷	表裏・赤色顔料
70	17 G	〃	口 頸 部	沈線 → 連続刻目文	鉢	
71	19 G	〃	口 縁 部	沈線 → 連続刻目文	鉢	小波状口縁
72	17 G	〃	〃	沈線 → 連続刻目文	鉢	小波状口縁
73	18 G	〃	口頸部～体部	ＬＲ縄文→沈線→連続刻目文	鉢	表にタール状炭化物付着
74	18 G	〃	台　部	沈線 → 連続刻目文	台付浅鉢	
75	19 G	〃	口 縁 部	沈線 → 連続刻目文	鉢	
76	18 G	〃	体　部	沈線 → 連続刻目文	鉢	
77	18 G	〃	口 縁 部	羽状縄文・LR・RL・LR・口縁部沈線	深　鉢	
78	18 G	〃	〃	羽状縄文・LR・RL・沈線・口縁部突起	深　鉢	
79	17 G	〃	〃	羽状縄文・LR・RL・口縁部突起 口唇部・沈線・頸部箆削	深　鉢	
80	19 G	〃	〃	羽状縄文・RL・LR	浅　鉢	
81	19 G	〃	〃	ＬＲ縄文→沈線・口唇部連続刺痕列	鉢	
82	17 G	〃	〃	ＬＲ縄文→沈線	鉢	口縁部突起
83	18 G	〃	口縁部～体部	ＬＲ縄文→沈線・口唇部沈線	鉢	口縁部Ａ突起
84	19 G	〃	口 縁 部	ＬＲ縄文→沈線	鉢	口縁部Ｂ突起
85	17 G	〃	〃	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消・口唇部裏側連続刺痕列	皿	口縁部Ｂ突起
86	18 G	〃	〃	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消 口唇部裏側連続刺痕列	鉢	口縁部突起 表裏・黒色顔料
87	18 G	〃	〃	〔雲形文〕ＬＲ縄文→沈線→磨消	皿	口縁部Ｂ突起
88	17 G	〃	〃	〔雲形文〕ＬＲ縄文→沈線→磨消	鉢	口縁部Ｂ突起
89	18 G	〃	体　部	〔雲形文〕ＬＲ縄文→沈線→磨消	鉢	
90	18 G	〃	口 縁 部	〔雲形文〕ＬＲ縄文→沈線→磨消	鉢	
91	18 G	〃	〃	〔雲形文〕ＬＲ縄文→沈線→磨消	鉢	口縁部Ｂ突起 表裏にタール状炭化物付着
92	19 G	〃	体　部	〔雲形文〕ＬＲ縄文→沈線→磨消	鉢	裏にタール状炭化物付着
93	17 G	〃	〃	〔雲形文〕ＬＲ縄文→沈線→磨消	鉢	表裏にタール状炭化物付着
94	19 G	〃	口縁部～体部	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消 口唇部連続刺痕列・粘土紐貼付後沈線	鉢	表裏にタール状炭化物付着
95	18 G	〃	〃	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消→頸部連続刺痕列	浅　鉢	
96	18 G	〃	〃	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消→頸部連続刺痕列	鉢	口縁部Ｂ突起

番号	出土地区	出土層位	部位	文様構成	器種	備考
97	17 G	砂礫層	口縁部	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消→連続刻目文	浅鉢	
98	17 G	〃	〃	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消→連続刻目文	鉢	
99	19 G	〃	口縁部	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消→連続刻目文	鉢	表赤色顔料
100	18 G	〃	〃	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消 連続刻目文・口唇部連続刺痕列	鉢	表にタール状 炭化物付着
101	18 G	〃	〃	〔雲形文〕LR　縄文→沈線→磨消→ 連続刻目文	鉢	口縁部B突起
102	18 G	〃	〃	〔雲形文〕LR縄文→沈線→磨消 裏→連続刻目文	皿	口縁部B突起
103	18 G	〃	〃	C字文(RL縄文)	鉢	
104	19 G	〃	体部	RL縄文 → 沈線	鉢	
105	17 G	〃	〃	LR縄文→磨消→沈線	鉢	表・黒色顔料
106	17 G	〃	頸部～体部	LR縄文→頸部沈線	鉢	
107	19 G	〃	口縁部	LR縄文→沈線→磨消	鉢	
108	18 G	〃	〃	LR縄文→沈線→連続刺痕列	鉢	表裏に炭化物付着
109	18 G	〃	体部	沈線 → 連続刺痕列	鉢	
110	3 G	粘土層	口縁部	沈線 → 口唇部連続刺痕列	鉢	
111	18 G	砂礫層	〃	沈線 → 連続刺痕列	鉢	口縁部B突起
112	17 G	〃	体部	沈線 → 連続刺痕列	鉢	
113	18 G	〃	口縁部	沈線 → 連続刺痕列	鉢	
114	18 G	〃	頸部	沈線 → 連続刺痕列	鉢	
115	19 G	〃	口縁部	沈線→口唇部・頸部連続刺痕列	鉢	
116	17 G	〃	〃	沈線 → 連続刺痕列	鉢	
117	17 G	〃	〃	沈線 → 連続刺痕列	鉢	
118	6 G	粘土層	〃	沈線 →口唇部連続刺痕列	鉢	
119	19 G	砂礫層	〃	LR縄文→沈線→連続刺痕列	鉢	
120	19 G	〃	〃	RL沈線→沈線→口唇部頸部連続刺痕列	鉢	裏に炭化物付着
121	19 G	〃	〃	LR縄文→沈線→磨消→連続刺痕列	深鉢	
122	18 G	〃	〃	LR　縄文→磨消→沈線→連続刺痕列	深鉢	
123	19 G	〃	〃	LR縄文→沈線→連続刺痕列	深鉢	口縁部B突起
124	19 G	〃	〃	LR縄文→沈線→連続刺痕列	深鉢	口縁部B突起
125	18 G	〃	〃	LR縄文→沈線→連続刺痕列	深鉢	表裏に炭化物付着
126	18 G	〃	〃	RL縄文→沈線→口唇部連続刺痕列	深鉢	表裏に炭化物付着
127	19 G	〃	〃	RL縄文→沈線→口唇部連続刺痕列	鉢	表裏に炭化物付着
128	18 G	〃	〃	沈線	鉢	

番号	出土地区	出土層位	部位	文様構成	器種	備考
129	19 C	砂礫層	口縁部	沈線→口唇部連続刺痕列	鉢	
130	18 C	〃	〃	沈線→口唇部連続刺痕列	鉢	
131	19 C	〃	〃	沈線→口唇部・頸部連続刺痕列	鉢	
132	18 C	〃	体部	沈線・連続刺痕列	注口土器	
133	18 C	〃	〃	C字文	鉢	
134	18 C	〃	口縁部	工字文	鉢	
135	18 C	〃	体部	工字文	鉢	
136	18 C	〃	口縁部	工字文	鉢	
137	18 C	〃	体部	工字文	鉢	
138	18 C	〃	口縁部	工字文（口唇部沈線）	鉢	口縁部Ａ突起
139	18 C	〃	〃	工字文	鉢	
140	18 C	〃	〃	工字文	鉢	小波状口縁
141	18 C	〃	〃	工字文	鉢	
142	18 C	〃	〃	工字文	鉢	
143	18 C	〃	〃	工字文（口唇部連続刺痕列）	鉢	口縁部Ｂ突起
144	18 C	〃	体部	工字文	鉢	
145	19 C	〃	口縁部	工字文	鉢	
146	18 C	〃	〃	工字文	鉢	表裏に炭化物付着
147	18 C	〃	〃	工字文	鉢	口縁部突起・ 表裏に炭化物付着
148	17 C	〃	〃	工字文	鉢	口縁部小突起
149	19 C	〃	〃	工字文	鉢	
150	19 C	〃	〃	工字文	鉢	口縁部突起 表裏に炭化物付着
151	19 C	〃	〃	工字文	鉢	
152	19 C	〃	〃	工字文	鉢	
153	18 C	〃	〃	工字文	鉢	裏に炭化物付着
154	19 C	〃	〃	工字文	鉢	
155	19 C	〃	〃	工字文	鉢	
156	19 C	〃	〃	工字文	鉢	
157	18 C	〃	〃	工字文	鉢	口縁部Ａ突起
158	18 C	〃	〃	工字文	鉢	
159	18 C	〃	〃	工字文	浅鉢	
160	19 C	〃	体部	工字文	鉢	

番号	出土地区	出土層位	部位	文様構成	器種	備考
161	18 G	砂礫層	体部	工字文	鉢	
162	18 G	〃	〃	工字文	鉢	
163	18 G	〃	口縁部	工字文	鉢	
164	9 G	粘土層	体部	工字文	浅鉢	
165	18 G	砂礫層	〃	工字文	鉢	
166	19 G	〃	口縁部	工字文	鉢	
167	19 G	〃	体部	工字文	鉢	
168	18 G	〃	口頸部	工字文	壷	
169	18 G	〃	口縁部	工字文	鉢	
170	18 G	〃	口頸部	工字文	壷	
171	18 G	〃	底部	工字文	皿	
172	19 G	〃	口縁部	工字文	鉢	
173	18 G	〃	〃	工字文	鉢	
174	18 G	〃	〃	工字文	鉢	
175	18 G	〃	〃	工字文	鉢	
176	19 G	〃	〃	工字文	鉢	
177	19 G	〃	〃	工字文	鉢	
178	19 G	〃	〃	工字文	鉢	
179	4 G	粘土層	〃	工字文	鉢	
180	8 G	〃	〃	工字文	鉢	口縁部Ａ突起
181	17 G	砂礫層	体部	工字文	壷	
182	19 G	〃	〃	工字文	鉢	
183	19 G	〃	口縁部～体部	工字文	浅鉢	
184	19 G	〃	体部	工字文	壷	
185	17 G	〃	口縁部	工字文	鉢	口縁部Ａ突起 裏にタール状炭化物付着
186	18 G	〃	〃	π字工字文（ＬＲ縄文）	鉢	表に炭化物付着
187	18 G	〃	体部	入組工字文	壷	
188	19 G	〃	口縁部	入組工字文	鉢	
189	18 G	〃	体部	入組工字文	壷	
190	18 G	〃	口縁部	π字工字文（口唇部連続刺痕列）	鉢	
191	18 G	〃	〃	π字工字文	鉢	
192	16 G	〃	底部	笹葉文	深鉢	

番号	出土地区	出土層位	部　位	文　様　構　成	器　種	備　　考
193	17 G	砂礫層	底　部	網　代　痕	深　鉢	
194	18 G	〃	〃	不　明	深　鉢	
195	16 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	
196	17 G	〃	〃	無　文	深　鉢	
197	17 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	
198	16 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	
199	17 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	
200	17 G	〃	〃	木　葉　痕	深　鉢	
201	18 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	
202	18 G	〃	〃	脚　付	鉢	
203	18 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	
204	16 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	
205	17 G	〃	〃	網　代　痕	深　鉢	

(2)　石製品

石製品は総数 204点出土しており、その内訳は、石鏃27点、石槍14点、石錐14点、石匙27点、箆状石器13点、打製石斧４点、磨製石斧23点、削器２点、掻器６点、不定形石器17点、石剣１点、石刀５点、石棒４点、凹石26点、石皿19点、岩偶１点、有孔石製品１点である。その他、硅化木も出土している。

①　石鏃（第19図１～27）

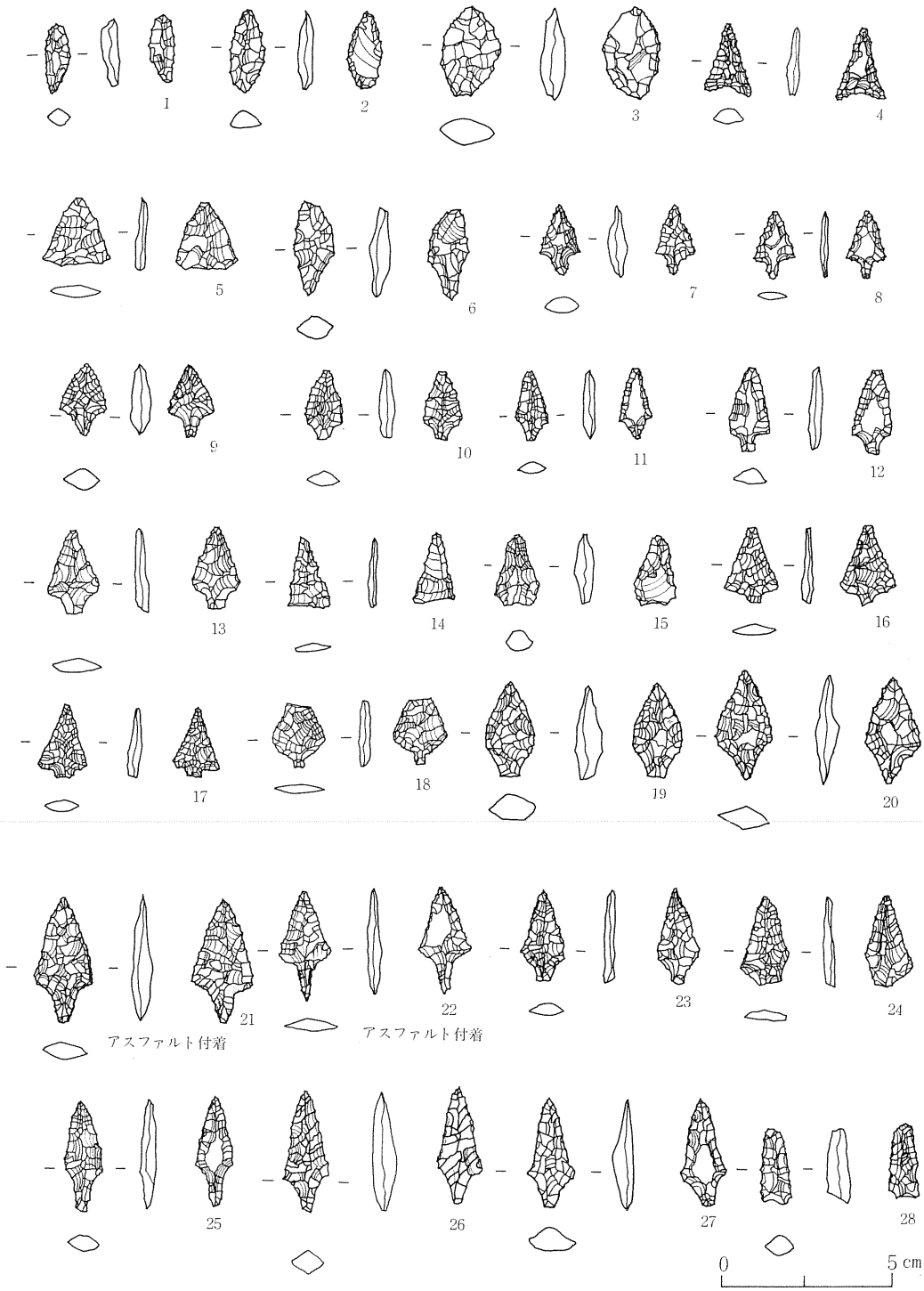
石鏃は27点出土している。これらを形態的特徴から大別すると、以下の３類となる。

１類としたものは、いわゆる凹基無茎鏃で、形態としては、鏃身の下半部が最大幅となり、この最大幅の部分から基部にかけての形状は、基部に若干の抉入が入るものである。この類は１点のみで最大長 2.1cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.4cm、重さ 0.8ｇの計測値を得た。両面とも縁辺に丁寧に二次加工を施しており、石質は頁岩である（第19図４）。

２類としたものは、凸基無茎鏃で、３点出土している（第19図１～３）。基部が丸味をおびるものや、中央部が若干ふくらみ、断面形が菱形となるものもある。長さは２～ 2.6cm、幅は 0.7 cm～ 1.8cm、重さは１ｇのものと３ｇほどのものがあり、石質は３点とも頁岩である。

３類としたものは、有茎鏃で、23点出土している。大きさに大小の差はあるが、二等辺三角形の鏃身と、その中軸線上に茎が突出しているものである。

基部の形状からみて、基部が直線的な平基有茎鏃が１点（第19図５）。基部が突出して茎へと続く、いわゆる凸基有茎鏃が22点（第19図６～27）である。凸基有茎鏃の中には、基部、茎、先端部など一部を欠くものが多く、完形資料は７点である。６は、鏃身と基部の区別がやや不明瞭である。16・17は両面とも細かく丁寧に二次加工を施してある。18は基部が丸味をもって



第19図　石鏃・石槍実測図

突出し、茎が鏃身のわりには細いものである。19は木葉形で肉厚のもの。20と21はこの類の中では大型のもので、長さが３～４cmあり、重さも２ｇ以上ある。21と22は、基部や茎にアスファルトが付着しており、着柄の様子が窺われる。

３類の石鏃の大きさは、長さが２～３cmの間のものがほとんどである。重さは１ｇ以下のもの11点、２ｇ以下のものも11点で、３ｇを越えるものは１点のみである。

石質はそのほとんどが頁岩であるが、９と10は石英、17は黒曜石である。

②　石槍（第19図28　第20図29～41）

石槍は形態からみて棒状を呈するものと、木葉形のいわゆる尖頭器と呼ばれているものとの２種類に分けられる。棒状を呈するものは８点出土しており、長さは２～７cmまでで両面に丁寧な二次加工を施しているものが多く、断面形は菱形か三角形状をなす。木葉形は６点出土しており、やや丸味をおびるものは39と40である。36は槍身の上部がやや幅広く、扁平な感じを受けるもので先端部を欠いている。

石質は14点とも頁岩である。

③　石錐（第20図42～48　第21図49～55）

石錐は14点出土しており、形態的に分類すると以下の３類となる。

１類は、先端部が三角形状をなし、全体的にスリムな感じのもので７点出土している（第20図42～48）。44はつまみ部を円形状に加工している。46はつまみ部も細く鋭く加工している。

２類は、大型のもので、長さ３～６cm、幅３～４cmの三角形状、または方形状の剝片の一端を錐状に加工したもので、４点出土している（第21図51・53・54・55）。これらは、つまみ部分の加工がほとんど行われておらず、55のように自然面を残しているものもある。

３類は、先端部分が二次加工され鋭くクギ状になるものである。つまみ部にも丁寧な加工が施されており、半円形状・三角形状に整えられているものが３点出土している（第21図49、・50・52）。52のつまみ部と先端部の一部に若干のアスファルト状付着物がみられる。

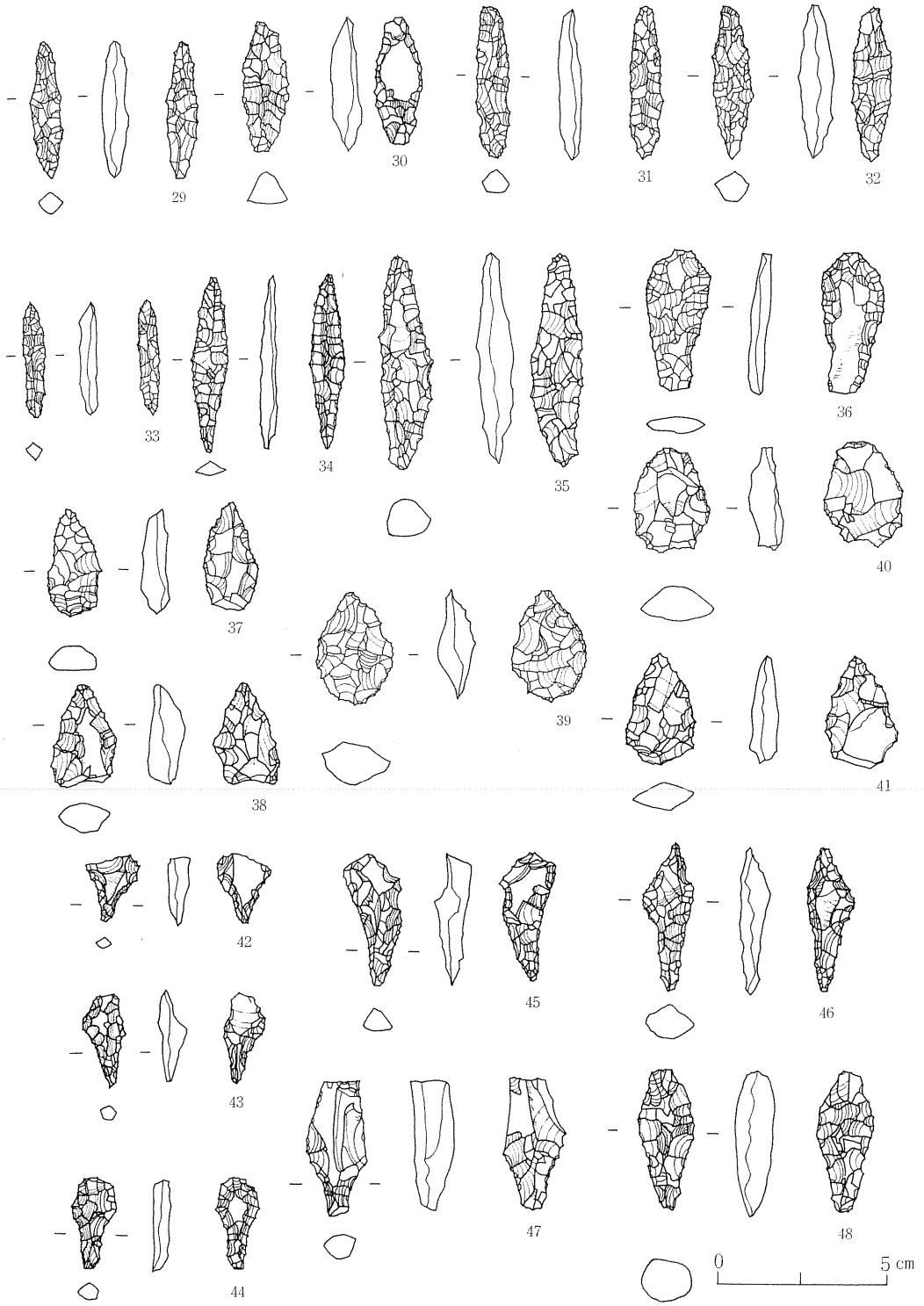
石錐の石質はすべて頁岩である。

④　石匙（第22図62～78　第23図79～88）

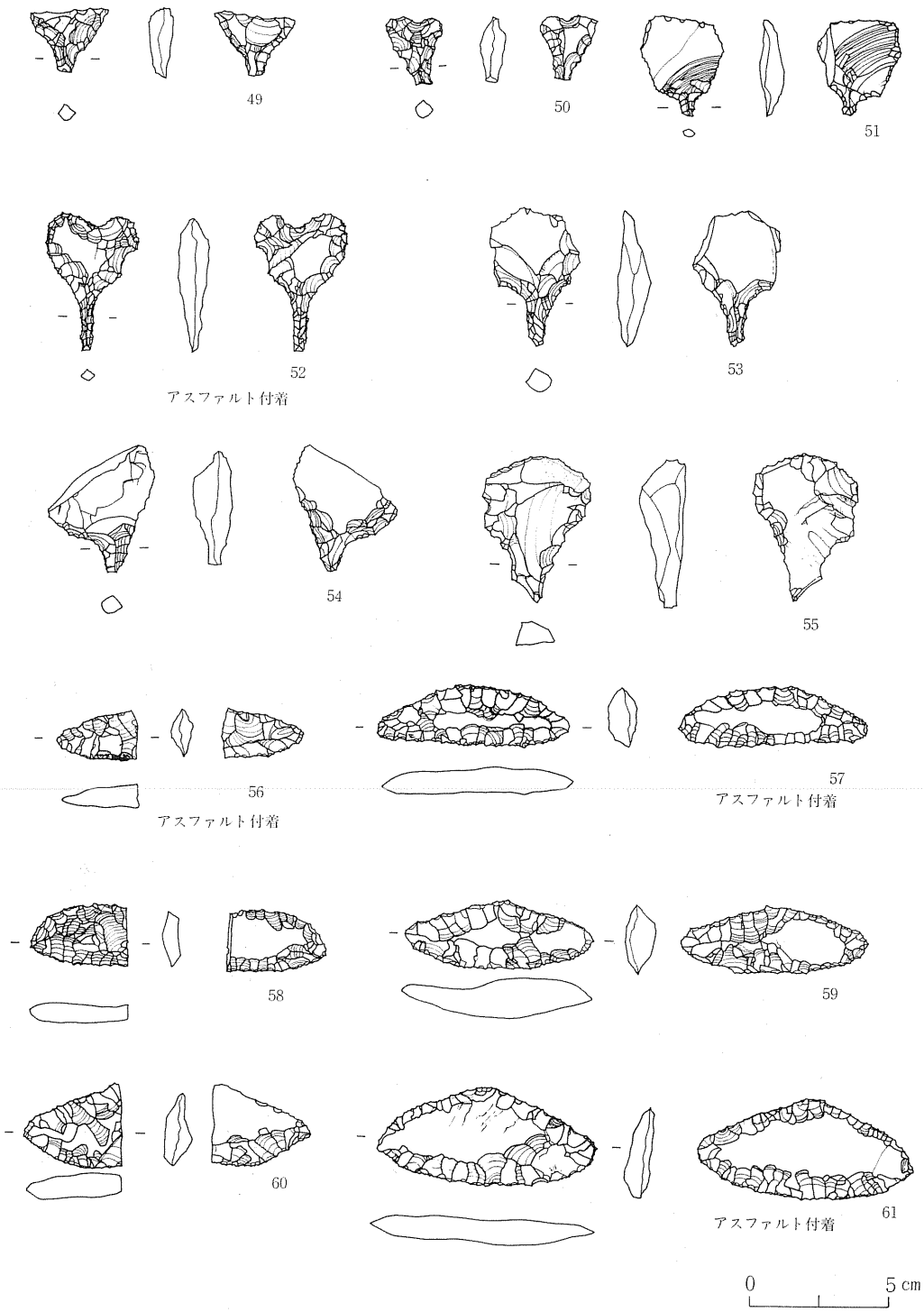
石匙は大別すると縦型と横型の２種類となる。縦型の石匙は12点、横型の石匙は15点出土している。

縦型の石匙を細分すると(I)比較的小形で薄く、刃部を押圧加工で作ってあるものが１点（第22図62）。(II)断面が台形状を呈するもので二次加工があまり施されていないものが１点（第22図66）。(III)中形で細身、長身のもので、全面あるいは、刃部、つまみ部等に二次加工を施してあるものが10点である（第22図63～65・67～73）。

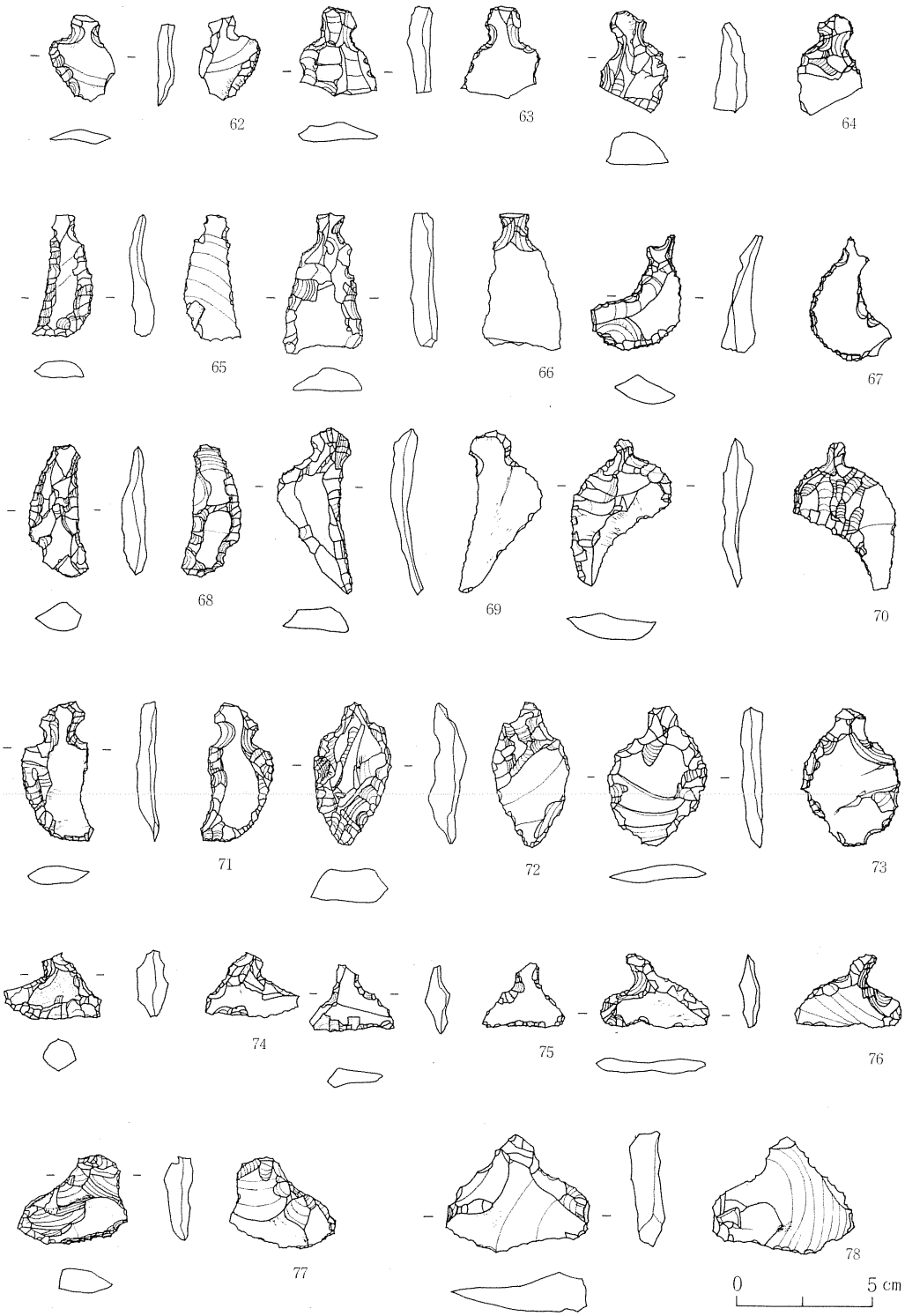
また、同様に横型の石匙も細分すると(I)比較的小形で、三角形状を呈し、つまみ部、刃部に



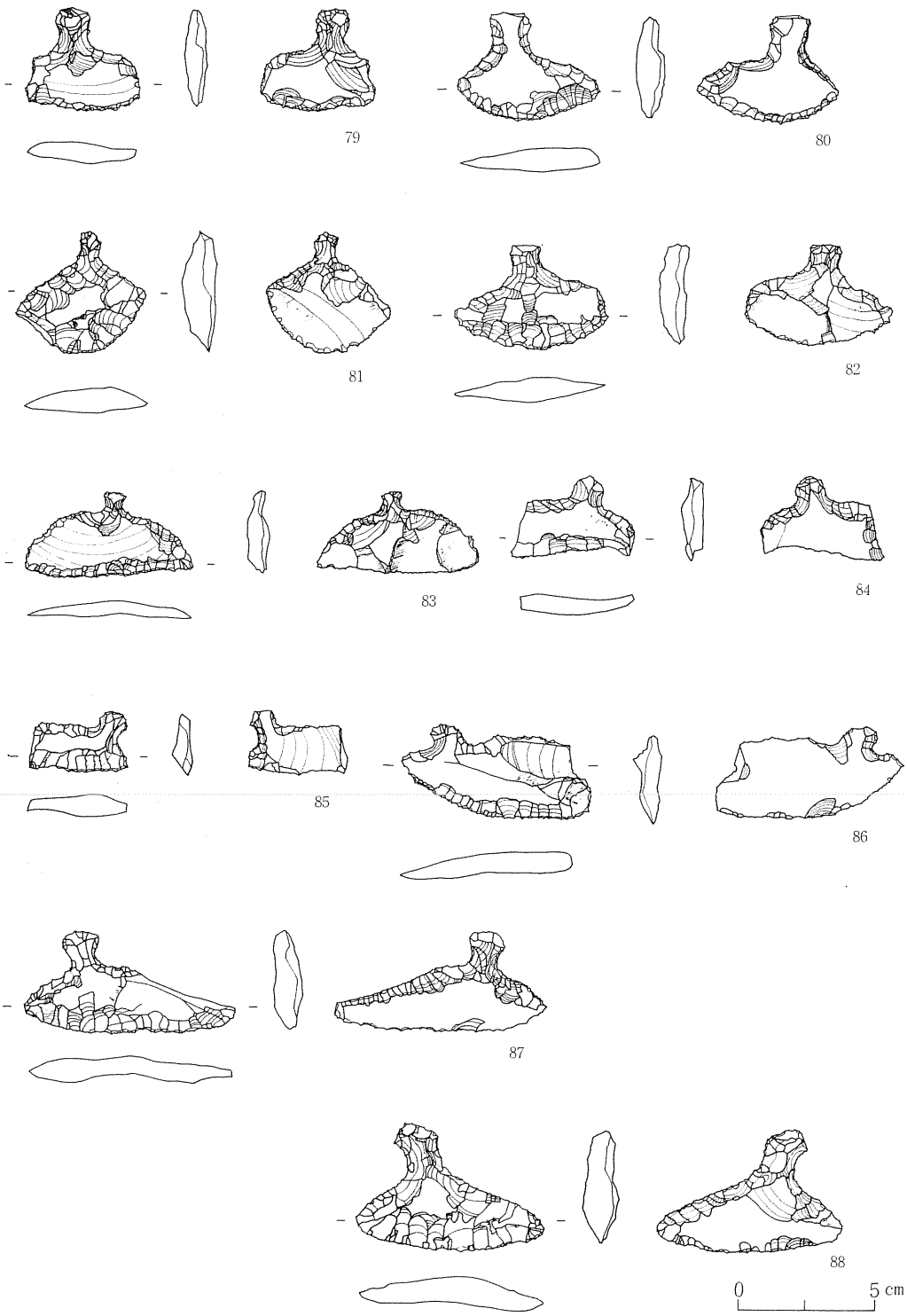
第20図　石槍・石錐実測図



第21図　石錐・掻器実測図



第22図　石匙実測図



第23図　石匙実測図

押圧加工を施したものが３点（第23図74～76）。(II)つまみ部がほぼ中央に位置し、左右シンメトリーな形を呈するもので、二次調整がなされているものが６点（第23図78～83）。(III)つまみ部分が右あるいは左に片寄った横長のものがほとんどで６点出土している（第24図77・84～88）。

石質はすべて頁岩である。

⑤　**箆状石器**（第24図89～101）

箆状石器は、その形状があたかも箆のようであることから石箆とか、箆状石器等呼称されているもので、本遺跡では13点出土している。その特徴としては(I)比較的小型の打製石器であり(II)幅よりも長さの割合が大きく(III)刃部断面はほぼレンズ状を呈するものである。

箆状石器を形態から大別すると、直線的な刃部をもつ直刃と外弯した刃部をもつ曲刃に分けられる。

まず１類は、刃部は直刃でほとんどが両刃状をなすもので、形態的にみれば小型短冊型５点（第24図90～94）で、90は両面ともに縁辺に丁寧な二次加工を施している。三角形状２点（第24図95・96）は撥形の打製石斧を小形化したようなものである。台形状は４点（第24図97・99～101）で、97は長さ、幅とも３cm前後の小形のもの。101は他に比較して薄く、つまみ状の突起を持ち、刃部が丁寧に加工されている。

２類は刃部が曲刃で両刃状をなすもの１点（第24図98）と片刃状をなすもの１点（第24図89）に分けられる。89は3.4×1.3cmとミニチュアのようである。

石質はすべて頁岩である。

⑥　**削器・掻器**（第25図102・103　第21図56～61）

剥片の側縁に連続的な調整によって刃部を作り出したものである削器は２点出土している（102・103）。長さはどちらも４cm位で、石質は頁岩である。

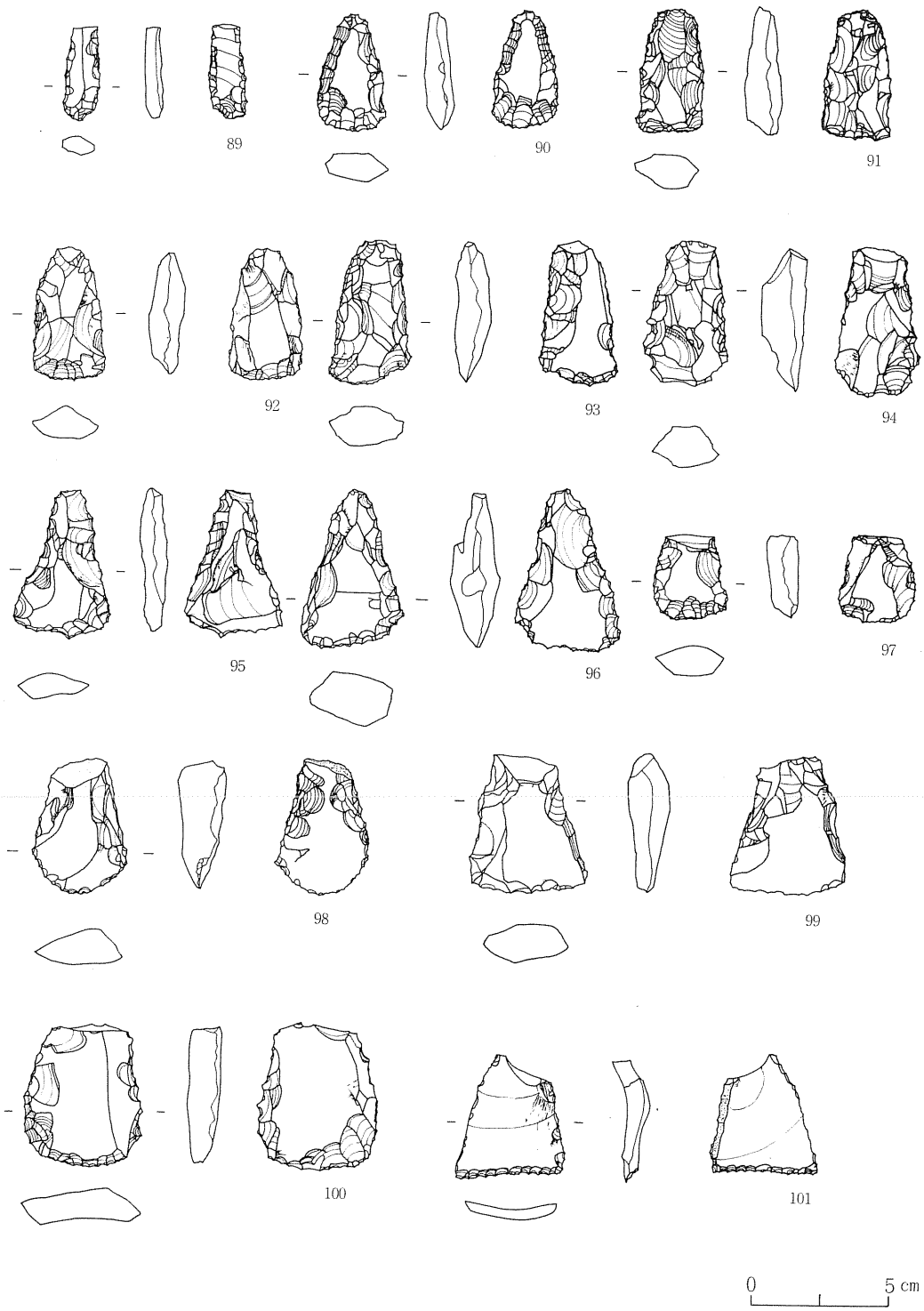
第21図56～61は、横型石匙のつまみ部を欠損したような形をしており、縁辺部の周囲を二次加工してある。剥片の周囲のうち刃部等の部位を押圧加工で作ってあり、裏面にも丁寧な加工を施してあるもので６点出土している。

これらは、九年橋遺跡[注1]では「不定形掻器」として取り扱われている。県内では平鹿遺跡[注2]で報告例がある。

この６点の中で完形資料は３点で、長さは７～８cm、幅は２cm前後であるが、61は3.5cmとやや幅広いものもある。56・57・61の縁辺部の一部や、裏側にもアスファルトが付着しているものが３点出土している。

石質はすべて頁岩である。

⑦　**不定形石器**（第25・26図）



第24図　箆状石器実測図

第25図　削器・不定形石器実測図

第26図　不定形石器実測図

剝片の側辺や末端に簡単な二次加工が施されているものを一括して不定形石器とした。これらを形状から分類すると(I)方形状、あるいは円形状を呈するもの。(II)三角形状を呈するもの。(III)木葉状を呈するもの。(IV)台形状を呈するものとに分けられる。

(I)は４点出土している（第25図104 ～ 106・111 ）。 104は表側周辺を二次加工し、ラウンドスクレーパーのような形をしているが刃部の調整・角度は甘い。 106は表側一辺のみに二次加工を施している。

(II)は４点出土している（第25図107 ～ 110）。 107は左側辺が直線的でやや大きめな、右側辺は細かな二次加工を施している。 108は左側辺に二次加工が施されている。 110は両側辺に二次加工を施し、つまみ状の突起をもつ。

(III)は８点出土している（第25・26図113 ～ 120）。長さ７～11cm、幅３～６cmのもので、113・115 ・ 116 ・ 120 は比較的薄い剝片で、一辺あるいは両側辺に簡単な二次加工を施しているものである。114 は下端部に二次加工を施してある。117 は表側の下端部と裏側の両側辺に、二次加工を施してある。118 は裏側の両側辺に二次加工が施してある。119 は両側辺の所々に二次加工が施してある。

(III)類の８点は、断面形がほぼ二等辺三角形をなす。

(IV)類は１点（第25図112 ）で、上辺２cm、下辺 6.7cm、高さ６cmの台形をなすもので、一部に自然面を残し、裏側の上部はつまみ部として整えようとした意図がみられる。

石質は17点すべて頁岩である 。

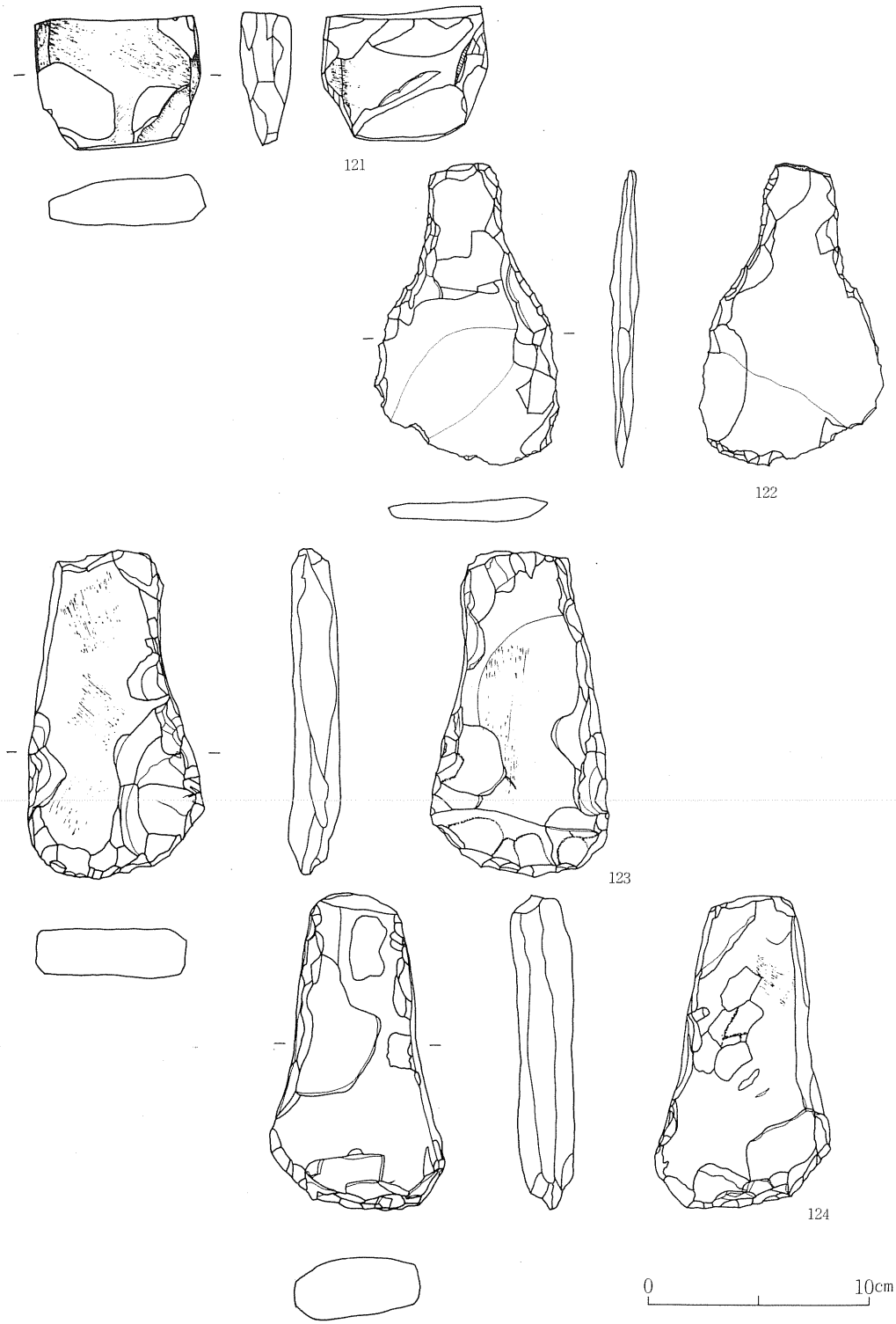
⑧　打製石斧・磨製石斧（第27図121～124　第28図～30図125～147）

打製石斧は４点出土し、自然礫を敲打して剝離した剝片を素材とし、縁辺部を数回の打撃によって着柄部分を作出し形状を整えているものがほとんどで、すべて撥形打製石斧である。121 は基部を欠損している。122 は厚さがわずか１cmという薄いもので、剝離した際に故意に薄い剝片を利用したものか、または単に剝れたものであるのかは推察の域を脱しないが、打製石斧としての用途を果たし得たかははなはだ疑問である。

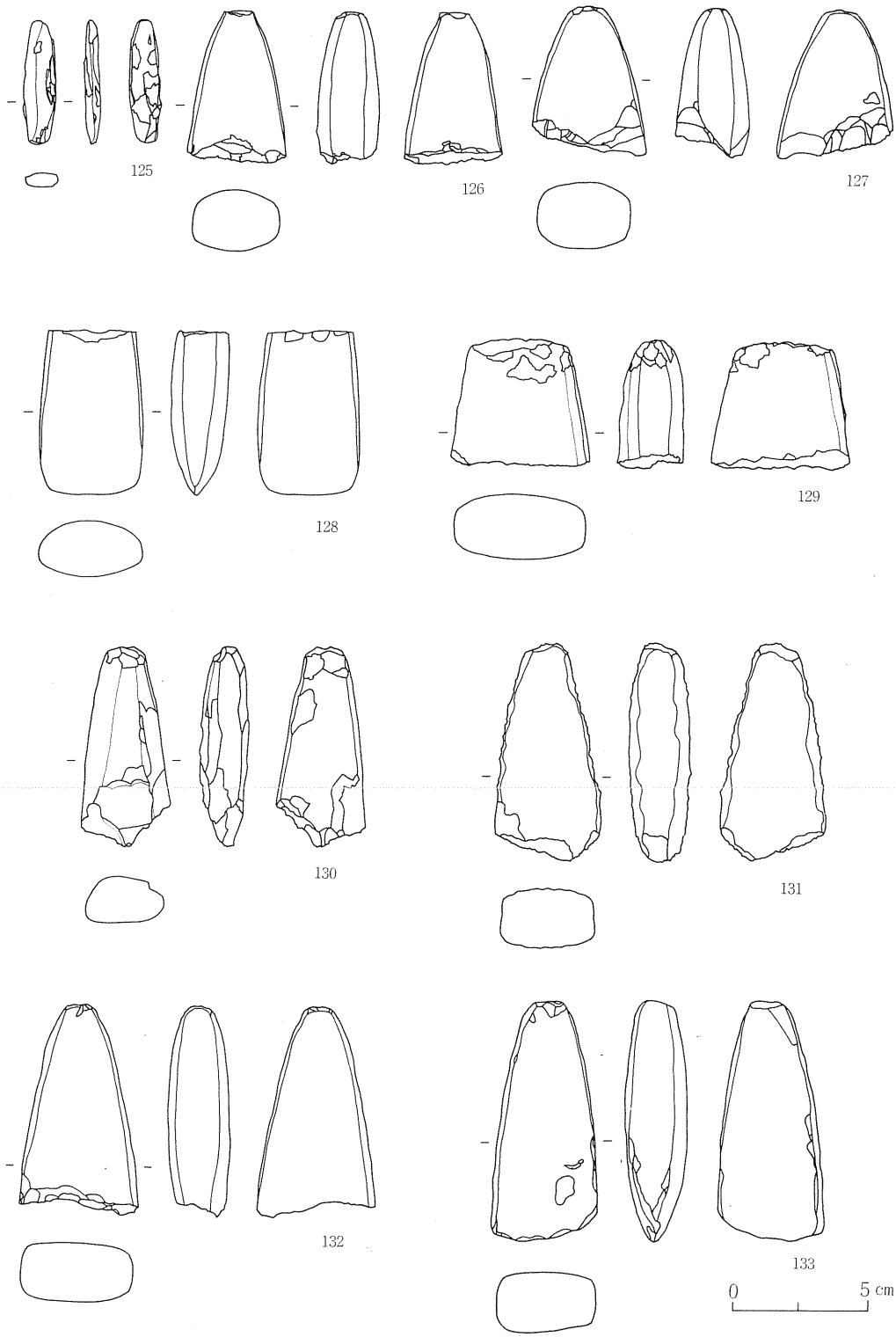
石質は 123が凝灰質泥岩で、他は粘板岩である。

次に磨製石斧は23点出土しており、乳棒状磨製石斧１点（第30図142 ）。これは、全面に製作時の研磨痕を残し、使用による刃こぼれもみられる。断面形は隅丸方形となる定角式磨製石斧である。これらには製作時の研磨痕を若干残すものや、使用による刃こぼれのみられるものもある。頭部や刃部を欠損したものが多く、完形資料は５点である。125 は4.5 × 1.5cmのミニチュアで、よく研磨されているが後世による破瘡がみられる。実用品としての用途から次第に儀品・装飾品としての用途への移行が窺われる。

石質は、安山岩12点、泥岩２点、凝灰岩３点、緑色凝灰岩４点、玢岩１点である。

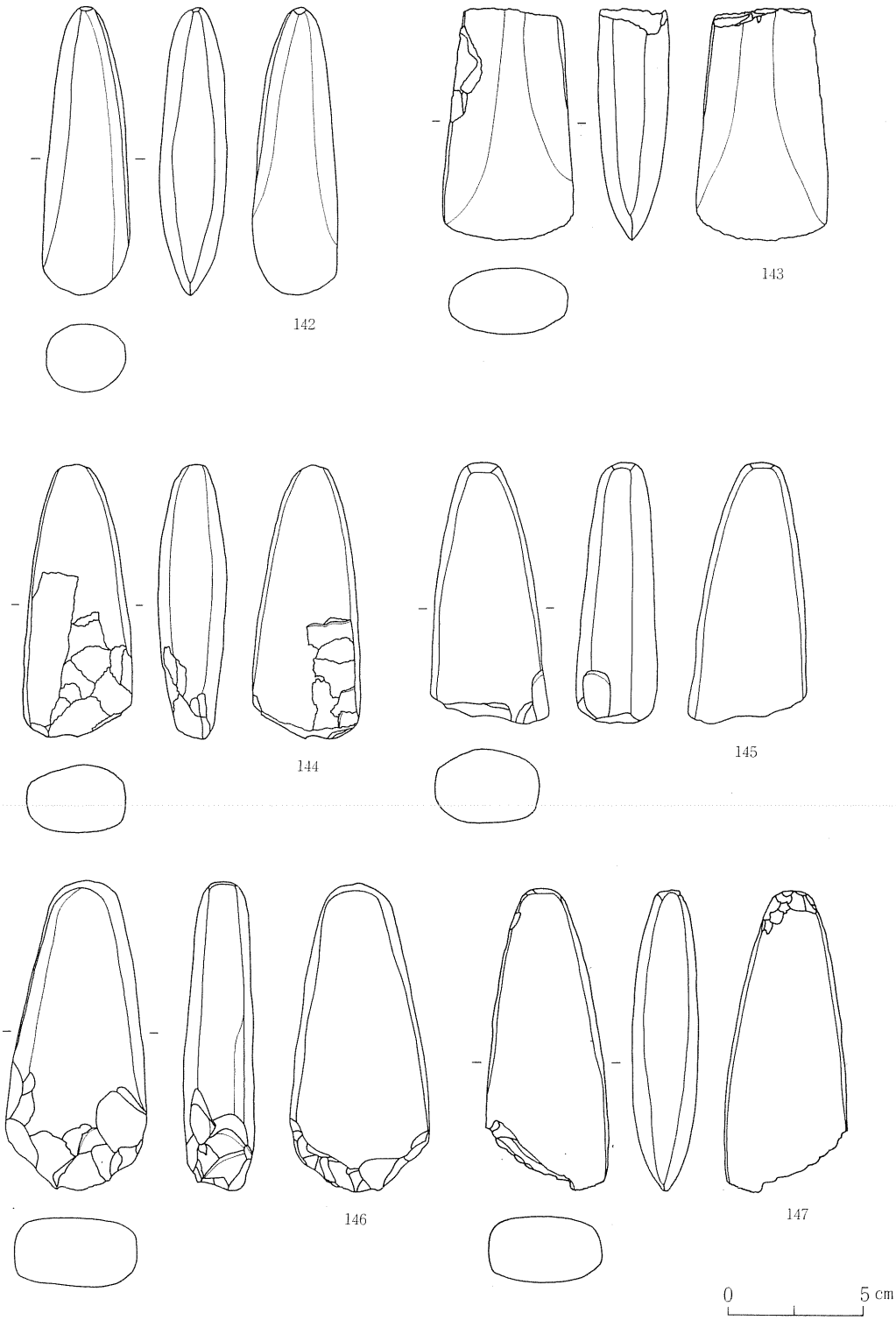


第27図　打製石斧実測図



第28図　磨製石斧実測図

第29図　磨製石斧実測図



第30図　磨製石斧実測図

⑨　石剣・石刀・石棒（第31・32図148～157）

石剣は１点出土しており、最大長28.4cm、最大幅 3.7cmのもので先端部は円柱状に近い形の握りになっている。完形資料ではなく一部を欠損している。石質は凝灰岩である。

石刀は５点出土しているがすべて破片資料である。（第32図156 ）はこれらの中でも完形に近く、長さ22.4cmを計るものであるが頭部を欠損している。製作時の研磨痕が著しいものである。

石質は安山岩（玢岩）、緑色凝灰岩・粘板岩、黒色泥岩である。

石棒は４点出土している。すべて両端を欠くもので、長さ15.4cmのものが最大である。幅は５cm前後のものが３点（第31・32図153 ～ 155）、３cmのものが１点である。

石質は頁岩と玄武岩である。

⑩　凹石（第33～38図158～183）

凹石は26点出土している。形態的に分類すると(I)円形のもの６点（第37図178 ～ 180、第38図182 ・ 183 ）、(II)方形状のもの６点（第34図164 、第36図174 ～ 177）、(III)楕円形のものが最も多く14点（第33・34・35図159 ～ 173）、(IV)くの字状のもの１点（第33図158 ）である。164 のようにサイコロ形をしたものもある。

次に凹んでいる箇所によって分類すると、表裏両面ともに凹んでいるものが最も多く17点、片面のみのものが６点、表裏側面のものが３点である。楕円形や円形のものに片面に数個の凹をもつものが多い。

凹部分の深さは最も浅いもので 0.1cm、最も深いものが１cmで、0.2 ～ 0.5cm程度のものが比較的多い。

石質は安山岩が13点、凝灰岩が５点、泥岩が５点、砂質泥岩１点、砂岩１点、頁岩が１点である。

⑪　石皿（第39～43図184 ～ 202）

石皿は19点出土している。形が明確なのは少ないが、形態的に分類すると４つに分けられる

(I)は長方形ないし方形を呈するもの11点（第39～42図187 ～ 200）。

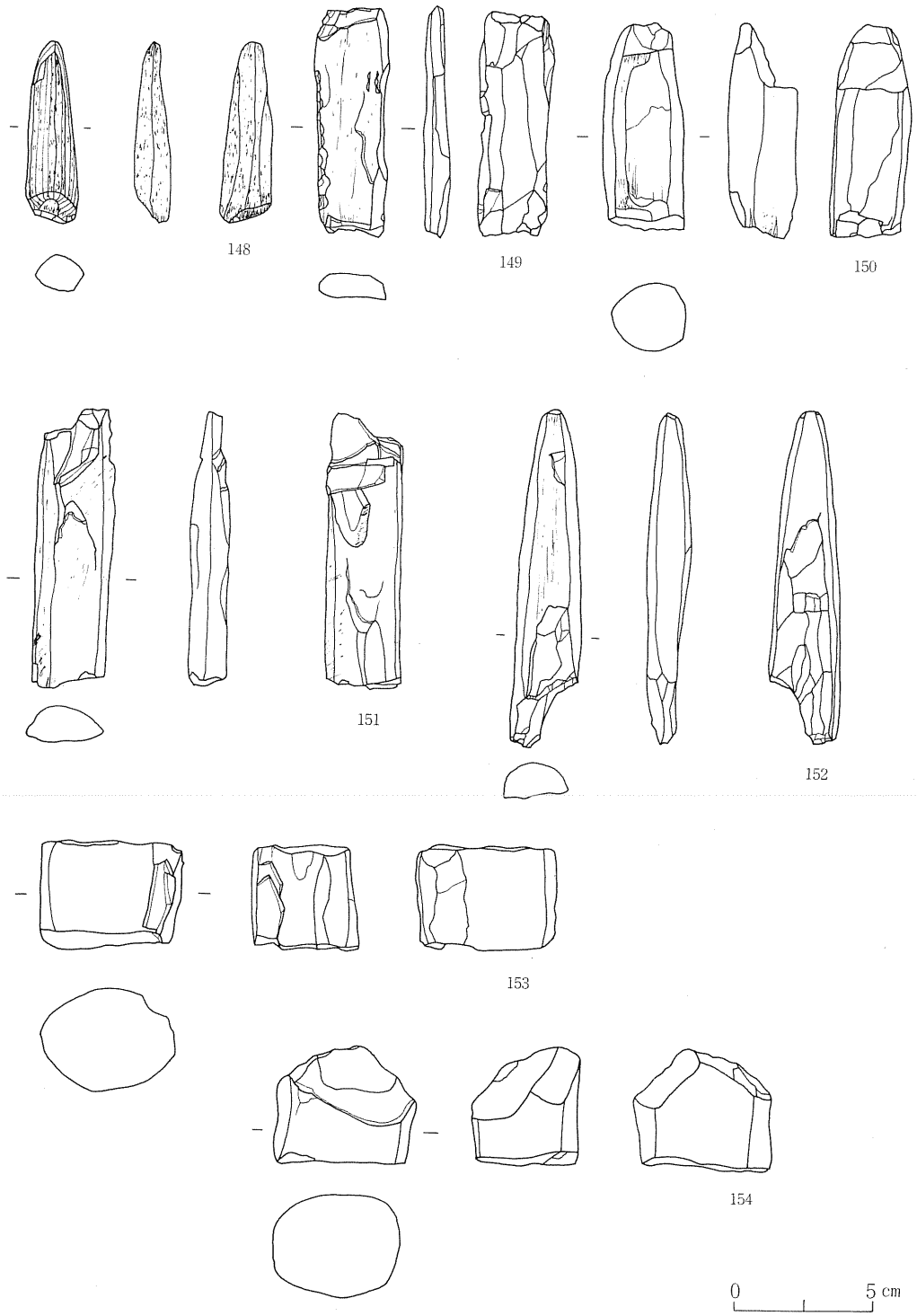
(II)は円形ないし円形状を呈するもの３点（第39図184 、第41図197 、第42図199 ）。

(III)は(I)と同じだが、周縁に縁を有するもの３点（第39図185 ・ 186、第43図201 ）。

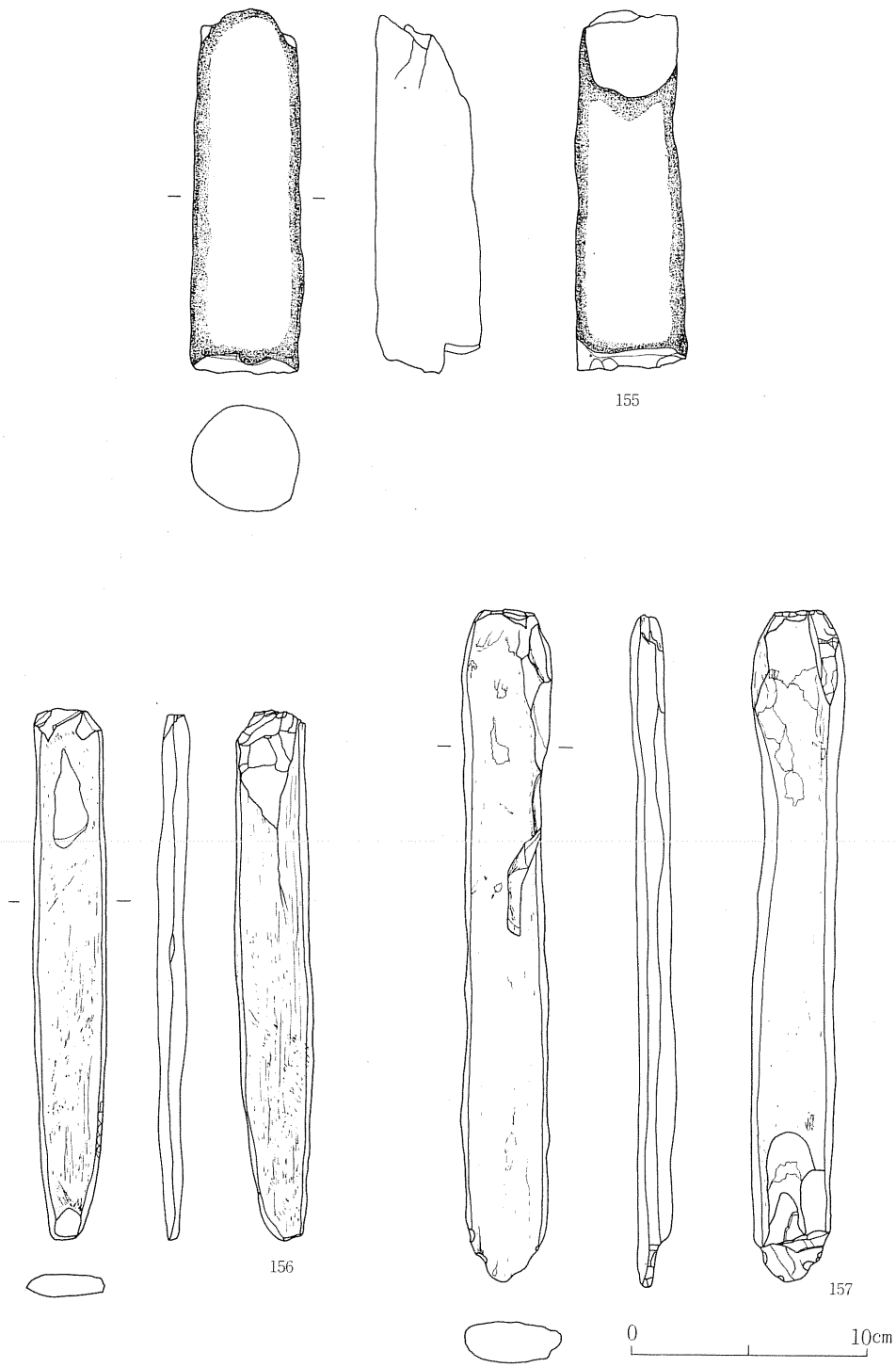
(IV)は長方形で脚を有するもの２点（第40図190 、第43図202 ）。

凹部の平面形は円形、楕円形と考えられるものがほとんどである。187 は両面使用の可能性があると思われる。

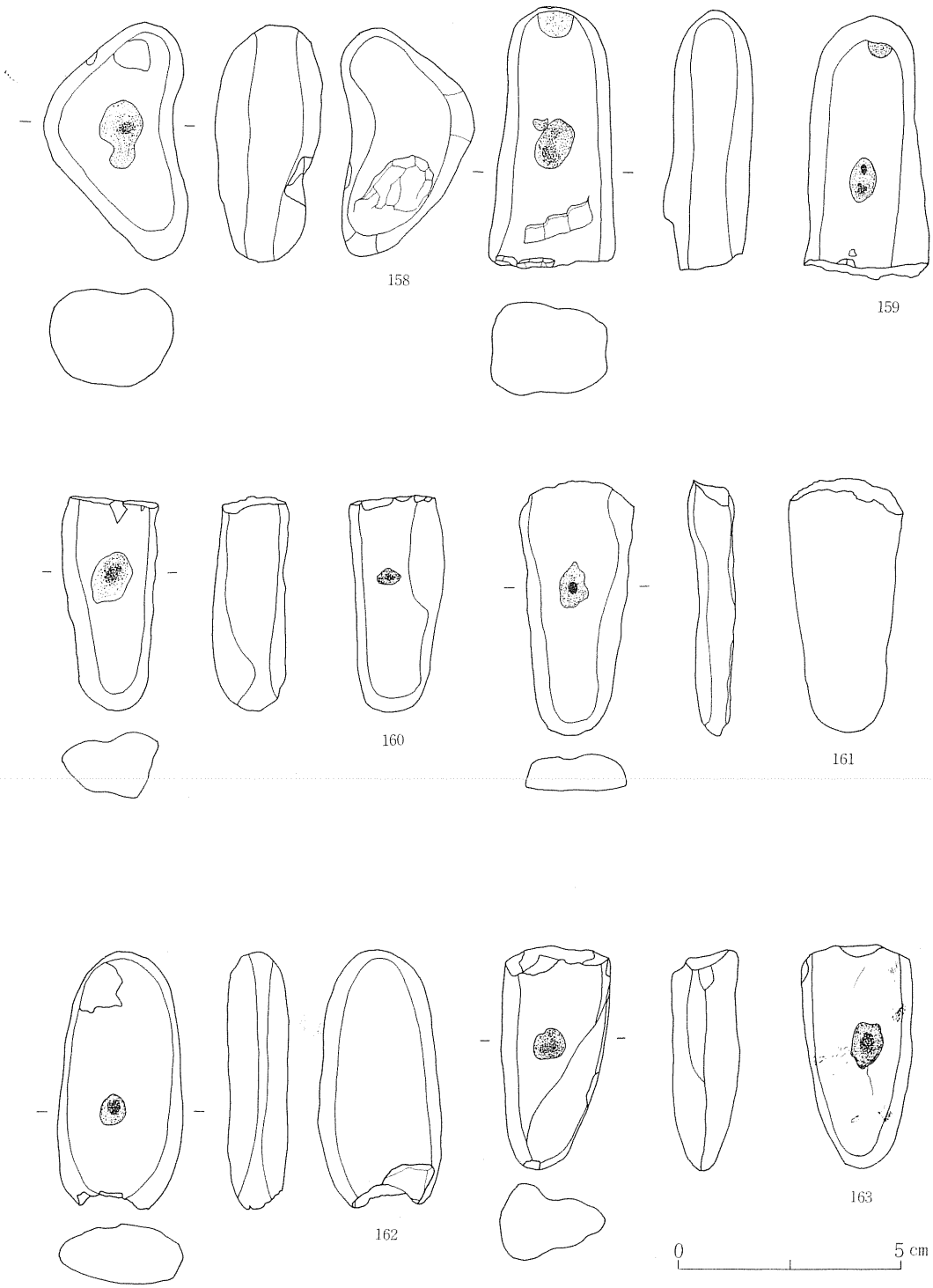
石質は安山岩10点、砂岩５点、凝灰岩２点、玢岩１点、泥岩１点である。



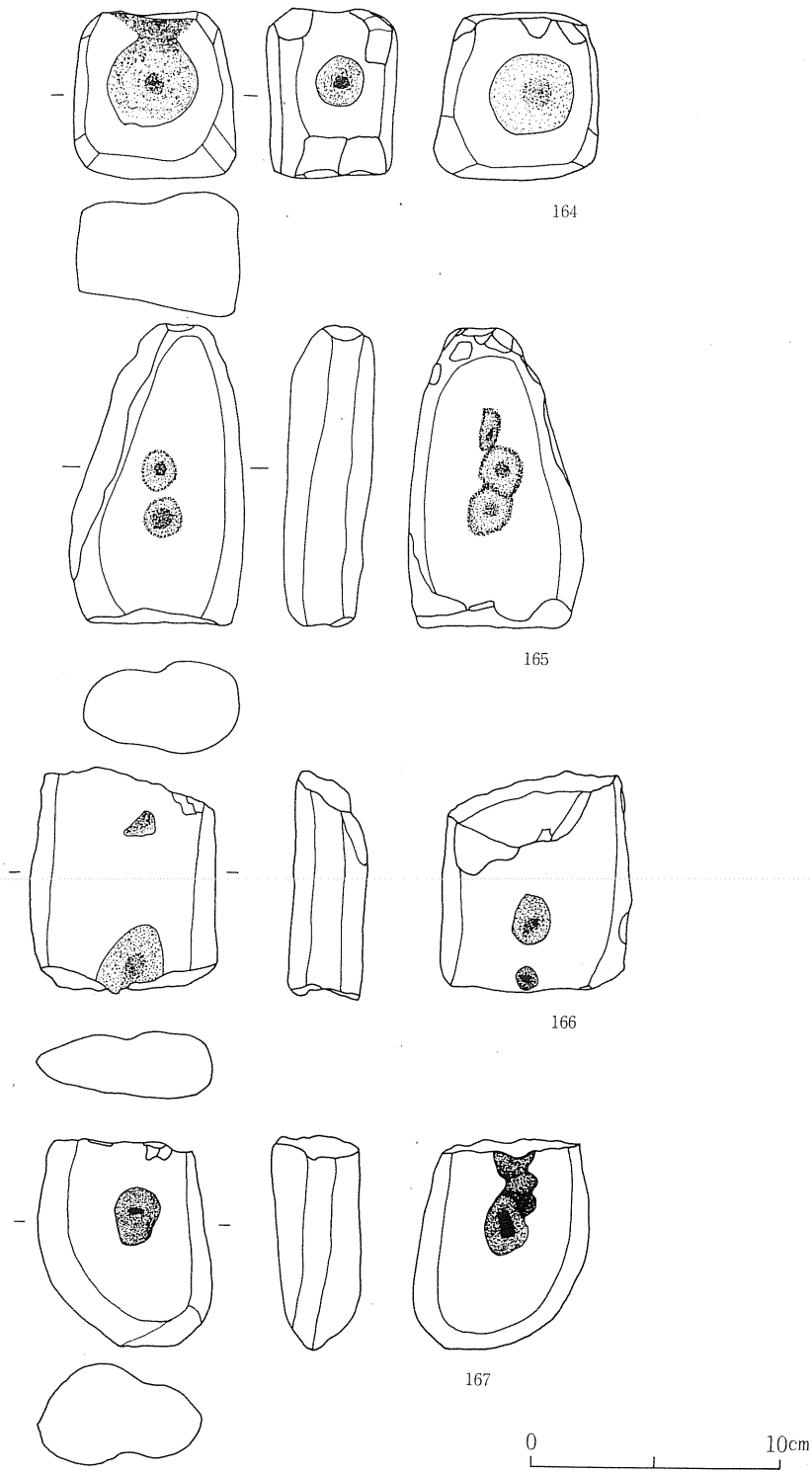
第31図　石刀・石棒実測図



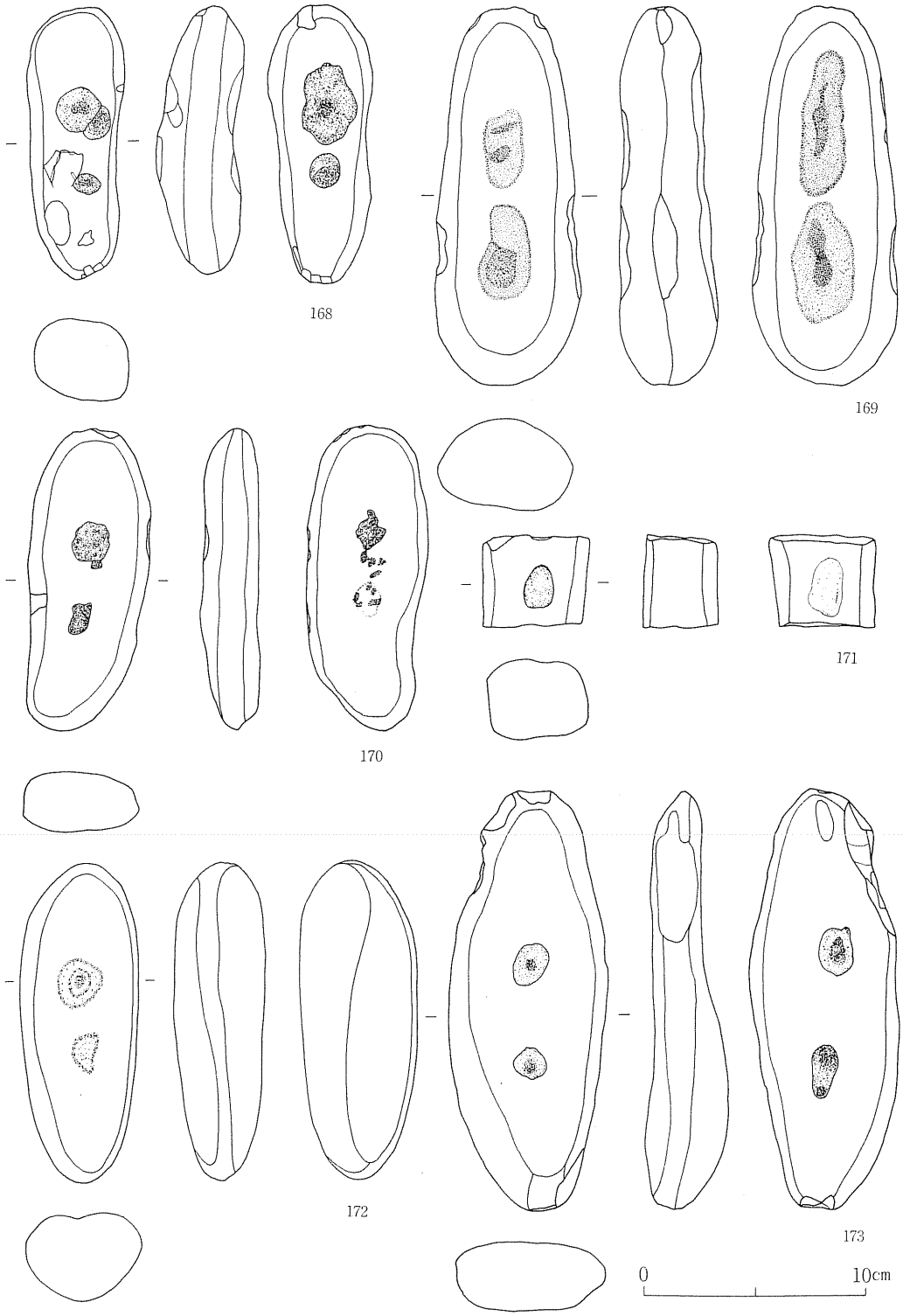
第32図　石剣・石刀・石棒実測図



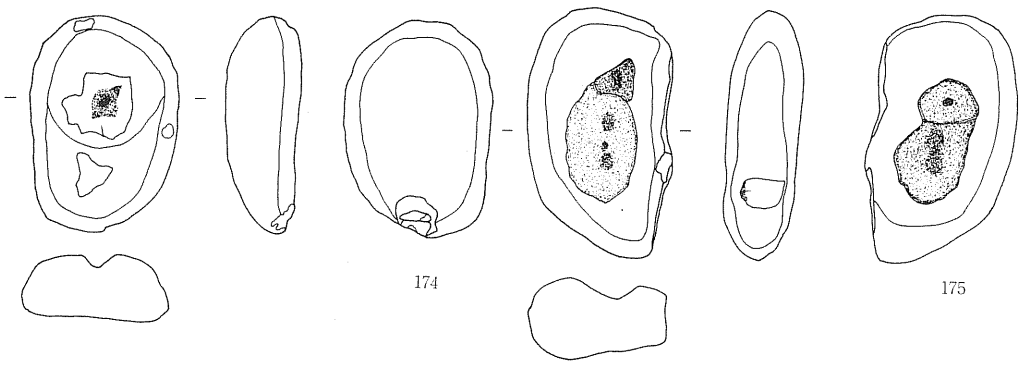
第33図　凹石実測図

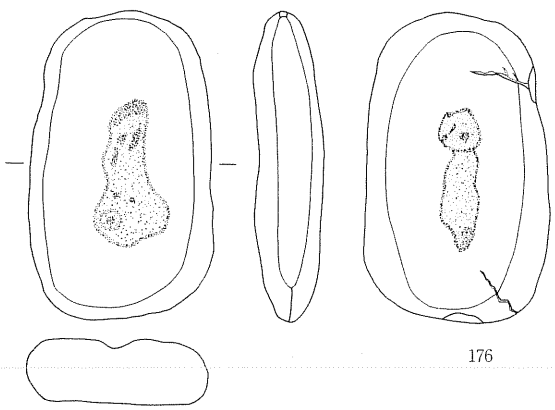


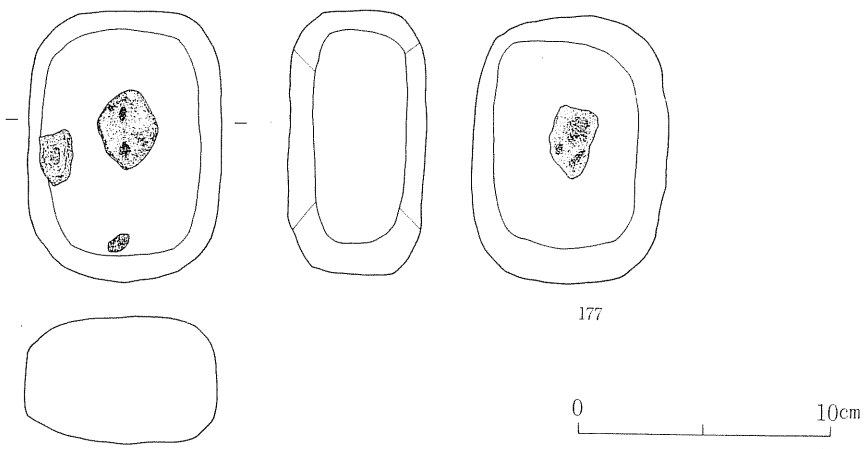
第34図　凹石実測図



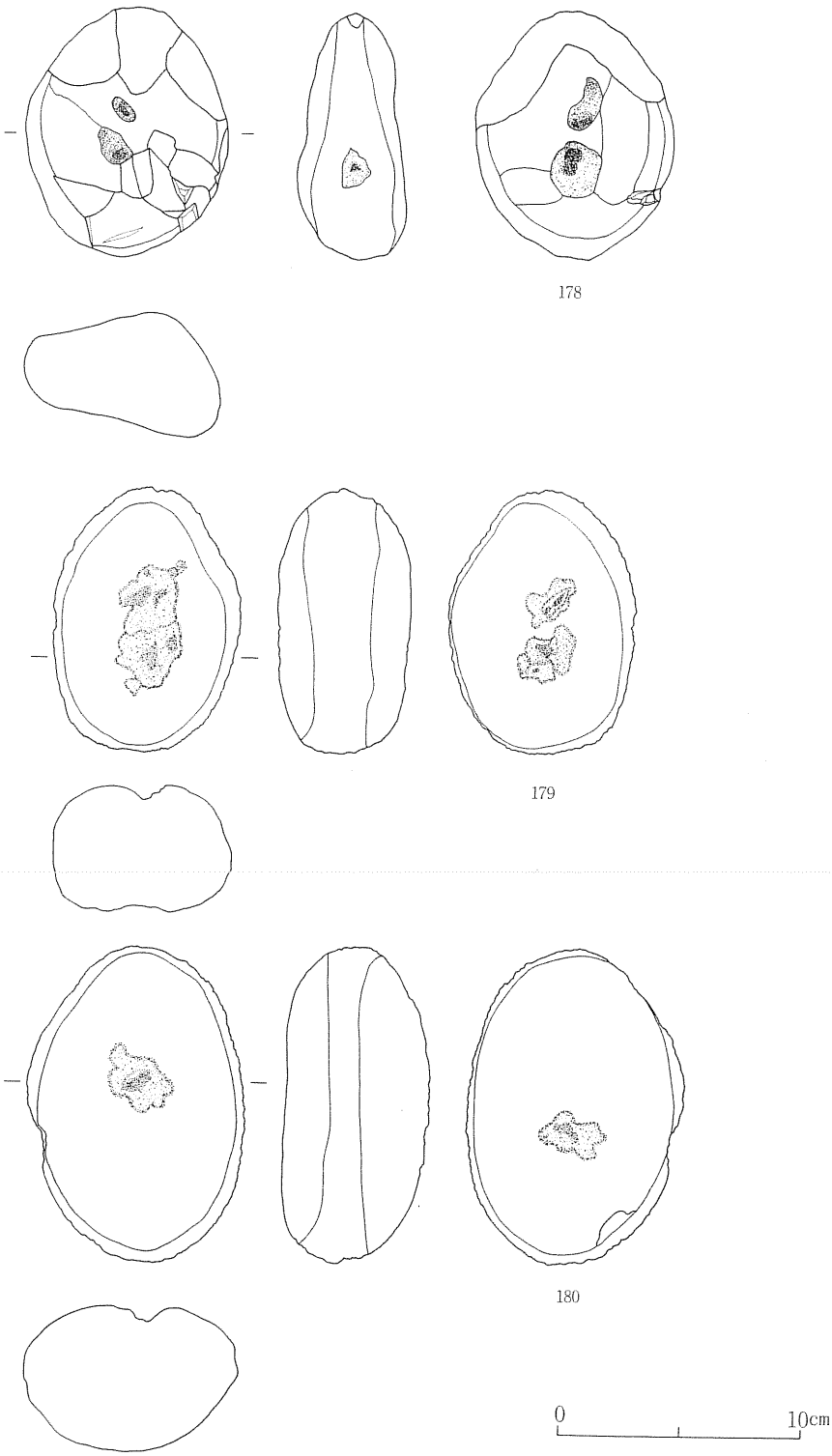
第35図　凹石実測図



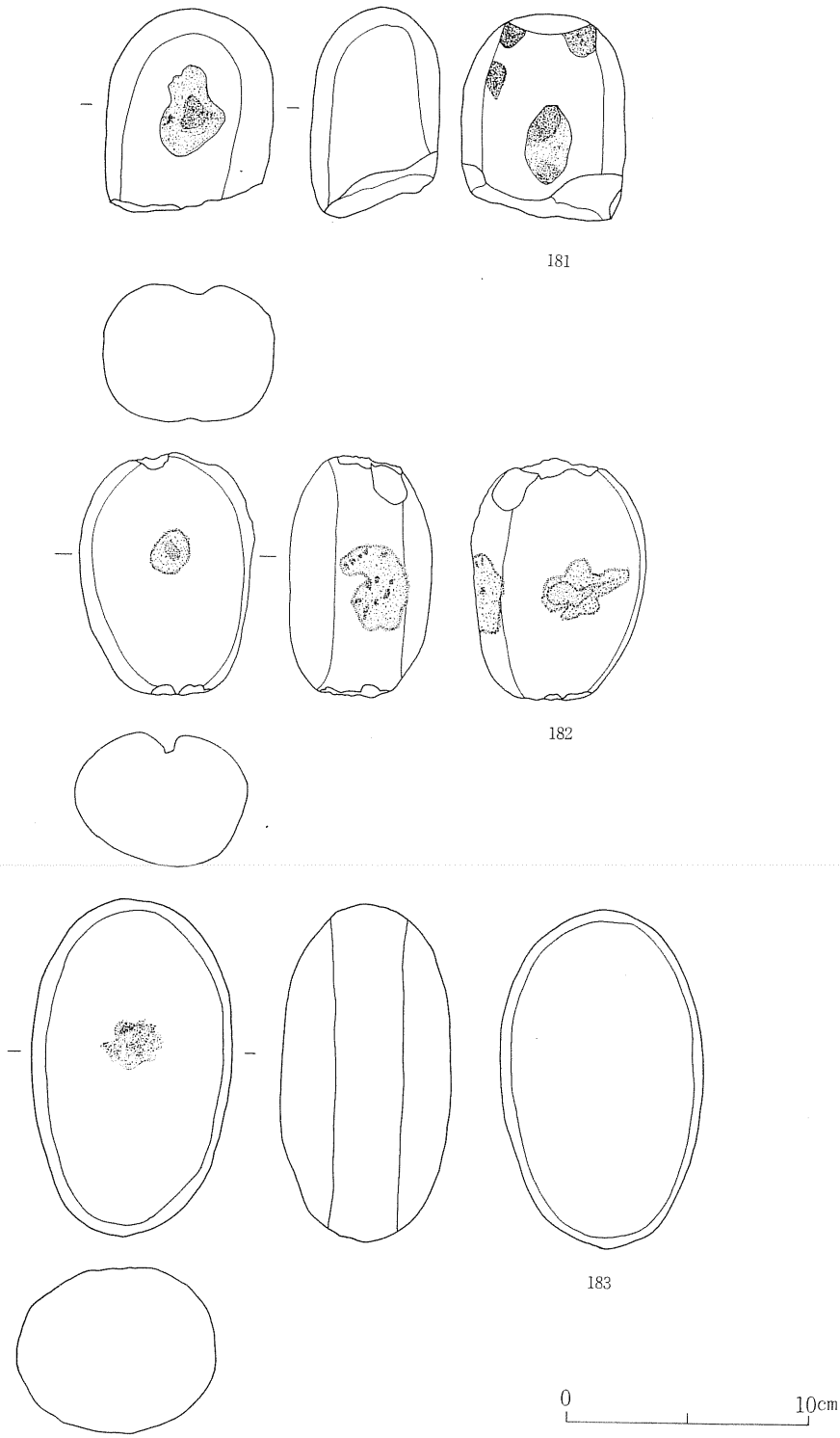




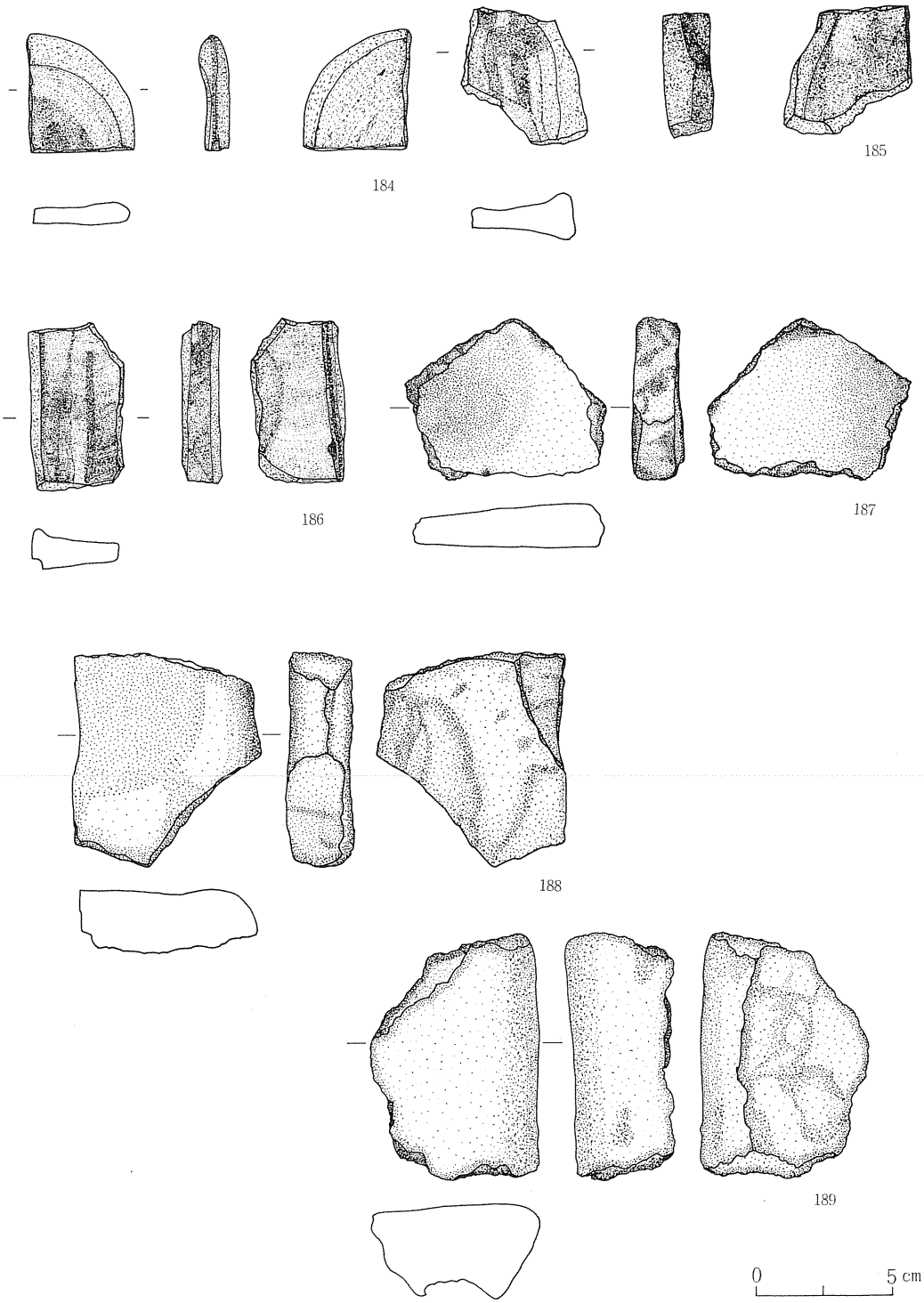
第36図　凹石実測図



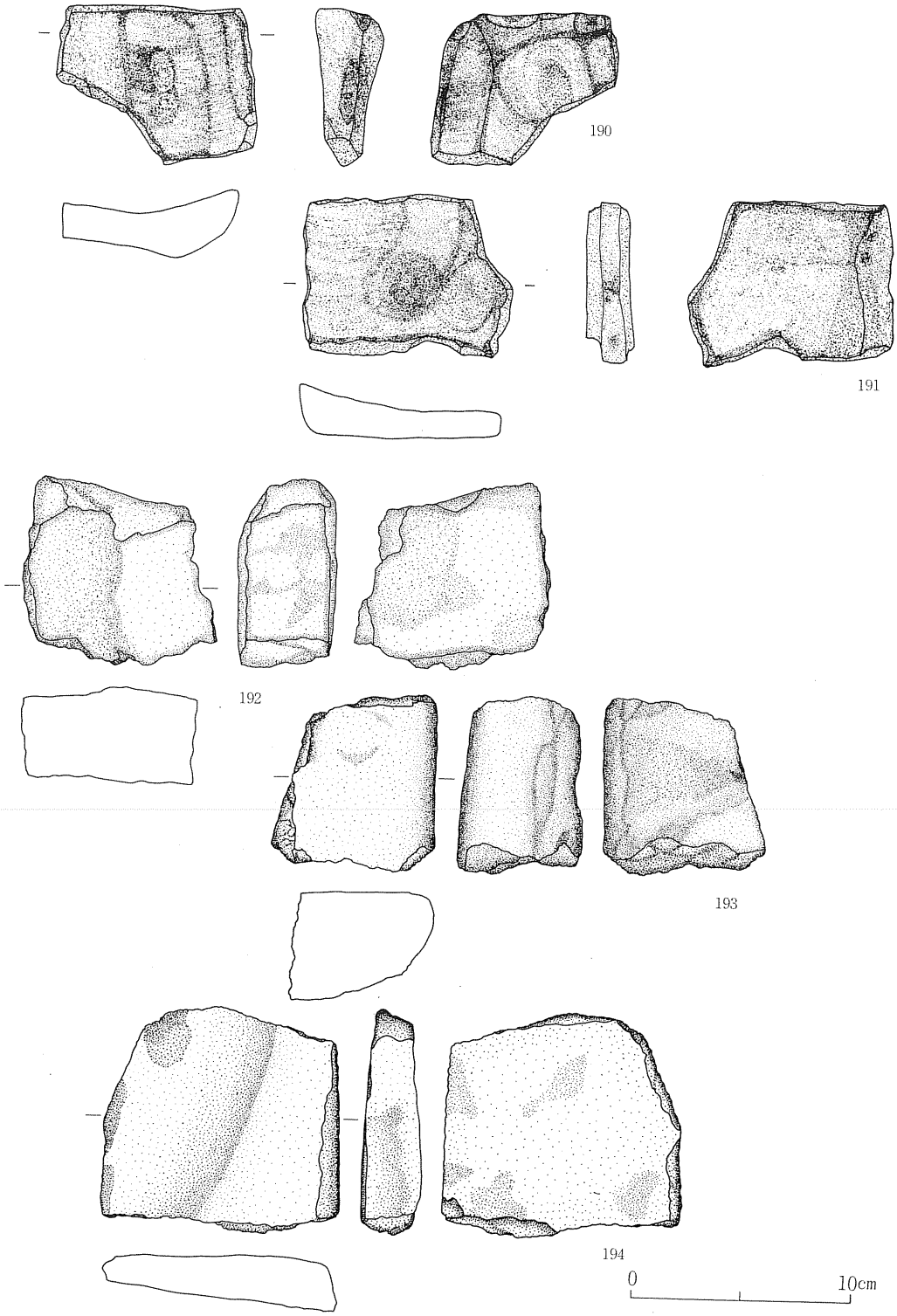
第37図　凹石実測図



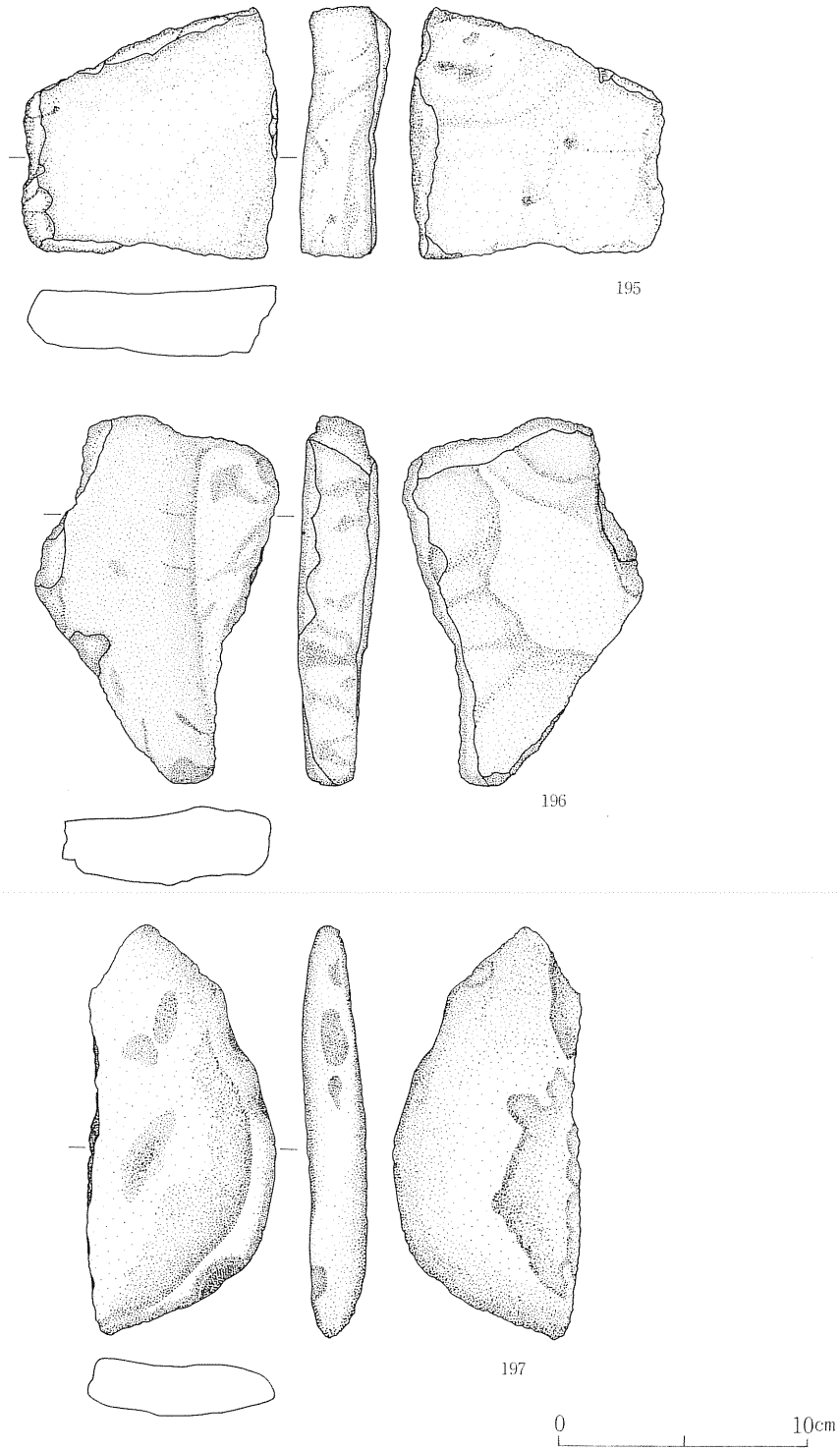
第38図　凹石実測図



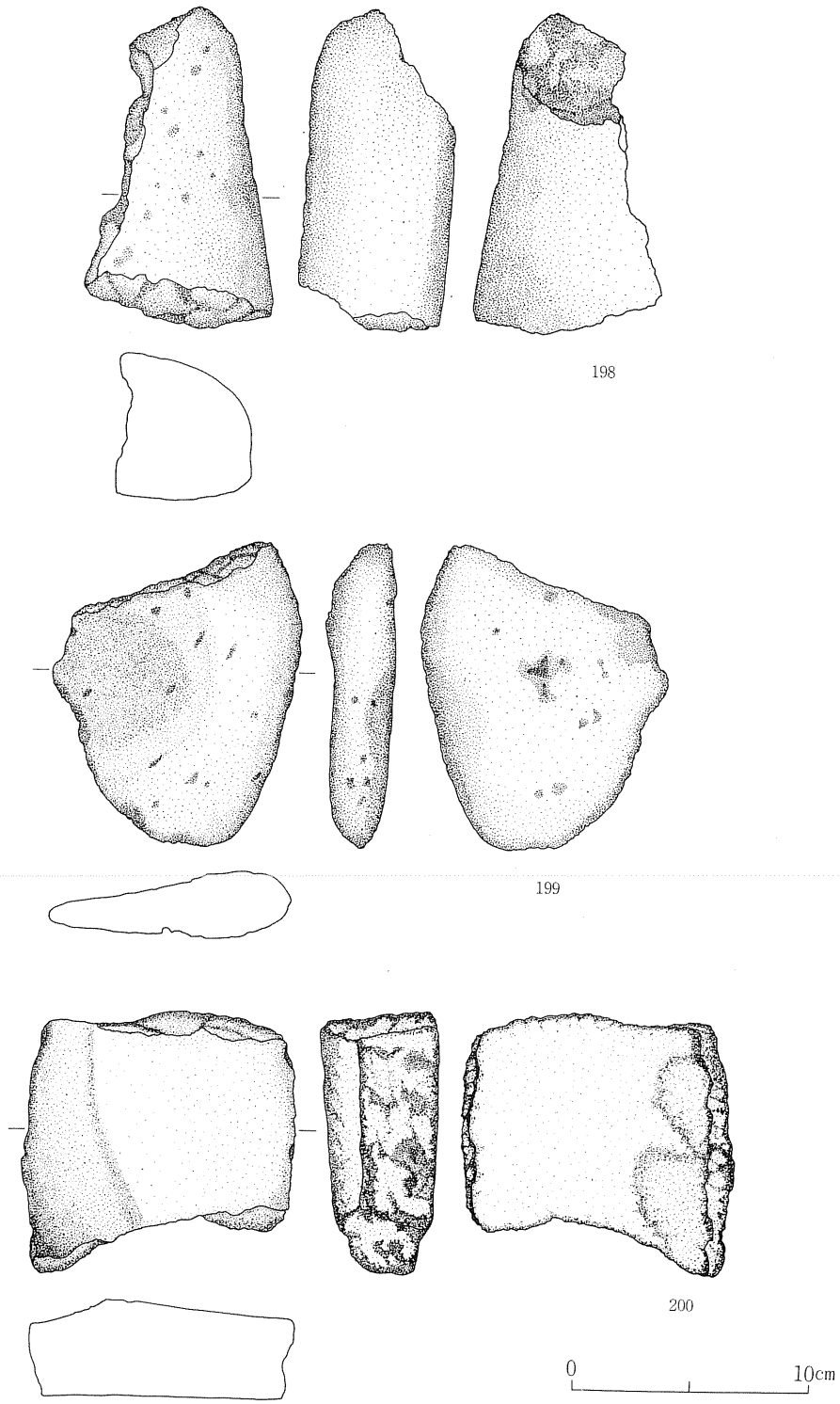
第39図　石皿実測図



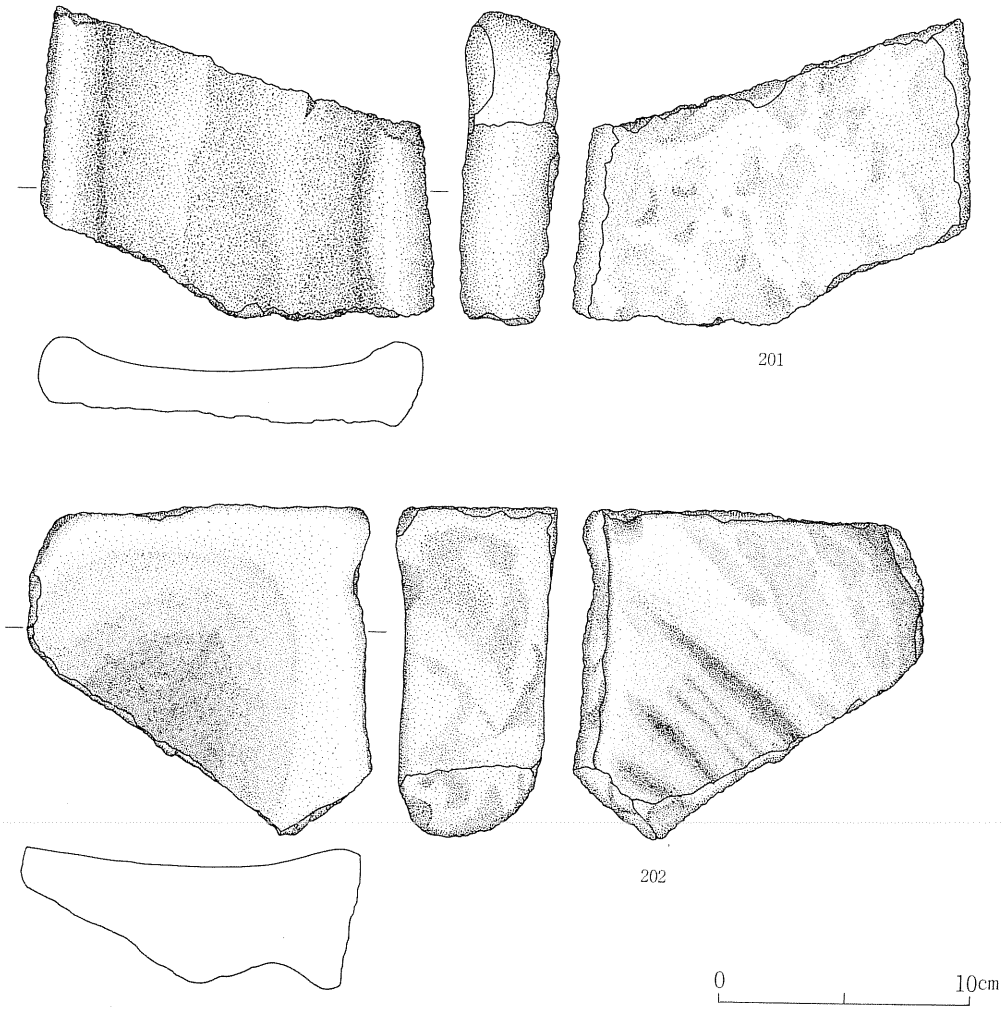
第40図　石皿実測図



第41図　石皿実測図



第42図　石皿実測図

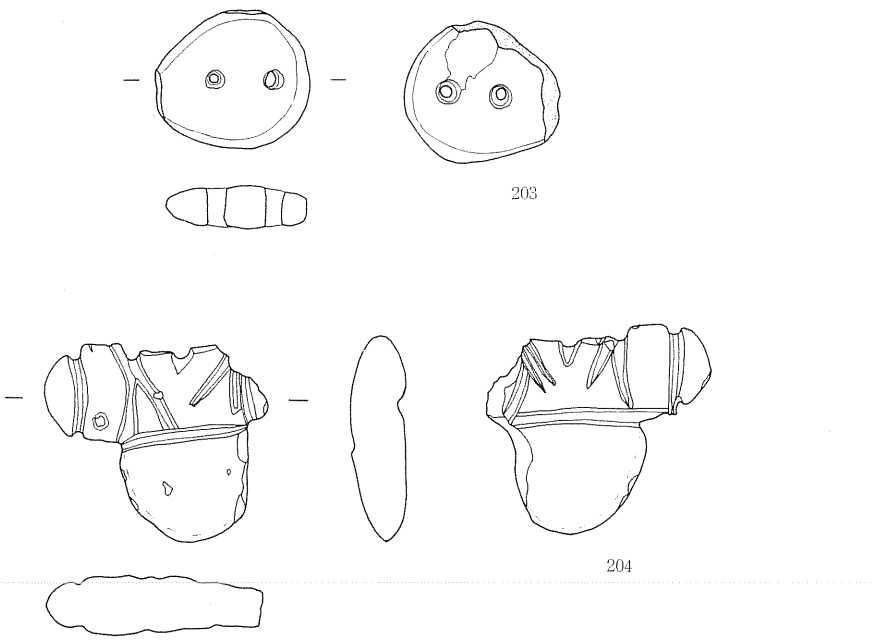


第43図　石皿実測図

⑫　岩偶・有孔石製品（第44図203・204）

岩偶は両手を広げたようなかっこうで、頭部と足に当る部分のないものである。胴部・腕・手等を沈線による区画で表現している。石質は凝灰岩である。

有孔石製品はほぼ円形の石の中央に、径 0.5cmほどの小孔を２個穿ち、裏側の孔の方がやや大きめになっている。２個の孔の間隔は約１cmある。石質は泥岩である。



第44図　岩偶・有孔石製品実測図

註１　岩手県北上市に所在する九年橋遺跡の第５次調査報告書に２点報告がなされている。

註２　平鹿遺跡では12点報告されているが、石名館遺跡出土のものに類するのは10点認められた。

引用　参考文献

宮城県教育委員会　1980　「金剛寺貝塚、宇賀崎１号墳他」宮城県文化財調査報告書第67集

仙台市教育委員会　1980　「仙台市富沢三神峯遺跡発掘調査報告書―東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部Ｃ地点緊急発掘調査―」

北上市教育委員会　1979　「九年橋遺跡第５次発掘調査報告書」

秋田県教育委員会　1983　「平鹿遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第101集

第2表　出土石製品計測一覧表

単位はcm及びg

種類	挿図番号	出土地区	法量 最大長	法量 最大幅	法量 最大厚	法量 重量	石質	備考
石鏃	1	18	2.0	0.7	0.5	0.9	頁岩	
	2	6	2.4	1.0	0.5	1.0	〃	
	3	18	2.6	1.8	0.8	3.2	〃	
	4	18	2.1	1.3	0.4	0.8	〃	
	5	18	2.0	2.0	0.3	1.0	〃	
	6	18	2.8	1.2	0.6	1.5	〃	
	7	6	2.1	1.2	0.6	0.6	〃	
	8	7	2.0	1.2	0.3	0.5	〃	
	9	17	2.2	1.9	0.6	1.3	石英	
	10	18	2.0	1.1	0.5	0.9	〃	
	11	19	2.1	0.9	0.4	0.6	頁岩	
	12	4	2.5	1.2	0.5	1.2	〃	
	13	7	2.4	1.5	0.3	1.2	〃	
	14	17	2.0	1.2	0.2	0.6	〃	
	15	18	2.0	1.2	0.5	1.3	〃	
	16	18	2.2	1.6	0.3	0.8	〃	
	17	18	2.1	1.5	0.4	0.6	黒曜石	
	18	18	2.9	2.1	0.4	0.9	頁岩	
	19	18	2.8	1.4	0.8	2.7	〃	
	20	18	3.3	1.7	0.8	2.1	〃	
	21	7	3.8	1.7	0.5	2.5	〃	アスファルト付着
	22	18	2.2	1.6	0.4	1.1	〃	〃
	23	18	2.7	1.3	0.3	1.1	〃	
	24	18	2.6	1.3	0.3	0.9	〃	
	25	18	3.2	1.0	0.5	1.2	〃	
	26	17	3.2	1.1	0.5	2.1	〃	
	27	18	3.2	1.3	0.7	1.6	〃	
石槍	28	7	2.1	0.8	0.6	1.4	〃	
	29	18	4.0	0.9	0.7	2.9	〃	
	30	19	3.9	1.4	0.8	4.8	〃	
	31	18	4.5	0.9	0.7	3.1	〃	
	32	18	4.6	1.1	1.0	4.9	〃	
	33	4	3.4	0.7	0.5	1.2	〃	
	34	19	5.7	1.2	0.5	2.5	〃	
石槍	35	18	6.4	1.6	1.0	9.2	頁岩	
	36	18	4.2	1.9	0.6	4.2	〃	
	37	19	3.2	1.6	0.8	3.8	〃	
	38	18	3.0	1.9	1.0	5.0	〃	
	39	18	3.3	2.2	1.1	6.5	〃	
	40	18	3.1	2.3	0.9	6.2	〃	
	41	18	3.3	2.1	0.8	4.5	〃	
石錐	42	19	1.8	1.6	0.7	1.6	〃	
	43	18	2.8	1.2	0.8	1.6	〃	
	44	19	2.8	1.7	0.6	1.7	〃	
	45	18	3.9	1.6	1.0	4.2	〃	
	46	9	4.5	1.5	0.9	3.6	〃	
	47	19	4.0	1.8	1.1	8.1	〃	
	48	18	4.2	1.7	1.1	7.1	〃	
	49	5	2.2	2.7	0.8	4.1	〃	
	50	19	2.3	2.0	0.9	3.5	〃	
	51	18	3.5	3.0	0.9	7.4	〃	
	52	17	5.0	3.3	1.1	13.2	〃	アスファルト付着
	53	18	5.1	3.1	1.2	11.5	〃	
	54	18	4.5	3.5	1.4	15.6	〃	
	55	19	5.3	3.8	1.7	24.6	〃	
掻器	56	18	2.9	1.8	0.7	3.7	〃	アスファルト付着
	57	18	6.9	2.2	1.1	15.7	〃	〃
	58	19	3.5	2.2	0.6	7.3	〃	
	59	18	6.8	2.4	1.1	15.6	〃	
	60	18	3.6	3.0	0.8	9.8	〃	
	61	18	8.2	3.5	0.8	26.7	〃	アスファルト付着
石匙	62	18	3.2	2.3	0.6	2.6	〃	
	63	18	3.3	2.5	0.8	6.1	〃	
	64	19	3.4	2.5	1.0	8.8	〃	
	65	17	4.6	1.8	0.8	4.9	〃	
	66	18	5.1	2.9	0.8	13.1	〃	
	67	18	4.3	2.2	1.0	7.9	〃	
	68	18	4.8	1.8	0.8	7.8	〃	

種類	挿図番号	出土地区	法量 最大長	法量 最大幅	法量 最大厚	法量 重量	石質	備考
石匙	69	19	6.2	2.4	0.8	9.2	頁岩	
	70	18	5.5	3.6	1.1	12.1	〃	
	71	17	5.2	2.4	0.8	8.6	〃	
	72	19	5.3	2.9	1.1	12.2	〃	
	73	18	5.1	3.7	0.7	12.3	〃	
	74	17	2.2	3.6	1.2	6.3	〃	
	75	19	2.5	3.2	0.9	3.6	〃	
	76	18	2.6	4.0	0.7	5.4	〃	
	77	6	3.2	4.0	1.1	10.4	〃	
	78	18	4.2	5.3	1.1	20.8	〃	
	79	18	3.7	4.2	0.8	11.5	〃	
	80	5	3.9	5.2	1.0	15.6	〃	
	81	18	4.5	4.9	1.2	18.3	〃	
	82	18	3.8	5.6	0.9	15.7	〃	
	83	19	3.1	6.2	0.8	10.0	〃	
	84	19	2.8	4.3	0.9	9.3	〃	
	85	18	2.2	3.5	0.7	5.5	〃	
	86	17	2.8	7.2	1.0	16.0	〃	
	87	17	3.7	7.9	1.1	11.7	〃	
	88	8	4.5	7.0	1.4	24.5	〃	
箆状石器	89	18	3.4	1.3	6.5	3.4	〃	
	90	19	4.3	2.5	1.0	12.6	〃	
	91	18	4.6	2.5	1.3	7.0	〃	
	92	18	4.9	2.7	1.3	16.5	〃	
	93	18	5.4	2.9	1.3	21.6	〃	
	94	17	5.4	3.1	1.5	20.6	〃	
	95	18	5.5	3.6	1.0	13.7	〃	
	96	18	5.8	3.8	1.8	30.6	〃	
	97	6	3.1	2.8	1.1	22.8	〃	
	98	18	4.9	3.5	1.8	30.0	〃	
	99	18	5.0	4.3	1.4	29.5	〃	
	100	18	5.3	4.3	1.2	37.0	〃	
	101	18	4.5	3.7	0.8	13.7	〃	
削器	102	18	3.7	2.3	0.7	6.8	〃	

種類	挿図番号	出土地区	法量 最大長	法量 最大幅	法量 最大厚	法量 重量	石質	備考
削器	103	19	3.8	3.0	1.0	11.7	頁岩	
不定形石器	104	18	3.2	3.5	1.2	12.4	〃	
	105	18	3.4	4.2	1.0	24.1	〃	
	106	17	4.0	4.5	1.1	20.2	〃	
	107	17	4.8	3.7	0.9	12.4	〃	
	108	18	4.2	3.8	0.8	12.1	〃	
	109	19	4.1	3.6	0.9	14.3	〃	
	110	18	6.4	4.8	2.1	27.3	〃	
	111	7	4.0	6.2	1.5	45.8	〃	
	112	7	6.0	6.1	2.2	72.1	〃	
	113	18	6.6	4.6	0.8	21.1	〃	
	114	18	8.2	3.7	2.6	62.3	〃	
	115	18	7.0	4.0	1.1	21.5	〃	
	116	18	8.2	3.3	1.0	21.2	〃	
	117	17	8.5	3.5	1.4	29.7	〃	
	118	19	8.5	4.0	1.5	47.1	〃	
	119	18	10.7	3.5	1.8	50.7	〃	
	120	17	7.9	5.8	1.3	62.0	〃	
打製石斧	121	7	6.0	7.4	2.3	132	粘板岩	
	122	17	13.7	8.2	1.3	95	〃	
	123	4	14.8	8.0	2.2	355	凝灰質泥岩	
	124	18	14.4	7.8	2.7	395	粘板岩	
磨製石斧	125	5	4.6	1.2	0.6	5.8	緑色凝灰岩	
	126	17	5.6	3.3	2.3	61	泥岩	
	127	19	5.2	4.2	2.5	80	凝灰岩	
	128	18	6.0	3.7	2.2	9.5	緑色凝灰岩	
	129	19	4.7	5.0	2.4	112	安山岩	
	130	18	7.5	3.5	2.0	50	凝灰岩	
	131	6	8.1	3.6	2.4	110	安山岩	
	132	19	7.9	4.2	2.3	132	緑色凝灰岩	
	133	7	8.9	3.7	2.4	128	安山岩(玢岩)	
	134	18	6.5	4.8	2.0	52	粘板岩	
	135	18	7.7	4.0	2.4	120	安山岩	
	136	19	8.1	4.2	2.5	135	〃	

種類	挿図番号	出土地区	法量 最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備号
磨製石斧	137	7	7.7	4.7	2.6	165	安山岩	
	138	7	8.6	4.5	2.3	140	〃	
	139	18	7.5	4.7	2.3	131	〃	
	140	7	8.0	3.5	1.8	88	玢岩	
	141	18	9.5	3.8	1.4	72	泥岩	
	142	18	10.7	3.0	2.6	140	緑色凝灰岩	
	143	6	8.7	4.5	2.6	165	安山岩(玢岩)	
	144	19	10.3	3.7	2.6	155	安山岩	
	145	19	9.6	4.0	2.8	200	〃	
	146	19	11.6	5.4	2.6	258	〃	
	147	17	11.3	4.5	2.5	201	凝灰岩	
石刀	148	18	6.7	1.9	1.3	20	粘板岩	
	149	19	8.4	2.8	0.9	30	〃	
	151	19	10.3	2.9	1.4	45	緑色凝灰岩	
	152	18	12.3	2.4	1.7	58	安山岩(玢岩)	
	156	7	22.4	3.2	1.1	125	黒色泥岩	
石棒	150	不明	7.6	2.9	1.5	60		
	153	18	4.0	5.2	2.9	132	頁岩	
	154	19	4.7	5.1	3.9	120	〃	
	155	17	15.4	4.7	4.5	485	玄武岩	
石剣	157	18	28.4	3.7	4.7	222	凝灰岩	
くぼみ石	158	8	10.6	5.8	1.8	220	安山岩	
	159	8	11.7	5.7	4.8	405	頁岩	
	160	7	9.6	4.2	3.2	180	泥岩	
	161	19	11.4	5.2	3.0	130	凝灰岩	
	162	18	11.6	5.6	2.8	152	泥岩	
	163	8	9.9	4.8	2.9	130	凝灰岩	
	164	19	6.8	6.6	5.2	432	安山岩	
	165	7	12.1	7.0	3.4	360	〃	
	166	17	9.1	7.5	3.0	225	泥岩	
	167	9	8.3	6.7	3.4	270	安山岩	
	168	17	12.4	4.4	3.7	245	〃	
	169	7	17.2	6.7	4.5	595	砂岩	
	170	4	13.7	5.5	2.6	310	安山岩	

種類	挿図番号	出土地区	法量 最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
くぼみ石	171	18	4.2	4.9	3.9	118	凝灰岩	
	172	6	14.5	5.4	4.2	368	〃	
	173	3	19.1	7.2	3.7	525	安山岩	
	174	7	8.6	5.9	2.9	160	泥岩	
	175	6	9.9	5.6	3.0	156	〃	
	176	18	12.3	7.4	2.7	285	安山岩	
	177	17	10.8	7.7	5.4	802	〃	
	178	7	10.2	8.3	4.5	300	(砂質)泥岩	
	179	17	10.9	7.7	5.5	595	安山岩	
	180	19	13.0	14.0	6.0	840	〃	
	181	17	8.4	6.9	5.3	490	〃	
	182	19	10.1	7.2	5.8	315	凝灰岩	
	183	19	13.9	8.2	7.0	1060	安山岩	
石皿	184	17	4.4	4.4	1.1	21	泥岩	
	185	8	5.1	4.4	2.3	40	(石英)安山岩	
	186	19	6.2	4.5	1.5	35	安山岩	
	187	18	6.0	7.2	2.0	100	〃	
	188	19	7.9	6.8	2.5	182	凝灰岩	
	189	19	9.1	6.3	4.0	270	玢岩	
	190	19	7.3	9.0	3.1	105	砂岩	
	191	17	7.4	9.4	2.2	148	〃	
	192	17	8.6	8.4	4.5	540	安山岩	
	193	5	8.1	7.5	5.6	480	〃	
	194	18	10.2	10.8	2.7	440	〃	
	195	19	10.1	10.1	3.1	335	〃	
	196	18	14.8	8.9	3.1	510	〃	
	197	18	16.6	7.5	2.4	355	砂岩	
	198	5	13.6	7.9	6.2	749	〃	
	199	18	12.9	10.2	2.9	350	安山岩	
	200	17	11.1	11.4	5.0	880	〃	
	201	19	12.4	15.3	3.8	545	凝灰炭	
	202	17	13.1	13.5	6.4	990	砂岩	
有孔石製品	203	19	3.7	4.1	1.2	2.0	泥岩	
岩偶	204	3	5.3	5.8	1.5	35	凝灰岩	

2.　平安時代の遺物

(1)　土器

本遺跡から出土した平安時代の遺物として土師器・須恵器があげられる。土師器は僅少で、そのほとんどが甕形土師器の胴部破片である。須恵器もその全容を知り得る資料は少ないが、坏形、壷、甕形を呈するものが多い。

坏形土師器は１点のみ図化できた（第45図１）。回転糸切り技法により轆轤から切り離され、外面体部下半に「田」の墨書が認められる。色調はにぶい橙色へ浅黄橙色を呈する。

坏形須恵器は９点が図化できた（第45図２～10）。２～５までは表面採集・耕作土中・７が17Ｇ砂礫層中、８～10が18Ｇ砂礫層中の出土であるが、２・８と３～７・９・10では、器形・胎土・轆轤からの切り離し技法・焼成・色調が明らかに相違している。２・８は口径に比して底径が大きく、器高が低い。回転篦切り技法で轆轤から切り離したあと底部を篦なでしており、胎土にはよく精選された粘土を使用している。色調は灰白色（2.5Ｙ8/2）を呈し、焼成は良好である。これに対し、３～７・９・10では、胎土に砂礫を混入する粘土を使用し、器高が底径とほぼ同じで、回転糸切り技法により轆轤から切り離されている。色調は白灰色（7.5Ｙ8/1）から灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。焼成は良好である。７～10は、蛍光Ｘ線分析による胎土分析・産地推定試料とし、分析した。

壷・甕形須恵器（第46図）は、いずれも表面採集・耕作土中の出土である。11は大型広口壷形須恵器の口縁部破片である。外面に篦状工具による整形が行なわれている。12～16は胴部破片であるが外面に平行叩目文、内面に同心円・青海波・扇骨状の工具・当て具の痕跡がみられる。17～19は、外面に平行叩目文、内面も17と19は平行叩目文がみられる。18の内面も明確ではないが、平行叩目文系の「当て具」工具痕が認められる。外面には釉が全体にみられる。

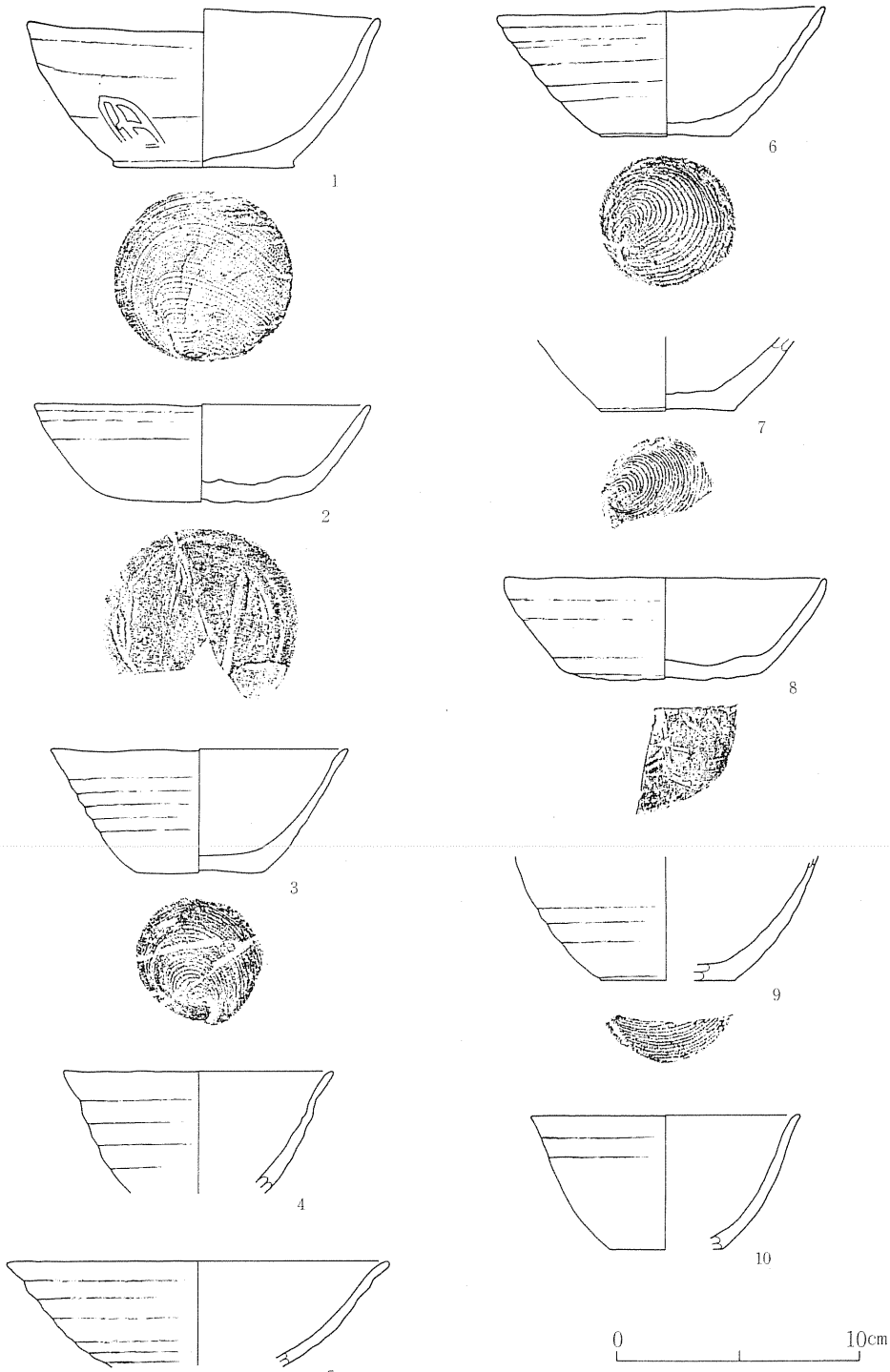
11・18・19は蛍光Ｘ線分析試料とした。

(2)　石名館遺跡出土須恵器の胎土分析

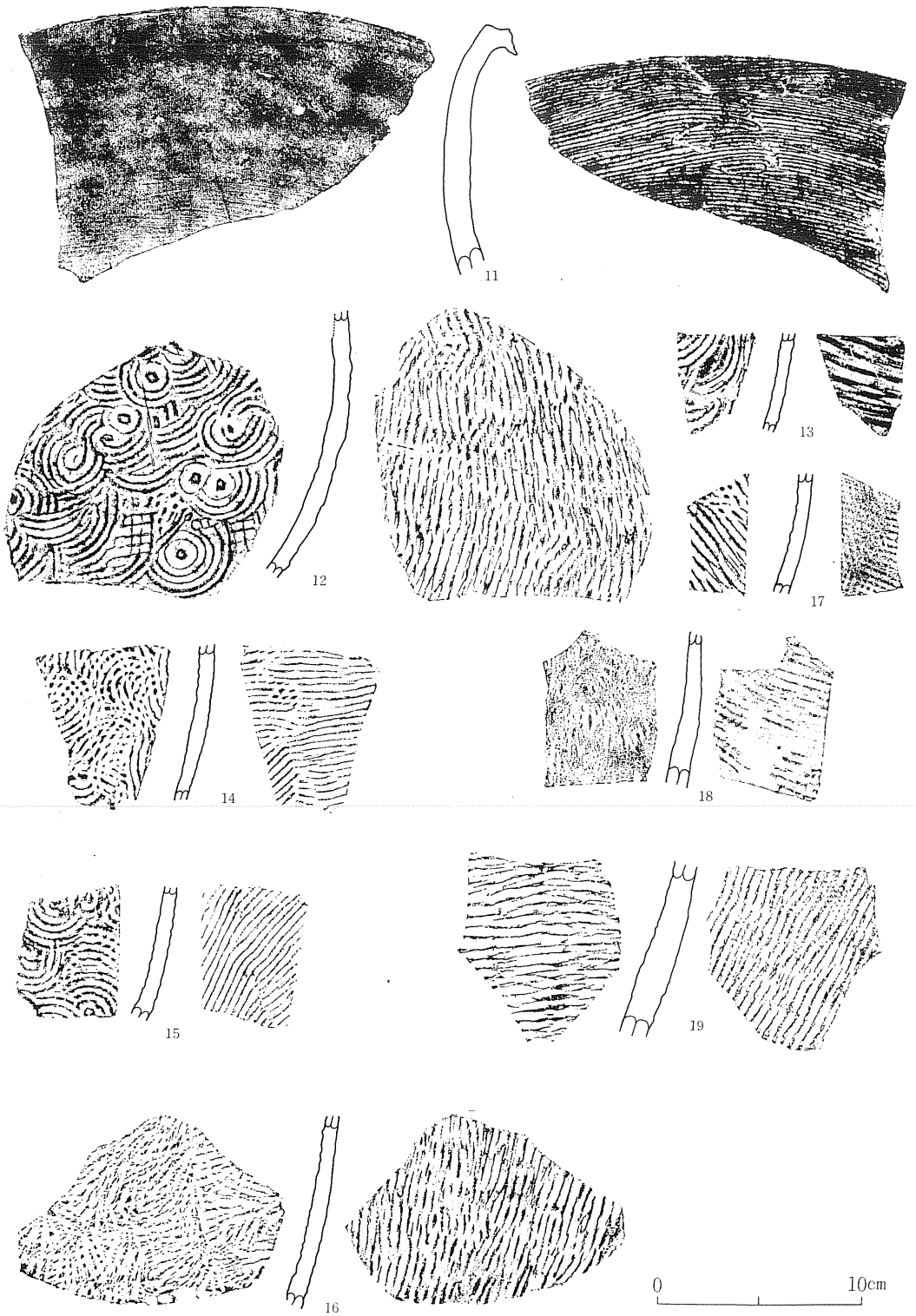
三辻　利一

胎土分析によって、須恵器、珠洲系土器の産地を推定することができる。本報告では石名館遺跡、オホン清水北遺跡、大鳥井山遺跡出土須恵器、および珠洲系土器の胎土分析の結果を報告する。

はじめに、Fe量を第47図に示してある。この図の上半部分に対応する産地の窯、または窯跡群出土須恵器の分布領域を示してある。この図を使うと秋田県産か青森県産かの判定は容易にできる。そうすると、石名館遺跡出土須恵器はすべてFe量が少なく、秋田県産の須恵器とみられる。しかもFe量のやや多い秋田市内の手形山窯、上新城窯、下新城窯産でないことは確かであろう。成沢窯、物見窯などが産地である可能性がある。オホン清水北遺跡出土須恵器もすべ

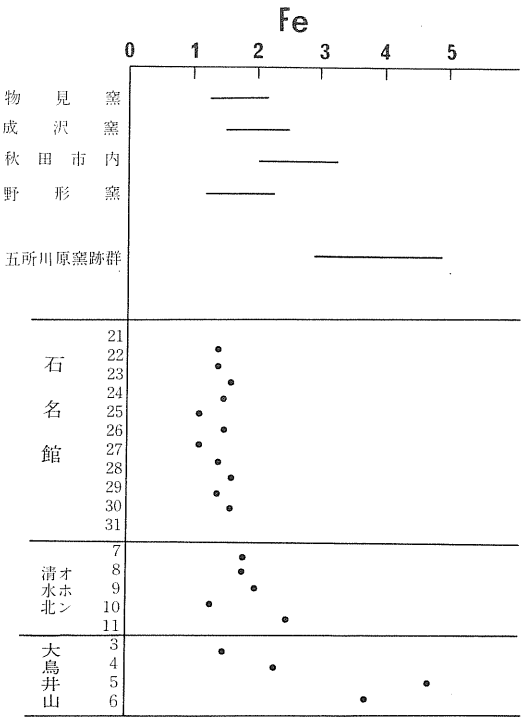


第45図　出土土師器・須恵器実測図



第46図　出土須恵器・拓影図

て秋田県産の須恵器とみられる。また、大鳥井山遺跡出土須恵器のうち試料番号3と4は秋田県産の須恵器か珠洲の可能性がある。ここには示していないが、珠洲焼のFe量領域も秋田県産の須恵器とほぼ同じである。一方、試料番号5と6はFe量が多く、これらは明らかに秋田県産の須恵器ではない。青森県五所川原窯跡群産の須恵器と推定される。

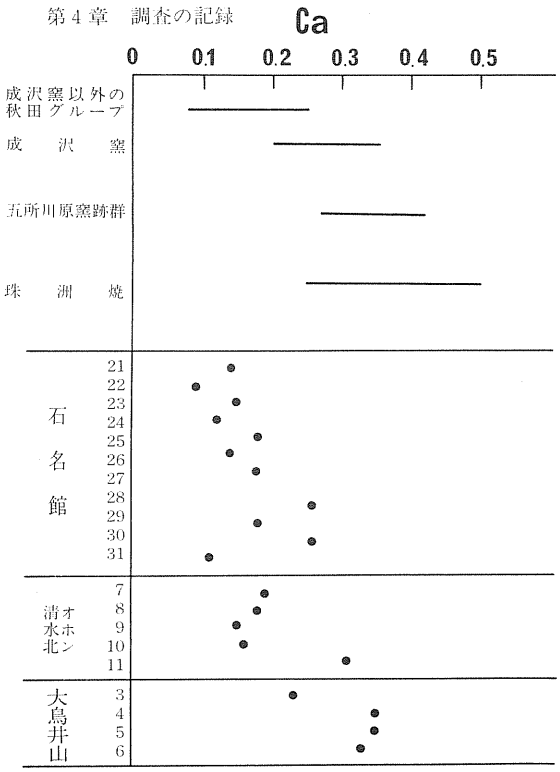


第47図　石名館・オホン清水北・大鳥井遺跡出土須恵器のFe量

第48図にはCa量を示してある。秋田県産の須恵器にはCa量が少ないのに対し、珠洲焼、青森県産の須恵器にはCa量が多い。したがって秋田県か、珠洲焼、青森県産須恵器かの判定にはCa因子も有効である。さらに、珠洲焼か青森県産須恵器かの判定には、第47図のFe因子が有効である。そうすると、Fe,Caの両因子から秋田県産の須恵器か、青森県産の須恵器か、珠洲焼かの区別ができる訳である。なお、秋田県産の須恵器のうち、成沢窯の須恵器のみはCa量がやや多く、珠洲焼、青森県産須恵器の両領域に重なる。この結果、試料番号28と30は成沢窯産と推定される。残りの試料は成沢窯以外の秋田県内の窯に対応する。オホン清水北遺跡の須恵器も試料番号11は成沢窯に対応し、残りは成沢窯以外の秋田県内の窯に対応する。また、大鳥井山遺跡出土須恵器のうち試料番号3と4は珠洲焼に、5と6は青森県産須恵器に対応する。

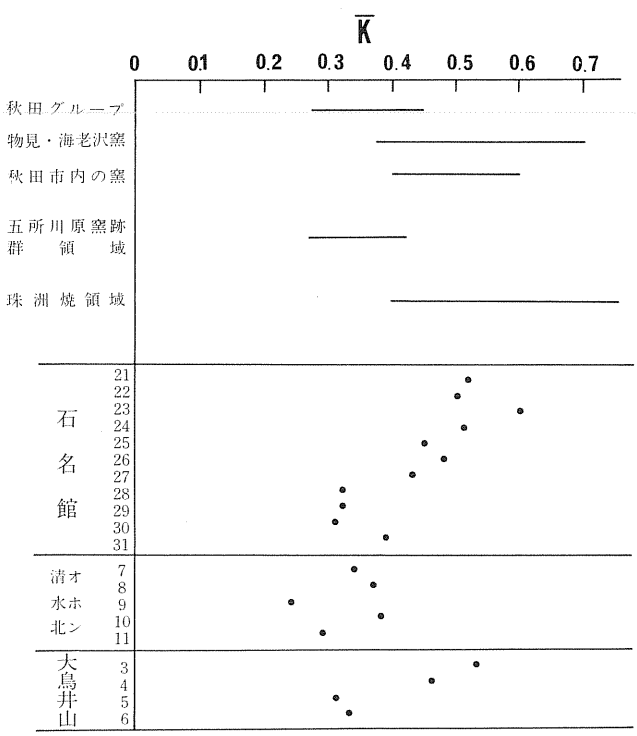
第49図には、K量を示してある。試料番号28・29・30は成沢窯に、残りは物見窯に対応する。オホン清水北遺跡出土須恵器のうち試料番号7と11は成沢窯に対応し、8と9は成沢窯と物見窯の境界に分布し、判定は微妙である。9はどの秋田県内の窯からもずれ、秋田県外産の可能性もある。また、大鳥井山遺跡出土須恵器のうち試料番号3と4は珠洲焼に、5と6は青森県産須恵器に対応する。

以上の結果から、石名館遺跡出土須恵器のうち試料番号29と30は成沢窯産、残りは物見窯産（境界近くに分布するものは成沢窯産の可能性もある）と推定される。オホン清水北遺跡出土須恵器も石名館遺跡出土須恵器と似ており、試料番号7と11は成沢窯産、8と9は物見窯産か成沢窯産、9は県外産と推定された。また、大鳥井山遺跡出土須恵器のうち3と4は珠洲焼、



第48図　石名館・オホン清水北・大鳥井山遺跡出土須恵器のCa量

示す。Ca因子より試料番号11は成沢窯に対応したが、Rb−Sr分布図でも成沢窯に対応し、成沢窯産とみられる。７・８・９は郷士館窯に対応するように図示してあるが考古学的に妥当であるかどうか検討してみる必要がある。勿論、これらは成沢窯領域のすぐ近くに分布するので成沢窯産の可能性も十分ある。10は海老沢窯に対応しているが産地はよく分からない。第52図には、大鳥井山遺跡出土須恵器のRb−Sr　分布図を示す。Fe、Ca、K因子より予想されるように試料番号３と４は珠洲領域に、５と６は青森県五所川原窯跡群産と推定された。これらの推定をRb−Sr　分布図でさらに確かめてみよう。第50図には石名館遺跡出土須恵器のRb−Sr分布図を示す。試料番号25・26・27・28・30は成沢窯領域に、また、試料番号22・23・24・31は物見窯領域に分布するが、29は両領域から少しずれる。しかし、分布領域が近いことからみて23以外の須恵器は成沢窯産である可能性が大きい。23は物見窯産というより仕方がない。第51図には、オホン清水北遺跡出土須恵器のRb−Sr　分布図を



第49図　石名館・オホン清水北・大鳥井山遺跡出土須恵器のK量

また試料番号５と６は五所川原窯跡群領域に対応する。この結果、３と４は珠洲焼、５と６は青森県側からの搬入品と判定された。

なお、石名館遺跡の土器については、次のように対照されたい。

21……第46図11

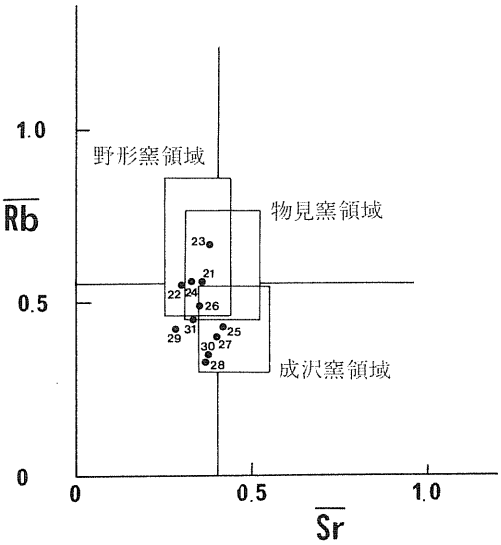
22……第46図19

23……第46図18

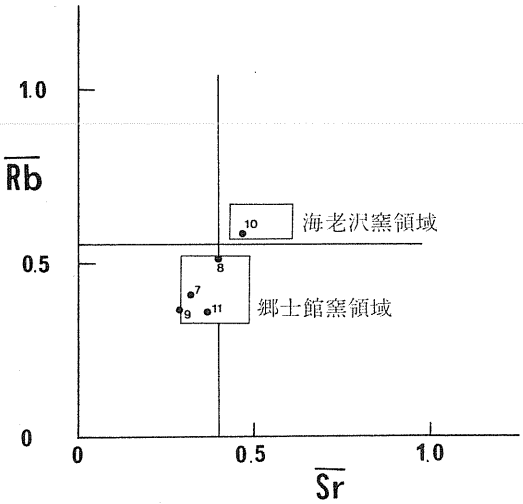
24……第45図８

25……第45図10

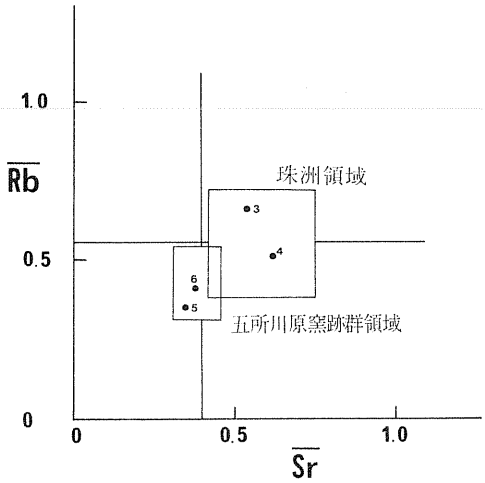
26……第45図７



第50図　石名館遺跡出土須恵器のRb－Srの分布図



第51図　オホン清水北遺跡出土須恵器のRb－Srの分布図



第52図　大鳥井山遺跡出土須恵器のRb－Sr分布図

第5章　ま　と　め

明治時代そして昭和初期に発掘が行われた区域では、厚い黒色土の遺物包含層と泥炭層が確認され、多量の遺物が出土した。その出土遺物もほとんど散逸しているが、個人コレクションや博物館の収蔵資料の中に「羽後国石名館出土」として見出すことができる。

今回の調査では、縄文時代中期から晩期、平安時代の遺物が多量に出土しているが、そのほとんどが青色砂礫層中からの出土であり、黒色土中からの出土は僅少であった。

青色砂礫層中から各時代・時期の遺物が混在して出土し、その多くが表面を磨滅させていることから今回の調査区域は、原位置を離れた遺物の堆積地点として把えることが可能である。

堆積土層の観察によれば、この砂礫層上部に堆積する粘土層は、17～19グリッドの区域では薄く、1～10グリッドの区域では厚い。特に10グリッドから1グリッドに向かって層厚が大きくなることは、扇状地の先端部に近いという自然地形による堆積状況を示すものである。しかし、1～10グリッド間の粘土層直下の青色砂礫層中からの出土遺物が皆無であることは17～19グリッド間の多量出土とは極めて対照的であり、また、昭和初期の調査と予備調査で確認されていた泥炭層が検出できなかったことは用水路として何度も開削されたという事実があるにしても、地形成因とあわせ更に検討する必要がある。

破片数の多寡が遺跡の時期別盛衰を直接的に表現するとは言えないが、縄文時代晩期前葉後半から中葉にそのピークがあったように推定される。土器は器形、胎土、文様技法、文様構成、焼成等の諸特徴を総合的に判断して時期・様式を決めなければならないが、出土した土器の大多数が小破片という本遺跡では、小さな破片上に表われた特徴から判断せざるを得ず、従来の土器編年に基づいて概観するにとどまった。晩期の壺形土器片には両面とも赤色に塗布されているものが多い。水銀朱か酸化鉄を漆に混合して顔料とするが、化学分析していないため単に「赤色顔料」と表記した。

石器では、不整楕円形を呈し、弧状を呈する長辺の片側両面にアスファルト様の付着物が認められる石器が注目される。分類上掻器としたが、晩期の土器に伴出する例が増加しつつあり石器の機能・使用方法を検討する必要がある。

器形・製作上の特徴等から選択した11点の須恵器について三辻利一教授の御厚意により行った蛍光X線分析法による胎土分析・産地推定では、北方約24kmに所在する成沢窯跡で生産されたものが多いという結果が得られた。

横手盆地・仙北平野の縁辺部には多くの須恵器窯跡がその存在を知られているが供給先を推定するまでには至っていない。須恵器の産地推定は、県内では八森町土井遺跡に次いで2遺跡目であり、これが須恵器生産と流通の問題を解明する手がかりとなると考えられる。

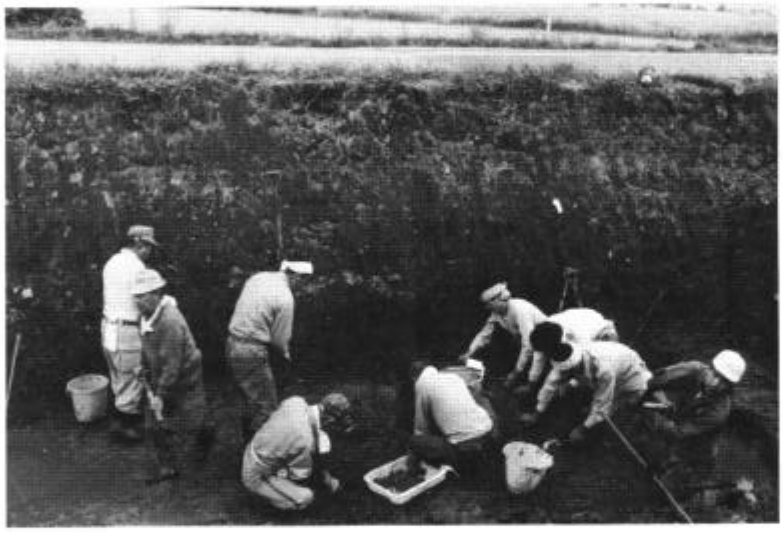
図版1　航空写真（○は遺跡）

15G～19G

1 G～10G

図版　2　調査前現況

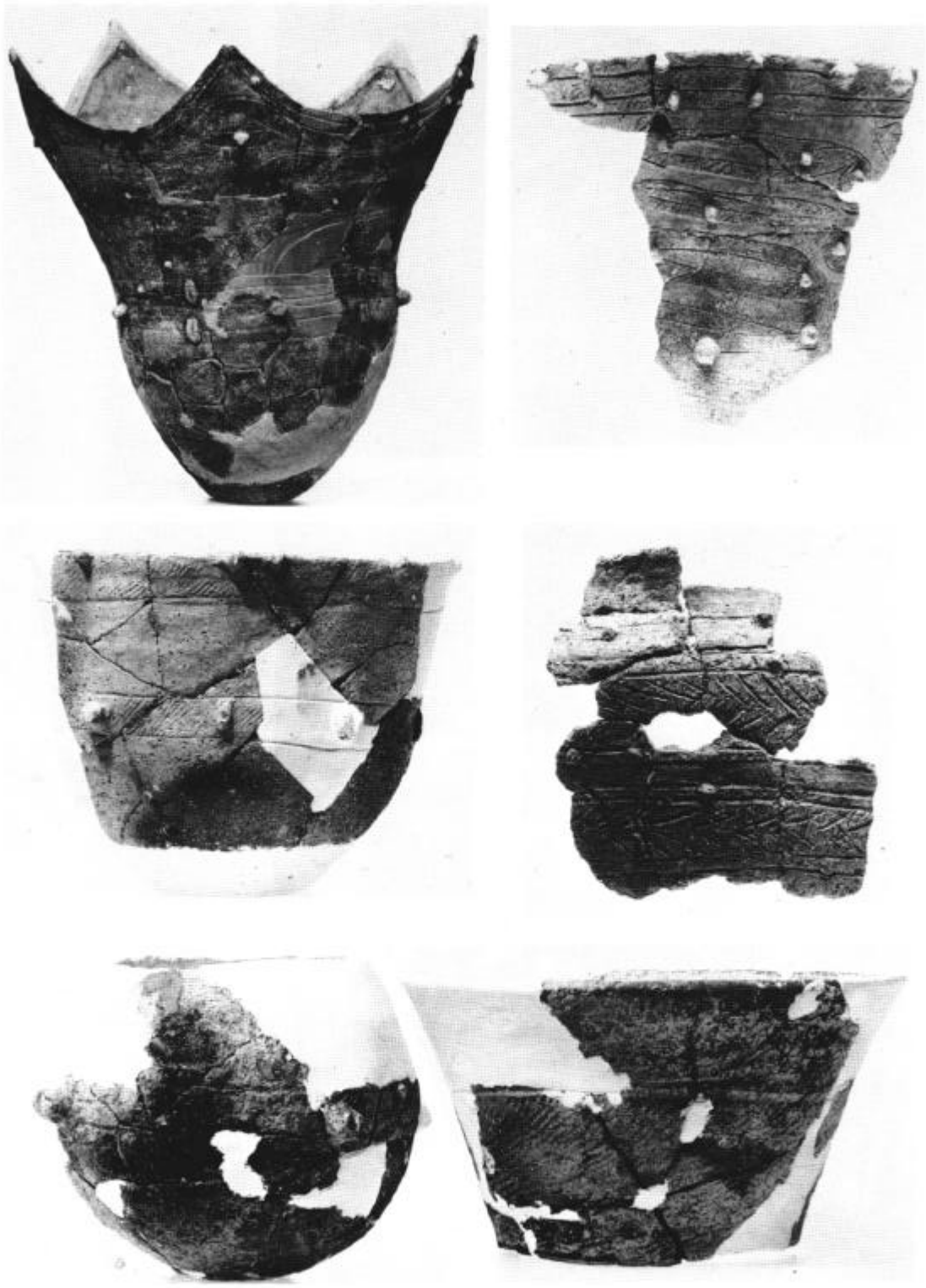
17G～19G



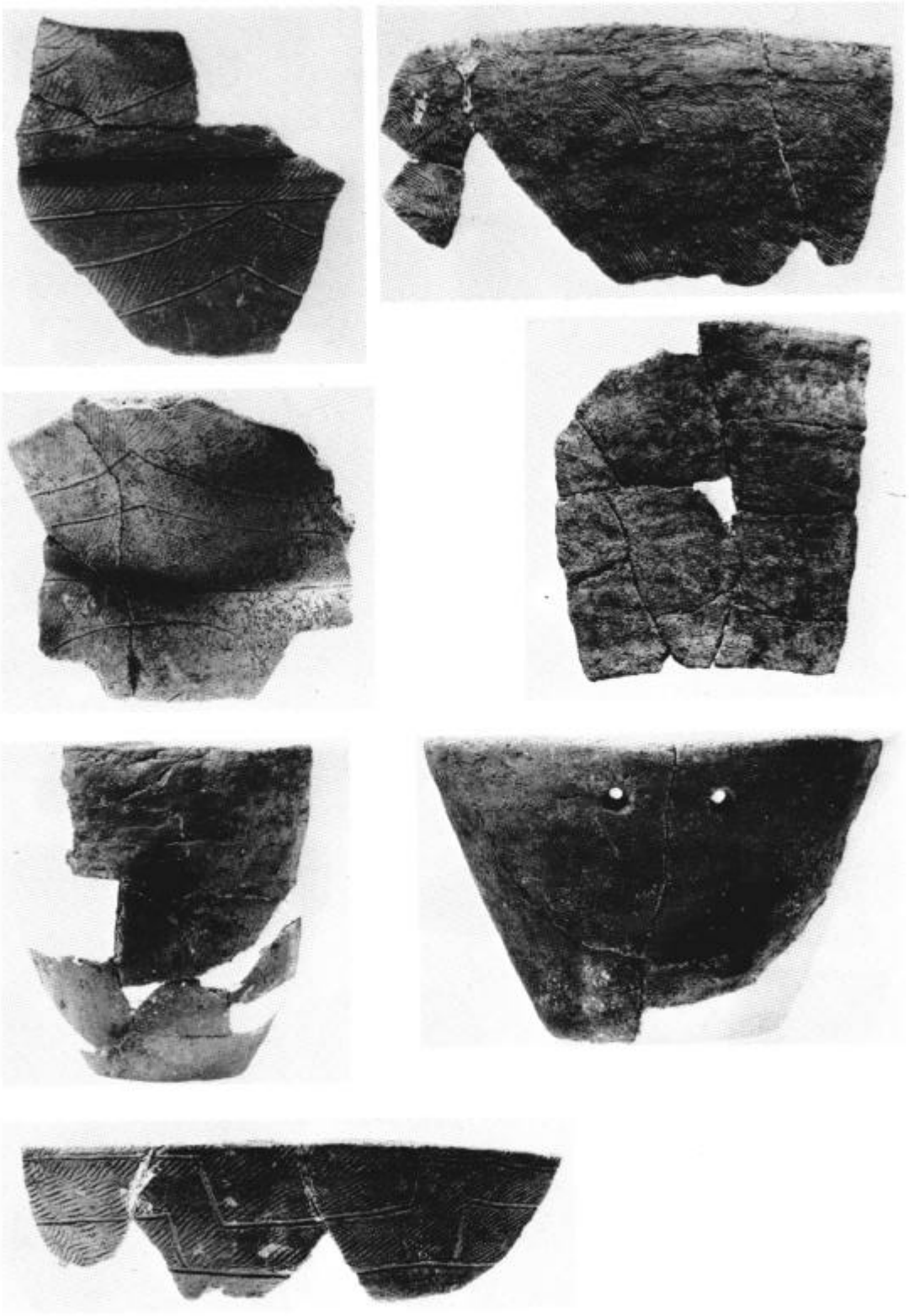
18G

15G
予備調査時

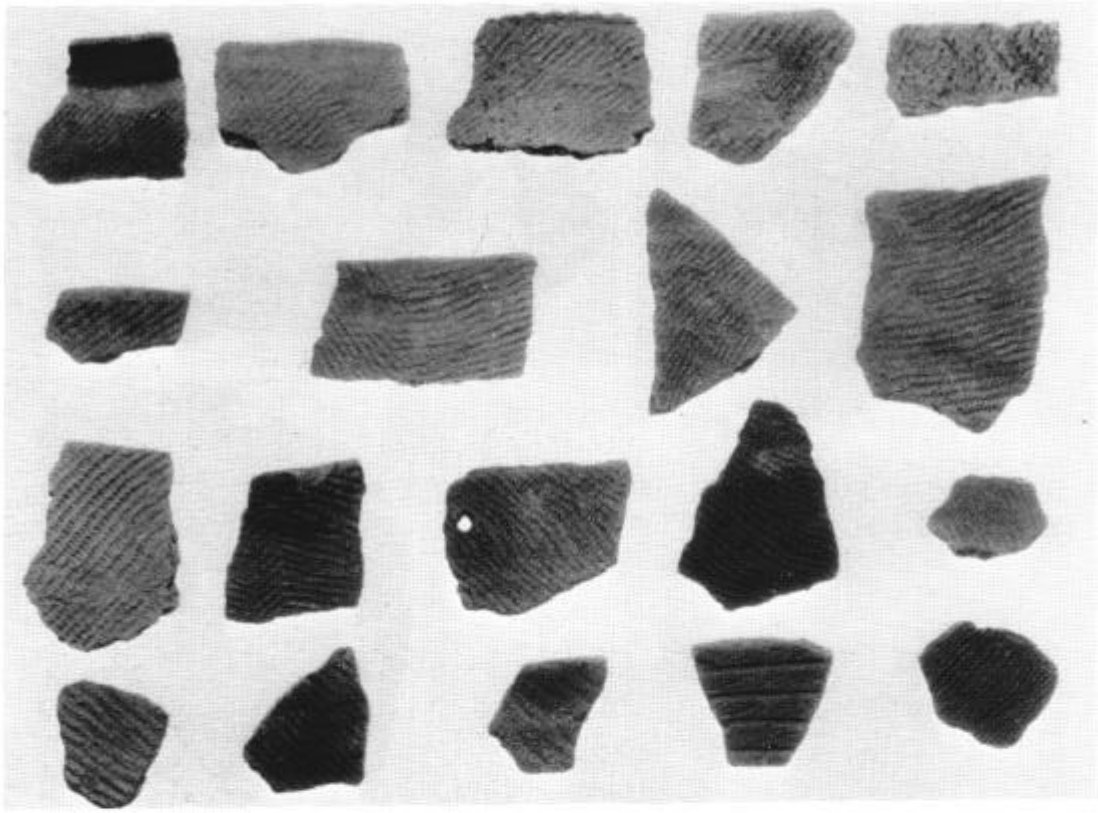
図版 3　発掘調査状況

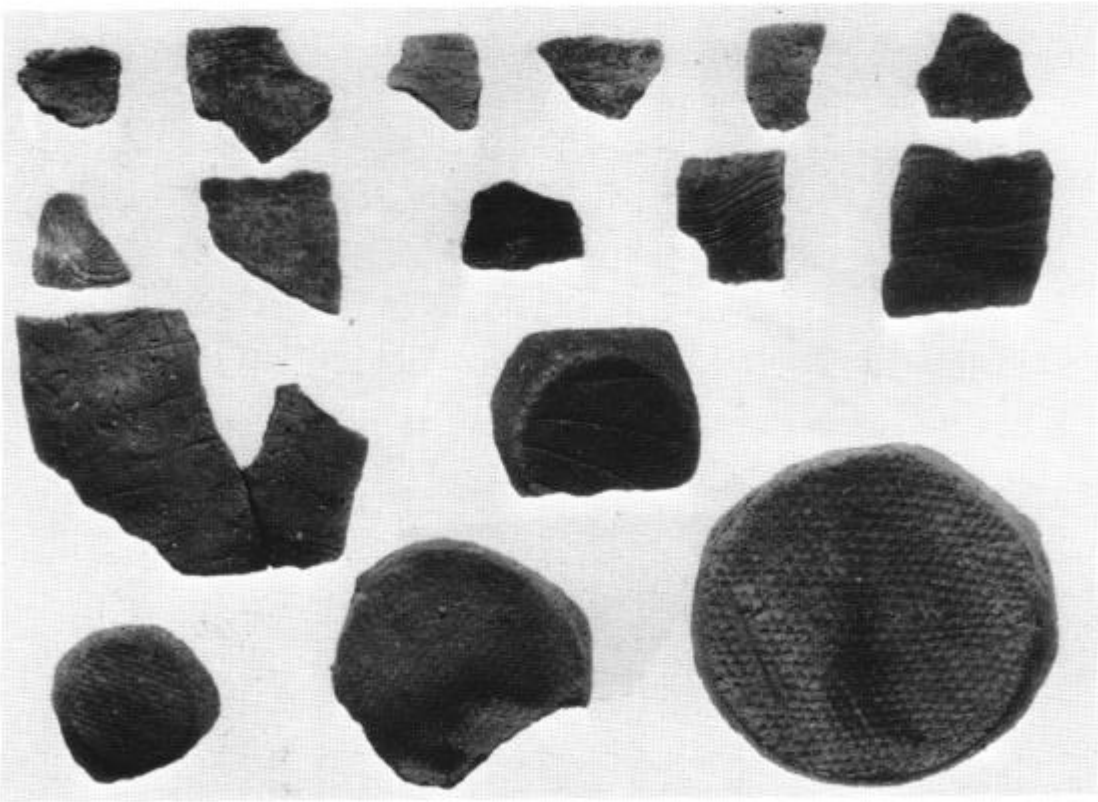


図版 4　出土土器(1)

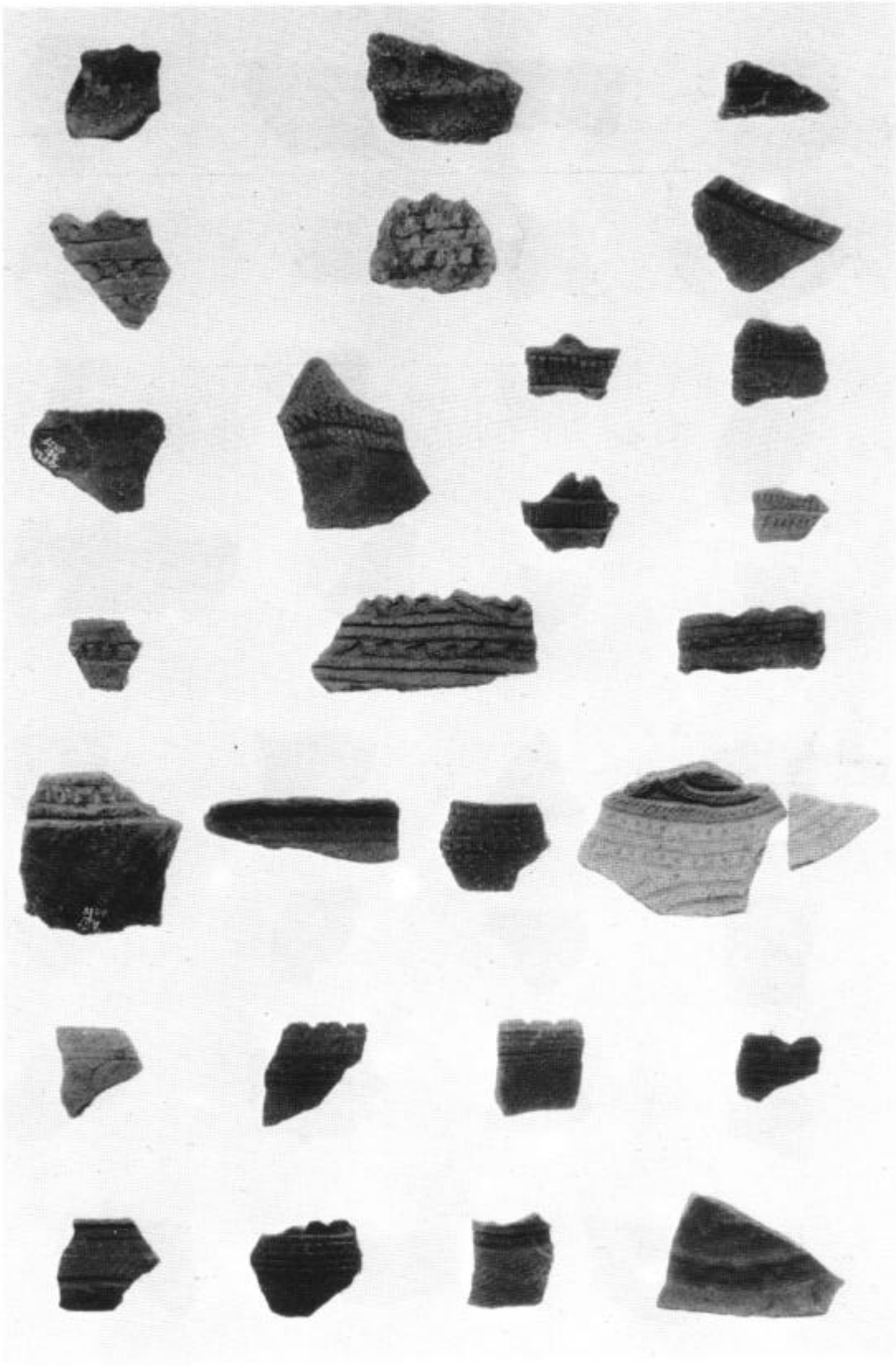


図版 5　出土土器(2)

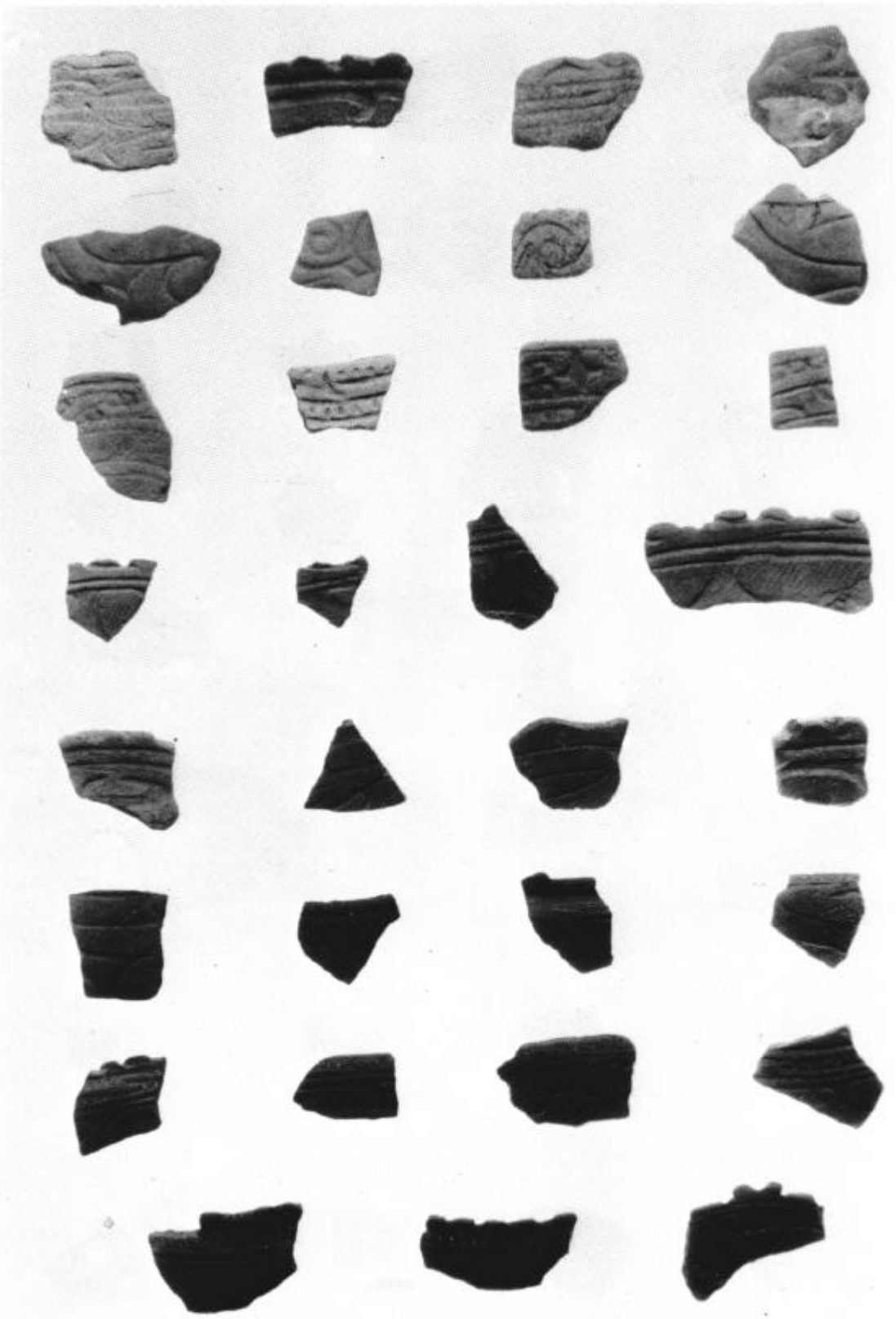




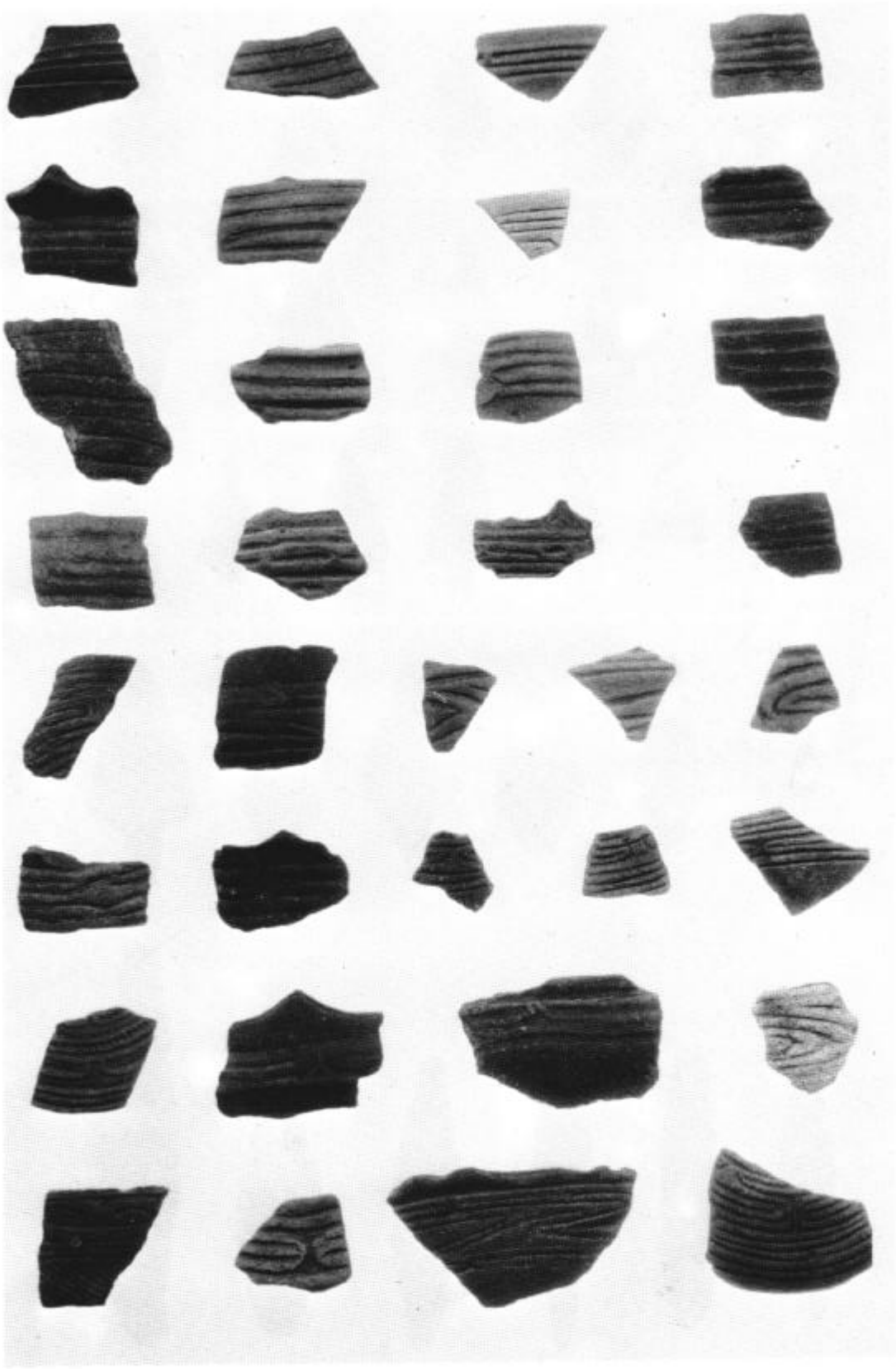
図版 6　出土土器(3)



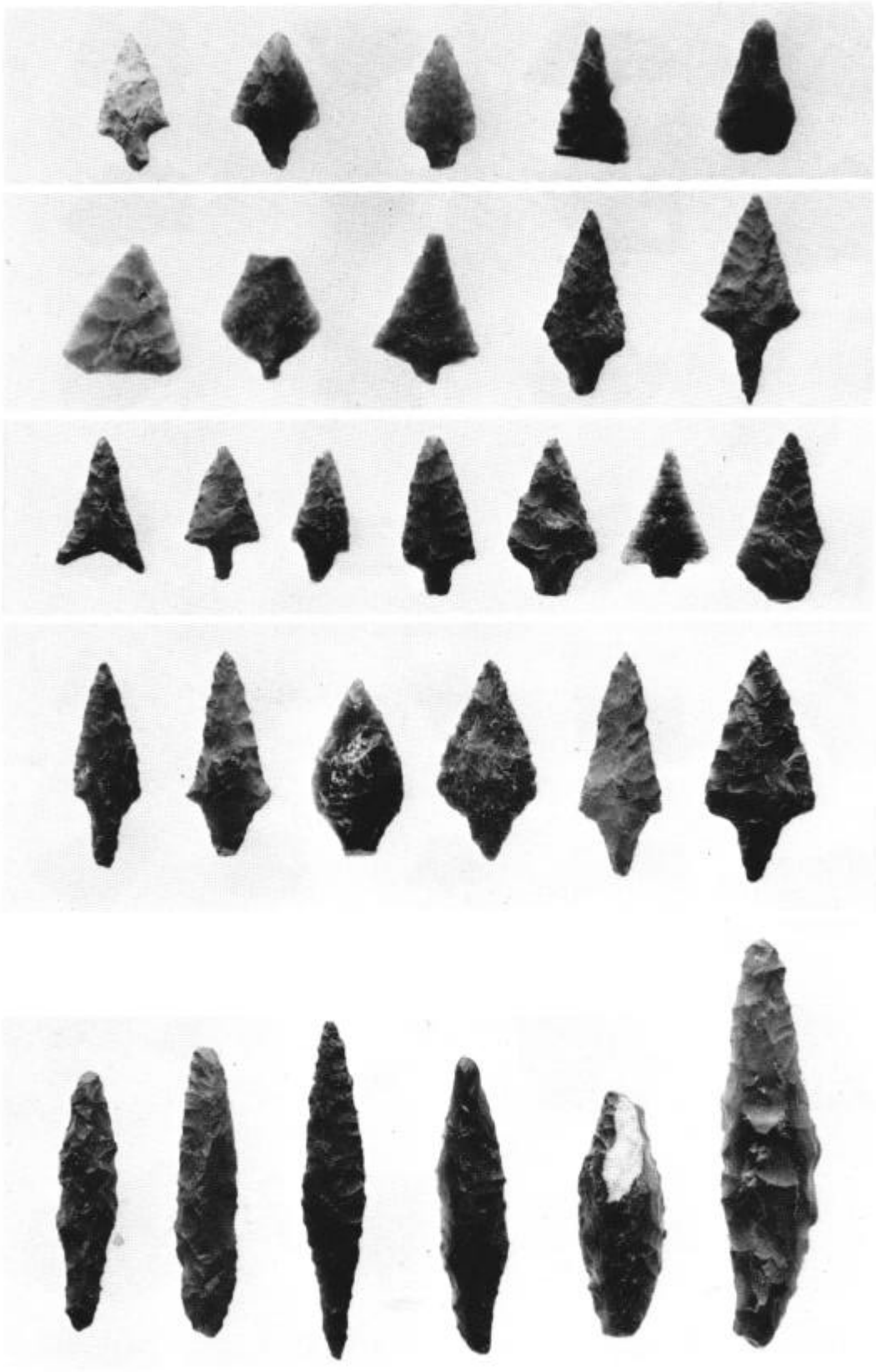
図版 7　出土土器(4)



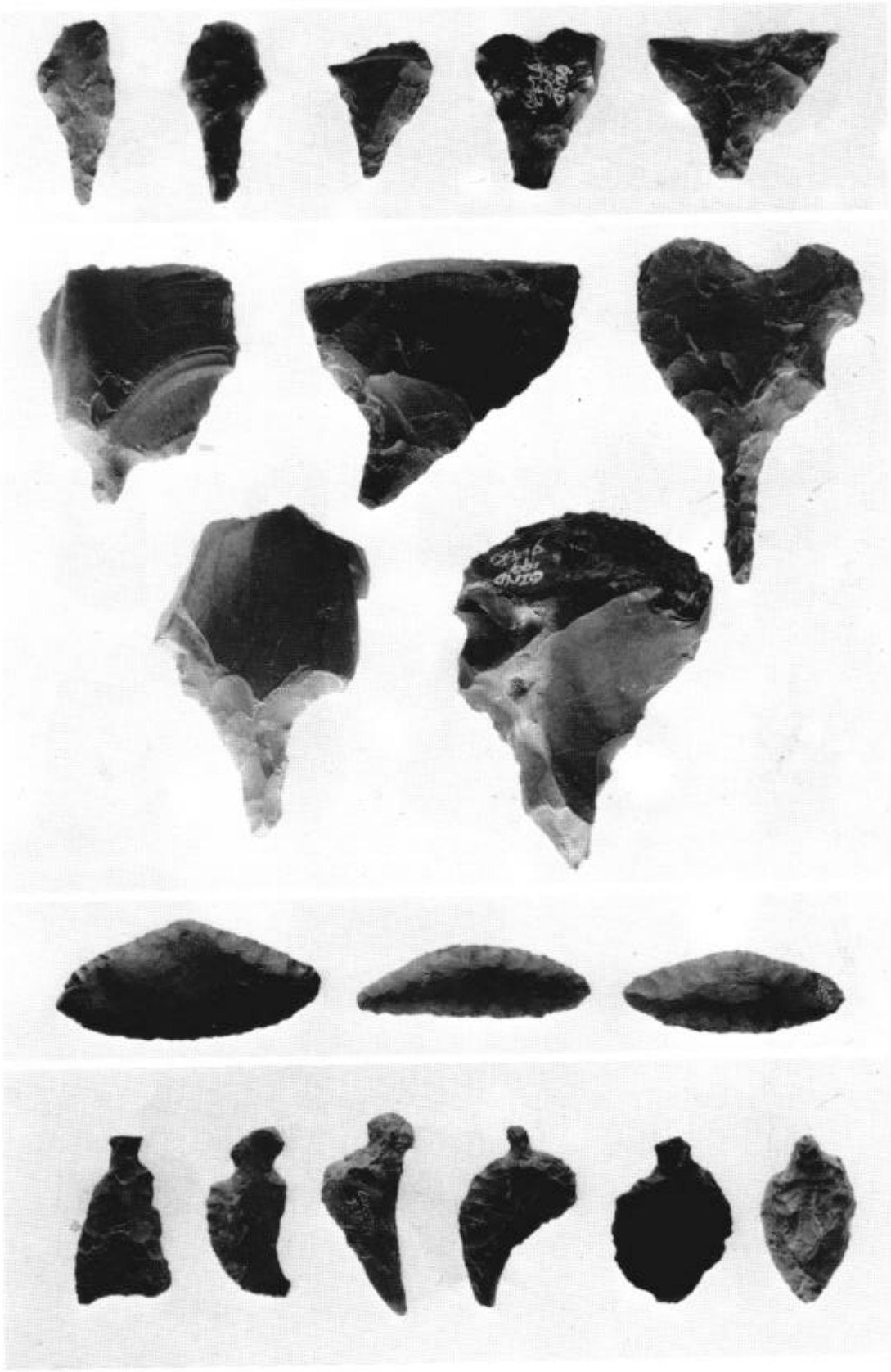
図版 8　出土土器(5)



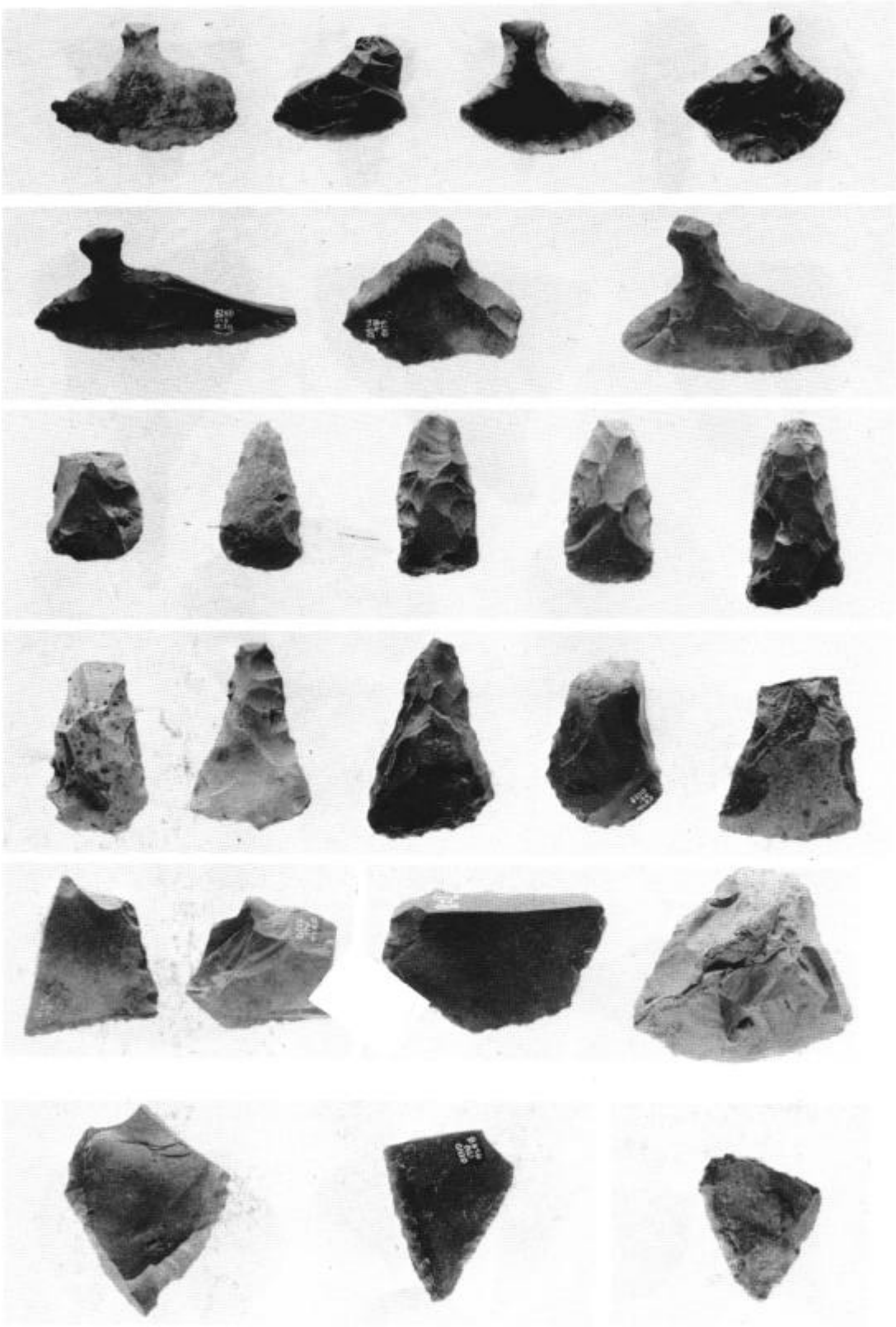
図版 9　出土土器(6)



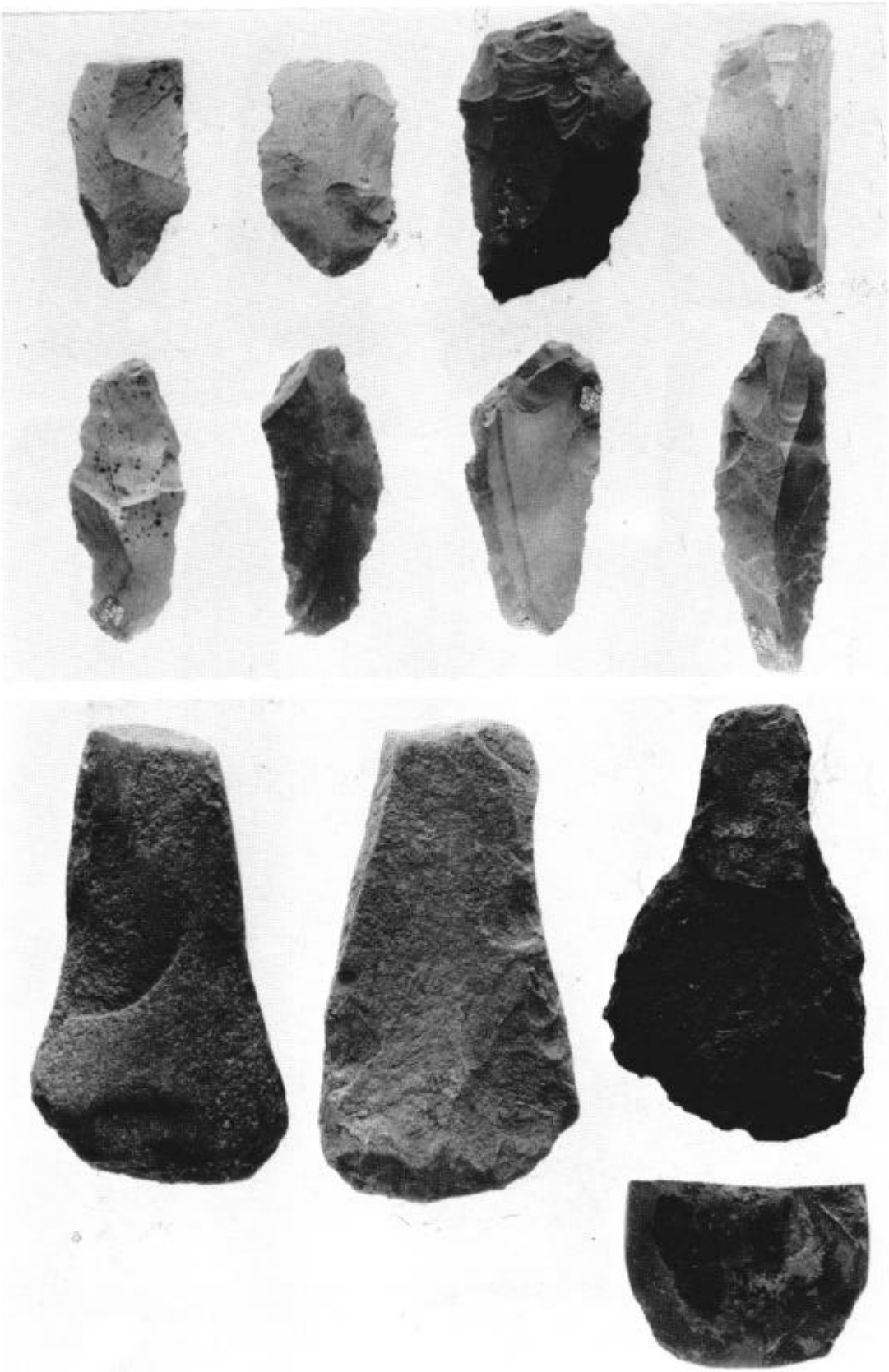
図版10　石鏃・石槍



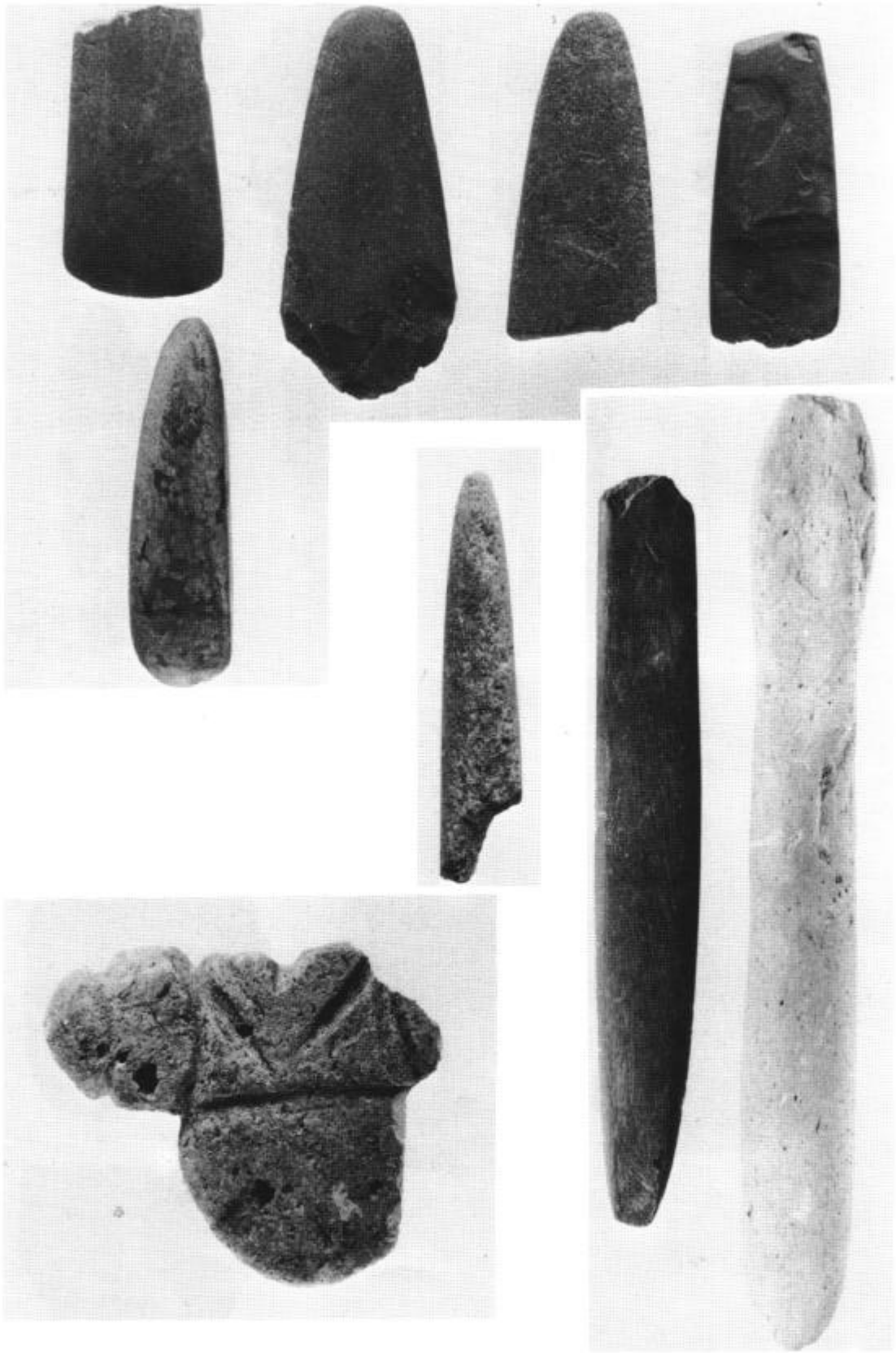
図版11　石錐・掻器・石匙



図版12　石匙・箆状石器・不定形石器



図版13　不定形石器・打製石斧



図版14　磨製石斧・石刀・石剣・岩偶